

		理学療法学科 夜間部			
科目	心理学	単位	1	コマ数	8
担当講師	小野寺 哲夫	学 年		1年生	
資格	公認心理師・臨床心理士				

科目概要	心理学は、全ての医療専門職の基礎となる学問であるとの観点から、学生は科学としての心理学が140年前に誕生して以来、どのようなことが研究され、どのようなことが明らかになってきたのかについて、有名な心理学実験なども含めて学ぶ。そして心理学の知識が、私たちの日常生活や人間理解にどのように関係し、また自己理解や他者理解、障害を持った患者の心理の理解や精神的健康の増進のためにどのように適用できるのかなどについて理解することができる。また、この授業では、国家試験を見据えて、幅広い心理学分野の中でも、特に国家試験出題頻度の高い分野に絞り込んで行われるので、学生は試験に出る内容を効率よく修得することができる。				
学習の留意点	心理学の授業では、心理学全般について学んでいくが、半期（8コマ）の授業回数であるため、PTの国家試験に頻出する領域を中心にセレクトし、その分野にフォーカスして、対面型の講義形式で授業を行う。講義形式であるが、アクティブラーニングを意識し、心理テストの実施、ペアディスカッション、リアクションペーパーの毎回の実施などを取り入れて、学生の主体性や能動的参加を促進する。				
到達目標	①心理学の4つのパラダイムの特徴について説明できる。 ②学習心理学の3つの学習理論について説明できる。 ③記憶過程と記憶の分類について理解し、個々の記憶の特徴について説明できる。 ④心理学の授業で学んだ知識が、どのように国家試験問題として出題されているのかについて説明できる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	臨床心理学	人間発達学		精神医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	心理学研究法と定義と歴史	心理学の定義、学問的位置づけ・心理学研究法、心理学の4つのパラダイムについて説明できる。
2回	知覚心理学における精神物理学	精神物理学とゲシュタルト心理学について説明できる。
3回	知覚心理学におけるゲシュタルトの原理	ゲシュタルトの法則や知覚の恒常性、パターン認知、注意の特徴、特に「選択的注意」について説明できる。
4回	学習心理学における古典的条件づけ	パブロフの古典的条件づけについて、適切な専門用語を用いて説明できる。
5回	学習心理学におけるオペラント条件づけ	オペラント条件づけについて理解し、その応用である「応用行動分析学(ABA)」の三項随伴性の原理について説明できる。
6回	学習心理学における社会的学習理論	社会的学習理論について理解し、バンデューラの「モデリング実験」について説明できる。
7回	記憶心理学におけるの記憶分類	心理学における記憶分類、感覚記憶、短期記憶、長期記憶（手続的記憶・宣言的記憶などについて説明できる。
8回	ワーキングメモリと忘却	ワーキングメモリと4つの忘却説について説明できる。

成績評価	期末レポート課題（90％）、毎回のミニレポート課題（10％）で評価する。
課題やレポートに関するフィードバック	毎回のミニレポート課題は、授業で学んだ内容について、感想や自分の意見、質問等を比較的自由に書いて提出する。毎回の授業において教科書は必ず使用する。
使用教材 教科書	PT・OTのための心理学・臨床心理学 JFAパブリッシング 小野寺哲夫
オフィスアワー	水曜日の夜間部授業前後（不在の場合はメールで相談してください）

		理学療法学科 夜間部			
科目	導入演習	単位	2	コマ数	15
担当講師	高橋 豊	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	理学療法士の働く臨床現場では、他職種との連携が欠かせない。それぞれの職種が患者や利用者様の治療目標・介護目標等に向かって仕事をしている。それぞれの専門家が協働することでチーム力が高まり目標が達成できるため、お互いの仕事の進み方などを知る必要がある。実習に向けて学び、臨床現場で理学療法士がどのように働いているのか意識できるように、様々なグループワークを通して多角的な視点（他者の視点）や思いがあることに気づける態度を養う。				
学習の留意点	前期から専門基礎を学び、同時期にグループワークを通して、合意形成する過程を経てチームで連携することを学ぶ。また合意形成した内容からグループで発表することも学び、理解を深める。				
到達目標	グループワークを通して思考・創造し、記述・口述できる。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		実習	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	オリエンテーション	オリエンテーション(授業・実習等)
2回	オリエンテーション	学校生活および自宅での時間の使い方を考える
3回	自尊心/時間の使い方	自尊心・患者の時間・理学療法士の時間を考え理解する
4回	自尊心/時間の使い方	自分の時間・スケジュール管理・スマホの使い方について考える
5回	自分を知ること相手を知ること	自分を伝えること(自己紹介)ができる
6回	自分を知ること相手を知ること	相手から聴き出すこと(病歴聴取)ができる
7回	考えをまとめること(1)学習の一手段	解剖学グループワークにて理解を深める
8回	考えをまとめること(1)学習の一手段	生理学グループワークにて理解を深める
9回	考えをまとめること(2)学習の一手段	解剖学グループワークにて理解を深める
10回	考えをまとめること(2)学習の一手段	生理学グループワークにて理解を深める
11回	考えをまとめること(3)学習の一手段	解剖学グループワークにて理解を深める
12回	考えをまとめること(3)学習の一手段	生理学グループワークにて理解を深める
13回	チームで協力する力	解剖学グループワーク(発表)にて理解を深める
14回	チームで協力する力	生理学グループワーク(発表)にて理解を深める
15回	まとめ	専門基礎総復習にて理解を深める

成績評価	1. 授業確認試験 2. 授業内提出物
課題やレポートに関するフィードバック	グループワーク中は、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。
使用教材 教科書	解剖学・生理学の教科書 担当教員が作成した配布プリントを使用
オフィスアワー	高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	人間関係学	単位	2	コマ数	15
担当講師	川村 啓輔	学 年		1年生	
資格	臨床心理士・公認心理師				

科目概要	人間関係やコミュニケーションにおける基礎的な知識，それらに対する臨床心理学的な理解について解説します。また，これらの内容がより実践的に理解できるよう，ロールプレイ，事例検討も行います。		
学習の留意点	対人援助職を志すみなさんにとって，人間関係やコミュニケーションに関する知識をつけることは必須です。この講義では，人間関係やコミュニケーションの基礎的な知識について講義，ロールプレイ，その内容に関するグループディスカッションを中心に行います。加えて，実際の心理療法場面で用いられる投影法や描画法の擬似的な体験をしていただきます。人を相手にする職業は，相手だけでなく，同時に自分自身に向き合う必要があります。ですので，講義を聴講するだけでなく，自分自身が体験をとおして，どのように心が動き，何を感じるのかという，皆さんの内的な体験も大切にしたいと考えています。		
到達目標	臨床現場で必要とされる最も基礎的な能力は人間関係を築く力です。そのためには，人間関係やコミュニケーションに関する知識を身につけることが大切です。また，それと同時に，自分自身を知ることや他者を知ろうとすることも大切なことです。この講義では，これらのことを心がける上で必要な知識の習得を目指します。対人援助職としても，また，一人の“人”としても，他者の視点を持って，人と関われるということは大切なことです。このような，コミュニケーションの“核”となるものを身につけることを目標とします。		
授業形態	対面の講義		
関連科目			

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	オリエンテーション	講義内容・進め方，評価についての確認
2回	話を“聴く”こと□	対人援助職とは，感情労働，バーンアウトについて理解を深める。
3回	“私”とは□	心の構造や発達理論的に見た“私”について理解を深める。エゴグラムの実施により，自分自身を理解する（レ）。
4回	私と私ではないもの	自我親和性と自我異和性について理解を深める。また，バウムテストをとおして，自分自身を理解する。
5回	コミュニケーション①	コミュニケーションについて，カウンセリングの技法について理解を深める。
6回	投影法の体験	ロールシャッハテストを擬似体験し，“共感すること”を実践的に学ぶ（レ）。
7回	コミュニケーション②	コミュニケーションの中で使っているスキルについて理解を深める。
8回	イメージを使った交流	描画法をとおして，イメージを使った交流を体験する（レ）。
9回	コミュニケーション③	人間関係の深層で起こっていることについて理解を深める。
10回	描画法の体験	風景構成法をとおして，自分自身の内的世界を感じる（レ）。
11回	心と身体とイメージ	心と身体の繋がりについて，事例を踏まえながら理解を深める。
12回	見立てと発達理論	発達理論について理解し，それをもとにクライアントを見立てることについて理解を深める。
13回	精神疾患と発達障害について	精神疾患や発達障害について，事例をとおして理解を深める。
14回	事例検討	教科書に載っている事例を使い，見立てや方向性についてグループで話し合い，事例にコミットメントする力をつける。
15回	まとめ	全体のまとめ，学期末レポートについて

成績評価	小レポート4回，学期末レポートの提出で成績をつけます。小レポートとは，上記の行動目標のところに（レ）と書かれている回の内容について書いていただきます。				
課題やレポートに関するフィードバック	レポートは紙媒体で提出してください。講義の中で何度か感想を提出していただく場面がありますので，その際に疑問点や質問があれば，書いてください。その次の講義でお答えします。または，講師のメールアドレスを教えますのでメールでも良いです。もちろん，授業の前後の時間で直接お声掛けいただいても構いません。				
使用教材 教科書	教科書：PT・OTのためのコミュニケーション実践ガイド（医学書院） ※その他にも参考文献がいくつかありますが，その都度提示しますので，ご用意いただくのは，上記の教科書のみで構いません。				
オフィスアワー	授業前後の休憩時間				

		理学療法学科 夜間部			
科目	基礎演習	単位	2	コマ数	15
担当講師	高橋 豊	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	学生は1年前期から解剖学・生理学・運動学といった専門基礎を学び、後期から検査測定法や運動療法学を学んでいく。2年次は、専門基礎知識を基盤に疾患学や他の検査測定法、疾患別理学療法を学んでいく。そのため専門知識の理解が必須である。				
学習の留意点	グループワークを通して専門基礎科目などの医学用語や知識の理解をさらに深め、学んだ検査測定法を用いて、一部理学療法実技を行う。前後にアルコール消毒や身だしなみを整え、臨床現場に即した演習とする。				
到達目標	グループワークを通して思考・創造し、記述・口述できる。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		検査測定法	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	専門基礎(1)	専門基礎総復習にて理解を深める
2回	専門基礎(2)	解剖学Ⅱグループワークにて理解を深める
3回	専門基礎(3)	解剖学Ⅱグループワークにて理解を深める
4回	専門基礎(4)	解剖学Ⅲグループワークにて理解を深める
5回	専門基礎(5)	解剖学Ⅲグループワークにて理解を深める
6回	専門基礎(6)	解剖学Ⅲグループワークにて理解を深める
7回	専門基礎(7)	生理学Ⅱグループワークにて理解を深める
8回	専門基礎(8)	生理学Ⅱグループワークにて理解を深める
9回	専門基礎(9)	生理学Ⅲグループワークにて理解を深める
10回	専門基礎(10)	生理学Ⅲグループワークにて理解を深める
11回	人間発達学	人間発達学グループワークにて理解を深める
12回	機能解剖学	機能解剖学グループワークにて理解を深める
13回	検査測定法	ROM-t・四肢周径の理解を深める
14回	検査測定法	MMTの理解を深める
15回	まとめ	専門基礎総復習にて理解を深める

成績評価	1. 授業確認試験 2. 授業内提出物
課題やレポートに関するフィードバック	実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。
使用教材 教科書	解剖学・運動学・生理学・理学療法評価の教科書 担当教員が作成した配布プリントを使用
オフィスアワー	高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	保健体育	単位	2	コマ数	15
担当講師	小平 健太郎	学 年		1年生	
資格	NSCA-CSCS, NSCA-CPT, 体育学修士				

科目概要	運動の重要性は近年特に叫ばれているが、方法によっては逆効果にもなるリスクも潜んでいるため対象者に合わせた適切な方法を経験則だけでなく知見として習得していくことが専門職としても求められる。 また、自身の動作での課題の発見や適した改善を図ることは自身の健康を保つためにも必要である。 講義における基礎知識の習得だけでなく演習やグループディスカッションを通じて、多方面から運動や動作について考える時間を設ける。				
学習の留意点	講義を踏まえて運動が身体にもたらす影響について総合的に考察したものを課題として出題する。講義内では授業課題に沿った課題を出題する。				
到達目標	①現代社会において運動が必要とされている背景を説明できる。 ②運動の有効性だけでなくリスクについて説明できる。 ③障がい者スポーツについてその起源や必要性について説明できる。 ④様々な形のスポーツについて説明できる。 ⑤感覚に制限がある中で運動を体験し、その感覚を説明できる。 ⑥既存のスポーツに対して対象者に合わせた柔軟な変更を試行できる。				
授業形態	講義・演習		対面と遠隔の併用授業		
関連科目					

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	運動の有効性	現代で運動が求められる理由が説明できる/運動の有効性を説明できる
2回	運動のリスク	運動が身体にもたらすリスクを学び、知っておくべき安全配慮や応急手当を説明できる。ウォーミングアップの重要性とその内容について説明できる
3回	体力測定①（体力レベルチェック）	自身の体力レベルをチェックし、ロコモテストを実践できる
4回	体力測定②(年代別の体力測定種目の違い)	年代別の体力測定種目を学び実践できる
5回	動作改善演習①（柔軟性・可動性改善演習①）	柔軟性と可動性の違いを理解し、改善までを説明できる
6回	動作改善演習②(柔軟性・可動性改善演習②)	①を踏まえてグループワークに取り組める
7回	障がい者スポーツ①（歴史と競技の理解）	障がい者スポーツの歴史と競技を知り、説明できる
8回	障がい者スポーツ②（障がい者スポーツの疑似体験）	障がい疑似体験を通して感覚を体感し説明できる
9回	動作改善演習③（トレーニングフォーム、動作改善演習①）	トレーニングフォーム、動作の改善を実践する
10回	動作改善演習④	動作改善演習①を踏まえてグループワークに取り組める
11回	睡眠、嗜好品	睡眠のメカニズム、嗜好品が心身に与える影響を知る
12回	スポーツ科学の応用	映像学習によりスポーツ科学分野での知見の応用を説明できる
13回	様々なスポーツの形	レクリエーションスポーツ・ゆるスポーツを知り、さまざまスポーツのあり方を理解する
14回	行動変容	運動・スポーツへの参加を促すための行動変容手法を学びながら、コミュニケーションスキルを身に付ける
15回	総合演習	運動が身体にもたらす影響について総まとめとしての課題に取り組むことができる

成績評価	レポート試験：70%、講義内課題30%の合計100%で評価する。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。
課題やレポートに関するフィードバック	FBは全体に対して実施する
使用教材教科書	百寿時代の運動・スポーツのトリセツ ―日本臨床スポーツ医学会からの提案― (著書名:日本臨床スポーツ医学会学術委員会/出版社名：有限会社ナッパ)
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	英語	単位	1	コマ数	8
担当講師	黒木 豊城	学 年		1年生	
資格	米国ユタ州プロボ市ワサチ・メンタルヘルスセンターでのセラピストの経験をもとに、クライアントと英語での対話の訓練を行ないます。				

科目概要	グローバル化するわが国において、外国人観光客・在留外国人は年々増加傾向にある。これに伴い、PT・OTが外国人患者への支援行う機会の増大が見込まれている。この科目では、PT・OTが、英語にて患者に接し、医療用語を用いてリハビリ現場で会話ができるようになることを目指す。すなわち、最初の接遇からはじまり、問診、説明、肢位の指示などの特定の状況における会話を英語でできるようになるために、ロールプレイ演習を行う。中学や高等学校教育の英語と異なり、会話する英語の習得を目標とし、毎回の授業は声を出して話すことに焦点が当てられている。また、人体や施術に関わる英語の専門用語を習得することも目標としている。				
学習の留意点	英語の学習のための英語の学習ではなく、実践現場におけるコミュニケーションのための英語学習を行う。コミュニケーションとは、相手との意思疎通であり、言語は手段の一部でしかない。それを念頭に、非言語、すなわち、表情、身振り手振り、に焦点をあてた英会話訓練を行う。毎回の授業はロールプレイの台本を作成し、ペアでの練習を行い、発表を繰り返す。また、英語が聞き取れるようになるためのコツを授業を通じて学習する。これらを通じて英会話上達の方法を習得し、生涯を通じて多言語力を高めていく能力の基礎を身に着ける。英会話力が格段に上達する期待を持って授業に取り組んで欲しい。				
到達目標	1．人体に関してや一般的な医療用語の英単語を覚え活用することができる 2．支援現場において用いることのできるフレーズを活用できる 3．支援現場における英会話を構成し、活用できる。				
授業形態	ロールプレイの練習				
関連科目					

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	Introduction ロールプレイ 1：笑顔と挨拶 次回の単語	授業の目的と学習方法、達成課題について理解する。表情を乗せた挨拶ができるようになる
2回	ロールプレイ 2：痛む部位を聞いてみよう 単語テスト 1	問診において、痛む部位について尋ねることができる。
3回	ロールプレイ 3：痛みの種類や程度を聞いてみよう 次回の単語	痛みの種類や程度をたずねることができる。
4回	ロールプレイ 4：痛みの経過を聞いてみよう 単語テスト 2	痛みの経過を尋ねることができる
5回	ロールプレイ 5：基本的な肢位を指示してみよう 次回の単語	基本的な肢位を指示できる
6回	ロールプレイおまけ：バイタルサインを確認しよう 単語テスト 3	バイタルサインを確認できる
7回	試験のためのロールプレイの練習	感情に基づいた表情やジェスチャー、声の抑揚を添えたコミュニケーションとしての英語表現ができる
8回	単語試験 とLong Play試験	ペアによるロールプレイ試験

成績評価	成績は以下の合算による： 1．単語テスト（各10点：合計30点） 2．ロールプレイ・ショート（各5点：合計25点） 3．定期試験：単語試験 25点 4．定期試験：ロールプレイ・ロング 20点
課題やレポートに関するフィードバック	毎回のロールプレイにおいて次の項目において随時その場で評価をフィードバックする。 ・表情豊かに話すことができた ・メリハリのある声で話すことができた ・大きなジェスチャーを使えた ・例文にアレンジを加えた ・暗記しパフォーマンスできた
使用教材 教科書	配布プリントによる
オフィスアワー	無し

		理学療法学科 夜間部			
科目	解剖学Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	春原 正隆	学 年		1年生	
資格	歯科医師・博士（医学）				

科目概要	人体の正常構造を理解するために理学療法士に必要となる解剖学的基礎知識を修得するため、人体を構成する諸器官を系統別に学習する。解剖学Ⅰでは、人体各部位の骨格および関節・靱帯を講義・課題を通して3次元的に理解する。	
学習の留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には 単位を認定しない。	
到達目標	1) 基礎医学の最重要科目である解剖学の定義および目的について説明できる。 2) 人体の構成要素および発生のメカニズムについて説明できる。 3) 運動器系を構成する人体各部位の骨の名称および関節の構成・形態的特徴および働きについて説明できる。	
授業形態	対面授業	講義
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 運動療法学Ⅰ・Ⅱ, リハビリテーション医学概論Ⅰ・Ⅱ疾患別理学療法Ⅰ, PT技術論全般	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	解剖学総論	解剖学とは（定義・目的），解剖学用語，人体の区分，人体の腔所（p.3～8）について説明ができる
2回	人体の構成	細胞，組織，器官・器官系・個体（p.9～20）について説明ができる
3回	人体の発生①	胚子の発生，器官系の発生①（p.21～34）について説明ができる
4回	人体の発生②	器官系の発生②，胎児の発生，出生後（p.24～36）について説明ができる
5回	骨格総論	骨の形態，骨の構造，骨の血管と神経，骨の機能，骨の発生，骨のモデリング（p.37～45）について説明ができる
6回	骨格各論①	頭蓋骨（p.46～57）について説明ができる
7回	骨格各論②	脊柱，胸郭（p.58～67）について説明ができる
8回	骨格各論③	上肢の骨（p.68～77）について説明ができる
9回	骨格各論④	下肢の骨（p.78～92）について説明ができる
10回	関節靱帯総論	骨の連結，関節の構造と機能（p.97～112）について説明ができる
11回	関節靱帯各論①	頭蓋の連結，脊柱，脊柱と頭蓋および胸郭の連結（p.113～122）について説明ができる
12回	関節靱帯各論②	上肢の連結①（p.123～136）について説明ができる
13回	関節靱帯各論③	上肢の連結②（p.123～136）について説明ができる
14回	関節靱帯各論④	下肢の連結①（p.137～154）について説明ができる
15回	関節靱帯各論⑤	下肢の連結②（p.137～154）について説明ができる

成績評価	定期試験
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学 解剖トレーニングノート
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	解剖学Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	春原 正隆	学 年		1年生	
資格	歯科医師・博士（医学）				

科目概要	人体の正常構造を理解するために理学療法士に必要となる解剖学的知識を修得するため、人体を構成する諸器官を系統別に学習する。解剖学Ⅱでは、人体各部の筋系および神経系を中心に講義・課題を通して3次元的に理解する。		
学習の留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には 単位を認定しない。		
到達目標	1) 生体を構成する各筋の名称を列挙し、筋の形態的特徴、起始・停止および作用について説明できる。 2) 神経系の構成および中枢・末梢神経の区分について説明できる。 3) 脳・脊髄の形態的特徴や働きについて説明できる。 4) 各脳神経の名称、構造、分布、働きおよび特徴について説明できる。		
授業形態	対面授業	講義	
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 運動療法学Ⅰ・Ⅱ, リハビリテーション医学概論Ⅰ・Ⅱ疾患別理学療法Ⅰ, PT技術論全般		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	筋系総論①	筋組織の種類と特徴，骨格筋の構造（p. 161～170）について説明ができる
2回	筋系総論②	骨格筋の作用，骨格筋の神経支配（p. 171～176）について説明ができる
3回	筋系各論①	体幹の筋①（p. 177～195）について説明ができる
4回	筋系各論②	体幹の筋②（p. 177～195）について説明ができる
5回	筋系各論③	上肢の筋①（p. 196～210）について説明ができる
6回	筋系各論④	上肢の筋②（p. 196～210）について説明ができる
7回	筋系各論⑤	下肢の筋①（p. 211～227）について説明ができる
8回	筋系各論⑥	下肢の筋②（p. 211～227）について説明ができる
9回	神経系総論①	神経系の区分，神経系の構成（p. 229～234）について説明ができる
10回	神経系総論②	髄膜と脳室系，神経系の発生（p. 235～240）について説明ができる
11回	中枢神経系①	脊髄，脳幹①（p. 241～251）について説明ができる
12回	中枢神経系②	脳幹②，小脳（p. 245～255）について説明ができる
13回	中枢神経系③	大脳（p. 256～267）について説明ができる
14回	末梢神経系①	脳神経①（p. 300～310）について説明ができる
15回	末梢神経系②	脳神経②，自律神経系（p. 300～314）について説明ができる

成績評価	定期試験
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学 解剖トレーニングノート
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	解剖学Ⅲ	単位	1	コマ数	15
担当講師	春原 正隆	学 年		1年生	
資格	歯科医師・博士（医学）				

科目概要	人体の正常構造を理解するために理学療法士に必要となる解剖学的知識を修得するため、人体を構成する諸器官を系統別に学習する。解剖学Ⅲでは、神経系、感覚器系および内臓器系を中心に講義・課題を通して3次元的に理解する。	
学習の留意点	授業時間数の3分の1を超えて欠席した者には 単位を認定しない。	
到達目標	1) 脊髄神経の構成および分布、働きについて説明できる。 2) 神経系の主要な伝導路について説明できる。 3) 感覚器の種類、形態的特徴および働きについて説明できる。 4) 体循環・肺循環および心臓の基本構造について説明できる。 5) リンパの流路およびリンパ節の構造について説明できる。 6) 消化管と消化腺の区分、各臓器の形態的特徴および働きについて説明できる。 7) 呼吸器・泌尿器の構成および内分泌腺・各種ホルモンについて説明できる。	
授業形態	対面授業	講義
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 運動療法学Ⅰ・Ⅱ リハビリテーション医学概論Ⅰ・Ⅱ疾患別理学療法Ⅰ, PT技術論全般	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	末梢神経系③	脊髄神経①（p. 278～300）について説明ができる
2回	末梢神経系④	脊髄神経②（p. 278～300）について説明ができる
3回	中枢神経系④	神経路（p. 268～277）について説明ができる
4回	感覚器系①	外皮，視覚器（p. 319～326）について説明ができる
5回	感覚器系②	平衡聴覚器，嗅覚器，味覚器（p. 326～330）について説明ができる
6回	循環器系①	血管系①（総論）（p. 335～340）について説明ができる
7回	循環器系②	血管系②（動脈）（p. 341～349）について説明ができる
8回	循環器系③	血管系③（静脈，リンパ系）（p. 350～357）について説明ができる
9回	呼吸器系①	鼻，咽頭，喉頭（p. 360～365）について説明ができる
10回	呼吸器系②	気管と気管支，肺，胸膜と縦隔（p. 366～369）について説明ができる
11回	内臓器系総論消化器系①	内臓器官の基本構造（p. 333～334） 消化管（口腔，咽頭，食道，胃，小腸，大腸）（p. 370～377）について説明ができる
12回	消化器系②	消化腺（肝臓，胆嚢，膵臓，腹膜）（p. 378～380）について説明ができる
13回	泌尿生殖器系①	泌尿器系（p. 384～389）について説明ができる
14回	泌尿生殖器系②	生殖器系（p. 390～396）について説明ができる
15回	内分泌系	ホルモンおよび標的器官，内分泌腺の種類（p. 398～404）について説明ができる

成績評価	定期試験
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学 解剖トレーニングノート
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	機能解剖学 I	単位	1	コマ数	15
担当講師	村井、土手、TA	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	・将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高いです。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認していきます。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行を確認する。 ・講義は2～3人一組で実技を行う。				
学習の留意点	将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高い。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認しく。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行を確認する。 実施内容を十分に記述することで理学療法記録を作成するのと同様の経験もしていただきたいと思います。 クラスメイト同士で行うとはいえ、丁寧に触らないとお互い学び合うことはできないので、爪切りやアクセサリの管理を徹底してください。またお互い十分に学ぶために不快なく、動かしやすい格好をしてください。 小テストで理解を深めていただきますので復習しましょう。				
到達目標	・講義を通して筋肉の起始・停止を理解できるようにする。その中で3次的に筋肉がどのように走向しているかを学んでいく。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	解剖学	検査測定法		PT技術論Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	オリエンテーション	人の体を触れることの大事さを理解させる
2回	肩甲骨の触察（１）	肩甲骨を触察できるようにする
3回	肩甲骨の触察（２）	肩甲骨を触察できるようにする
4回	筋触察の基本（最長筋）	筋触察の基本（最長筋）について理解する
5回	棘下筋の触察	棘下筋の触察ができるようになる
6回	小円筋・大円筋の触察	小円筋・大円筋の触察ができるようになる
7回	肩甲骨周囲筋の復習	肩甲骨に付着する筋の位置関係を確認できる。
8回	僧帽筋の触接	僧帽筋の触接ができるようになる
9回	肩甲挙筋・大小菱形筋の触接	肩甲挙筋・大小菱形筋の触接ができるようになる
10回	三角筋の触察	三角筋の触察ができるようになる
11回	広背筋の触察	広背筋の触察ができるようになる
12回	上腕二頭筋の触察	上腕二頭筋の触察ができるようになる
13回	上腕三頭筋の触察	上腕三頭筋の触察ができるようになる
14回	腕橈骨筋の触察	腕橈骨筋の触察ができるようになる
15回	総復習	ファイル作成確認

成績評価	実技・口頭試問85％ 授業中の実技小テスト15％
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材教科書	運動療法のための 機能解剖学的触診技術 動画プラス 上肢
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	機能解剖学Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	村井、畠山	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	・将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高いです。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認していきます。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行を確認する。 ・講義は2～3人一組で実技を行う。				
学習の留意点	将来、理学療法士として働くうえで、筋骨格を理解する必要性は極めて高い。2次元でとらえがちな解剖学を、骨指標を基に3次元で捉え、実際に確認しく。主に体表解剖および筋の起始・停止・走行を確認する。 実施内容を十分に記述することで理学療法記録を作成するのと同様の経験もしていただきたいと思います。 クラスメイト同士で行うとはいえ、丁寧に触らないとお互い学び合うことはできないので、爪切りやアクセサリの管理を徹底してください。またお互い十分に学ぶために不快なく、動かしやすい格好をしてください。 小テストで理解を深めていただきますので復習しましょう。				
到達目標	・講義を通して筋肉の起始・停止を理解できるようにする。その中で3次的に筋肉がどのように走向しているかを学んでいく。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	解剖学	検査測定法		PT技術論Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	オリエンテーション	人の体を触れることの大事さを理解させる
2回	骨盤の触察（１）	骨盤の触察ができるようになる
3回	骨盤の触察（２）	骨盤の触察ができるようになる
4回	腰方形筋の触察	腰方形筋の触察ができるようになる
5回	大殿筋・中殿筋の触察	大殿筋・中殿筋の触察ができるようになる
6回	梨状筋の触察	梨状筋の触察ができるようになる
7回	骨盤周囲筋の復習	骨盤に付着する筋の位置関係を確認できる。
8回	大腿筋膜張筋の触察	大腿筋膜張筋の触察ができるようになる
9回	大腿直筋の触察	大腿直筋の触察ができるようになる
10回	縫工筋の触察	縫工筋の触察ができるようになる
11回	半腱様筋・半膜様筋の触察	半腱様筋・半膜様筋の触察ができるようになる
12回	大腿二頭筋の触察	大腿二頭筋の触察ができるようになる
13回	前脛骨筋・長腓骨筋の触察	前脛骨筋・長腓骨筋の触察ができるようになる
14回	下腿三頭筋の触察	下腿三頭筋の触察ができるようになる
15回	総復習	ファイル作成確認

成績評価	実技・口頭試問85％ 授業中の実技小テスト15％
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは全体に実施する。
使用教材教科書	運動療法のための 機能解剖学的触診技術 動画プラス 下肢
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	生理学Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	越智 広樹	学 年		1年生	
資格	獣医師，博士（獣医学）				

科目概要	生理学は人体の機能を理解する学問である。身体の内臓器における生理的作用を理解することで、どこにどの程度異常が生じていることがわかるようになる。また、体内の諸器官は単独で働いているわけではなく、相互に密接に関連していることの理解も重要である。そこで本講義では、人体の恒常性を維持するための各臓器の機能について学習する。また、生理学は、作業療法、臨床医学を理解する上で基礎となる科目であるため、実際に臨床で遭遇する病態の内容も踏まえて講義する。□		
学習の留意点	本講義を通じて、各臓器の基礎的な構造と機能の関係を意識しながら学習することが重要である。また、各回の講義内容を個別に理解するのではなく、臓器間の関連性を考慮することで、生体恒常性の維持機構をより深く理解できる。さらに、生理学的機能の破綻が疾患につながることを認識し、臨床との関連を意識しながら学習を進めることが求められる。		
到達目標	生命維持に必要な恒常性維持機能について説明できる。 血液、循環器系、呼吸器系、消化器系、腎臓など各器官系の生理機能、代謝などについて説明できる。		
授業形態	対面講義（必要に応じて遠隔授業を併用）		
関連科目	生理学Ⅱ・Ⅲ・実習,解剖学Ⅲ・Ⅳ,疾患別理学療法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ,リハビリテーション医学概論Ⅰ・Ⅱ神経内科学,内科老年学Ⅰ・Ⅱ,検査測定法Ⅲ		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	生理学とは	恒常性について説明できる
2回	細胞生理	細胞生理学、細胞膜と物質輸送、細胞膜の興奮について説明できる
3回	循環と血液Ⅰ	体液区分と組成、血液成分について、白血球、血小板の役割について説明できる
4回	循環と血液Ⅱ	心臓の構造、刺激伝導系について説明できる
5回	循環と血液Ⅲ	心電図、血管の構造・機能について説明できる
6回	呼吸Ⅰ	呼吸器系の構造、メカニズムについて説明できる
7回	呼吸Ⅱ	ガス交換、運搬、呼吸の調節について説明できる
8回	消化器系Ⅰ	消化器の構造、働きについて説明できる
9回	消化器系Ⅱ	消化器の調節機構について説明できる
10回	消化器系Ⅲ	栄養素、代謝について説明できる
11回	排泄Ⅰ	泌尿器の構造と機能について説明できる
12回	排泄Ⅱ	再吸収と分泌、尿生成について説明できる
13回	内分泌Ⅰ	内分泌腺、下垂体、副腎の構造と機能が説明できる
14回	内分泌Ⅱ	甲状腺、膵臓、生殖器の構造と機能が説明できる
15回	体温	体温調節機構について説明できる

成績評価	定期試験（筆記）にて6割以上を合格とする（授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。）
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項無し
使用教材教科書	・生理学 第3版（内田さえ、原田玲子 他，医歯薬出版） ・講義時に配布する資料
オフィスアワー	授業前後の休憩時間（メール対応可）

		理学療法学科 夜間部			
科目	生理学Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	越智 広樹	学 年		1年生	
資格	獣医師、博士（獣医学）				

科目概要	生理学は人体の機能を理解する学問である。本講義では、人体の運動機能を構成する神経、筋、感覚器を中心に、その構造と機能を学び、外的刺激に対する人体の反射や反応ならびに運動調節の仕組みについても学習する。また、生理学は、作業療法、臨床医学を理解する上で基礎となる科目であるため、実際に臨床で遭遇する病態の内容も踏まえて講義する。		
学習の留意点	本講義を通じて、各臓器の基礎的な構造と機能の関係を意識しながら学習することが重要である。また、各回の講義内容を個別に理解するのではなく、臓器間の関連性を考慮することで、生体恒常性の維持機構をより深く理解できる。さらに、生理学的機能の破綻が疾患につながることを認識し、臨床との関連を意識しながら学習を進めることが求められる。□		
到達目標	①神経の構造と機能が説明できる。②筋肉の構造と機能が説明できる。③運動制御の仕組みを説明できる。④感覚器官の構造と機能を説明できる。□		
授業形態	対面講義（必要に応じて遠隔授業を併用）		
関連科目	生理学Ⅱ・Ⅲ・実習,解剖学Ⅲ・Ⅳ,疾患別理学療法Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ,リハビリテーション医学概論Ⅰ・Ⅱ神経内科学,内科老年学Ⅰ・Ⅱ,検査測定法Ⅲ		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	神経系の基礎 I	ニューロンの構造、静止膜電位と活動電位について説明できる
2回	神経系の基礎 II	興奮伝導の仕組み、シナプス伝達の仕組みについて説明できる
3回	神経系の基礎 III	神経の可塑性と再生について説明できる
4回	中枢神経系	中枢神経系の分類と機能について説明できる
5回	末梢神経系	末梢神経系の分類と機能について説明できる
6回	筋の構造と働き	筋の構造と収縮の仕組みについて説明できる
7回	筋紡錘の構造と機能	筋紡錘の構造と機能、反射経路について説明できる
8回	脊髄・脳幹における運動制御	脊髄、脳幹による運動調節が説明できる
9回	高次な運動制御	小脳、大脳基底核、大脳皮質による運動調節が説明できる
10回	感覚の一般的性質	閾値や順応など感覚受容器の性質について説明できる
11回	体性感覚	体性感覚の受容器と伝導路および機能について説明できる
12回	味覚・嗅覚	味覚・嗅覚の受容器と伝導路およびその機能について説明できる
13回	聴覚・前庭感覚	聴覚・前庭感覚の受容器と伝導路および機能について説明できる
14回	視覚	視覚の受容器と伝導路およびその機能について説明できる
15回	まとめ	まとめ

成績評価	定期試験（筆記）にて6割以上を合格とする（授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。）□ □
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項無し
使用教材 教科書	・生理学 第3版（内田さえ、原田玲子 他、医歯薬出版） ・講義時に配布する資料
オフィスアワー	授業前後の休憩時間（メール対応可）

		理学療法学科 夜間部			
科目	生理学Ⅲ	単位	1	コマ数	15
担当講師	小平 健太郎	学 年		1年生	
資格	体育学修士、CSCS, NSCA-CPT				

科目概要	生理学の知識を基に運動時に体の各器官・器官系がどのように適応するのかを学びます。そしてその適応を用いて、目的に応じた運動処方を作成するために必要な知識を座学・演習を通じて学習していく科目です。		
学習の留意点	少子高齢化の中で、健康長寿は今後ますます重要になる課題です。運動が身体にもたらす好影響は単なる身体能力の向上だけでなく様々なことが挙げられていますが、適切なものでなくては逆効果にもなってしまうリスクも持っています。生理学Ⅰ、Ⅱの内容をベースに運動時にみられる調節反応を説明していきますので、それぞれの科目についても復習しながら臨んでほしいと考えています。 これまでに自身が行ってきた、あるいは現在行っている運動では体内でどのようなことが起こっているのか、またさらなる改善点なども考えてみてもらえたらより身近に感じられるかなと思います。		
到達目標	”①筋収縮に伴うエネルギー代謝を説明できる、②運動に伴う呼吸循環系の適応を説明できる ③筋力発揮に影響を与える要因について説明できる、④運動刺激に応じた内分泌調節を説明できる ⑤環境が運動に与える影響を説明できる、⑥運動と発育発達、加齢老化について説明できる ⑦目的に応じた運動処方の概要を説明できる”□		
授業形態	講義	対面	
関連科目	生理学Ⅰ・Ⅱ・実習, 解剖学Ⅲ, 運動生理学		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	運動処方の必要性、トレーニングの原理原則	適切な運動処方が必要な理由と、運動処方のために必要な要素・トレーニングの原理原則について説明できる
2回	エネルギー代謝	筋収縮メカニズムと無酸素的エネルギー供給系の概要について説明できる
3回	エネルギー代謝②	有酸素系エネルギー供給、無酸素性作業閾値とエネルギー供給系相互の関係について説明できる
4回	運動と筋力①	筋線維の組成と運動単位、筋力の規定要因について説明できる
5回	運動と筋力②	伸張反射など神経－筋の協調性について説明できる
6回	運動と呼吸循環系①	安静時と比較して呼吸循環系各指標の変化、適応のための調節について説明できる
7回	運動と呼吸循環系②	酸素摂取量、酸素借について説明できる
8回	運動と代謝、運動処方①	心拍数や血圧の変化から、運動時にかかっている負荷を計算できる。無酸素性作業閾値を挟んでの適応の違いを説明できる
9回	運動と代謝、運動処方②	運動時代謝についてRMR, METsを用いて実施できる。健康を保つために必要な運動強度、運動量を説明できる
10回	運動と内分泌①	運動強度、時間の変化に伴うホルモン分泌の変化を説明できる。
11回	運動と内分泌②	運動と糖代謝、糖代謝疾患に対する運動の有効性を説明できる
12回	運動と疲労、回復	筋疲労をもたらす要因について説明できる 回復を促進する要因について説明できる
13回	運動と加齢・老化、発育発達	加齢・老化、発育発達に伴う身体機能の変化について説明できる
14回	運動と環境	高地・暑熱環境への適応について説明できる
15回	運動と生活習慣病	サルコペニア、ロコモティブシンドローム、メタボリックシンドロームの要因と運動の効果について説明できる

成績評価	平常点評価（講義内小テスト、授業姿勢等）30点、期末試験70点の合計100点で評価を行い、60点以上を合格とする 授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックについては全体に対して行う
使用教材 教科書	勝田茂「入門運動生理学第4版」杏林書院
オフィスアワー	講義時間の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	生理学実習	単位	1	コマ数	15
担当講師	渡辺 信博	学 年		1年生	
資格					

科目概要	生理学実習はグループ学習が基本となります。ヒトの生理機能の基本となる、血圧や心拍数、心電図、皮膚感覚、筋電図を自身の体で測定し、安静時や負荷（刺激）を与えた時の変化を調べます。生理機能の変化を体験することに加え、グループ内でデータを比較することで個体差についても学びます。測定機器の操作を習得し、実施した内容をレポートに文章や図でまとめることを通じて、生理学で学んだ内容の理解をより深めることが本実習の目的です。		
学習の留意点	実習に臨むにあたり、実習書をあらかじめ読み、各実習の目的や手順などを理解しておいてください。さらに生理学生理学の座学で学んだことに基づき、結果を予想しておいてください。もし予想した結果が得られなかった場合や失敗してしまった場合でも、その原因をよく考察することが重要です。 各実習で得た結果は各自がレポートにまとめ、必ず提出してください（〆切は実習の翌週の授業開始までです）。		
到達目標	人体の生理機能について理解を深める。		
授業形態	対面授業		
関連科目	生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ, 解剖学Ⅲ		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	実習の一般的解説	生理学実習における注意事項や実習の進め方について理解する。
2回	実習①～③の解説	実習①～③の目的や実施内容、方法を理解する。
3回	実習①：血圧と心拍数 1	血圧と心拍数を測定し、安静時及び体位変換の影響を理解する。
4回	実習①：血圧と心拍数 1	血圧と心拍数を測定し、安静時及び体位変換の影響を理解する。
5回	実習②：血圧と心拍数 2	血圧と心拍数を測定し、運動負荷と寒冷負荷の影響を理解する。
6回	実習②：血圧と心拍数 2	血圧と心拍数を測定し、運動負荷と寒冷負荷の影響を理解する。
7回	実習③：心電図	心電図を記録し、心電波形の意味を理解する。深呼吸や暗算が心拍数に及ぼす影響とそのしくみを考察する。
8回	実習③：心電図	心電図を記録し、心電波形の意味を理解する。深呼吸や暗算が心拍数に及ぼす影響とそのしくみを考察する。
9回	実習④、⑤の解説	実習④、⑤の目的や実施内容、方法を理解する。
10回	実習④の準備、実習④：皮膚感覚	実習④で使用する刺激毛を作製する。2点弁別閾を測定する。
11回	実習④：皮膚感覚	皮膚の感覚点を測定する。皮膚の部位による感覚点の分布の違いや皮膚冷却の影響を理解する。
12回	実習④：皮膚感覚	皮膚の感覚点を測定する。皮膚の部位による感覚点の分布の違いや皮膚冷却の影響を理解する。
13回	実習⑤：筋電図	等張性運動時や等尺性運動時の筋電図を測定し、屈筋と伸筋のはたらきを理解する。
14回	実習⑤：筋電図	等張性運動時や等尺性運動時の筋電図を測定し、屈筋と伸筋のはたらきを理解する。
15回	発表会	生理学実習で取り組んだ内容について、グループ毎に発表する

成績評価	実習レポートの内容（90％）と発表の取り組み（10％）により評価します。総合で6割以上の場合に単位取得を認めます。なお、授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えることはできません。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義時間内におこないます。
使用教材教科書	生理学実習NAVI 第3版 医歯薬出版株式会社 大橋敦子 生理学 第3版 医歯薬出版株式会社 内田さえ・原田玲子ほか
オフィスアワー	授業前後および休み時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	運動学Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	臼杵	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	運動学Ⅰは、理学療法士を目指す上で基礎となる人体の構造と機能（特に上肢・体幹）を学びます。骨・関節・筋の構造と役割、運動のメカニズムを理解し、正常運動の観察・分析の基礎を習得することを目的とします。				
学習の留意点	授業で学んだ知識を、日常生活の動作やスポーツの場面と結びつけ、運動学を「使える知識」として定着させましょう。演習では、遠慮せずに積極的に取り組み、正確な技術を習得しましょう。グループ学習や教え合いも活用し、理解を深めてください。				
到達目標	学生が講義と演習を通じて、人体の構造と運動の基礎を理解し、触診・観察・分析の基本スキルを習得できることを目指します。知識の暗記だけでなく、臨床場面を想定した応用力、問題解決能力を養うことを重視した目標を設定します。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	機能解剖学	運動療法学		運動学Ⅱ	
	0	0		0	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	身体各部の名称、骨の名称	身体各部の名称、骨の名称を説明できる
2回	身体運動の面と軸、運動法則、身体とてこ	身体運動の面と軸、運動法則、身体とところを説明できる
3回	関節の種類と運動軸、筋収縮の種類	関節の種類と運動軸、筋収縮の種類を説明できる
4回	上肢帯の構造と種類、運動	上肢帯の構造と種類、運動を説明できる
5回	上肢帯の筋と作用	上肢帯の筋と作用を説明できる
6回	肩関節の構造と種類、運動	肩関節の構造と種類、運動を説明できる
7回	肩関節の筋と作用	肩関節の筋と作用を説明できる
8回	肘関節の構造と種類、肘関節と前腕の運動	肘関節の構造と種類、肘関節と前腕の運動を説明できる
9回	肘関節・前腕の筋と作用	肘関節・前腕の筋と作用を説明できる
10回	手関節および手の関節の構造と種類、手関節と手の運動	手関節および手の関節の構造と種類、手関節と手の運動を説明できる
11回	腱鞘、指の運動と指背腱膜、手関節の筋と作用	腱鞘、指の運動と指背腱膜、手関節の筋と作用を説明できる
12回	手の筋と作用、手のアーチ、手の把持動作、手の変形	手の筋と作用、手のアーチ、手の把持動作、手の変形を説明できる
13回	椎骨の構造、椎骨の運動、椎間円盤、頸椎の運動と筋の作用	椎骨の構造、椎骨の運動、椎間円盤、頸椎の運動と筋の作用を説明できる
14回	胸郭の構造、呼吸運動と筋の作用	胸郭の構造、呼吸運動と筋の作用を説明できる
15回	腰椎の構造、腰椎の運動と筋の作用	腰椎の構造、腰椎の運動と筋の作用を説明できる

成績評価	定期試験100%
課題やレポートに関するフィードバック	適宜、個人及び全体に実施。
使用教材 教科書	PT・OTビジュアルテキスト 専門基礎 運動学 第2版 担当教員が作成した配布プリントを使用 毎回、リフレクションシートを使用 随時、ワークシートなどを配布
オフィスアワー	研修日（木曜日） メールでの連絡は随時（h-usuki@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	運動学Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	臼杵	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	運動学Ⅱは、運動学Ⅰに続き、理学療法士の基礎となる人体の構造と機能（特に骨盤・下肢）を学びます。さらに、姿勢や正常歩行の観察・分析の基礎を習得します。講義と実技を通じ、正常な運動を理解し、異常を見抜く基礎を築きます。				
学習の留意点	授業で学んだ知識を、日常生活の動作やスポーツの場面と結びつけ、運動学を「使える知識」として定着させましょう。演習では、遠慮せずに積極的に取り組み、正確な技術を習得しましょう。グループ学習や教え合いも活用し、理解を深めてください。				
到達目標	学生が講義と演習を通じて、人体の構造と運動の基礎を理解し、触診・観察・分析の基本スキルを習得できることを目指します。知識の暗記だけでなく、臨床場面を想定した応用力、問題解決能力を養うことを重視した目標を設定します。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	機能解剖学	運動療法学		運動学Ⅱ	
	0	0		0	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	骨盤と股関節の構造と種類、靱帯と作用	骨盤と股関節の構造と種類、靱帯と作用を説明できる
2回	股関節の運動と筋の作用	股関節の運動と筋の作用を説明できる
3回	股関節の安定性、片脚立位時の股関節の力学的特性	股関節の安定性、片脚立位時の股関節の力学的特性を説明できる
4回	膝関節の構想と種類、靱帯と作用、半月の作用、膝蓋骨の作用	膝関節の構想と種類、靱帯と作用、半月の作用、膝蓋骨の作用を説明できる
5回	膝関節運動と筋の作用	膝関節運動と筋の作用を説明できる
6回	足関節および足の関節の構造と種類、足関節と足の運動	足関節および足の関節の構造と種類、足関節と足の運動を説明できる
7回	足関節の筋と作用	足関節の筋と作用を説明できる
8回	足のアーチと機能、足の変形	足のアーチと機能、足の変形を説明できる
9回	姿勢の種類、名称、姿勢の安定条件、身体重心、重心線	姿勢の種類、名称、姿勢の安定条件、身体重心、重心線を説明できる
10回	立位時の筋活動、姿勢制御、反射・反応、戦略	立位時の筋活動、姿勢制御、反射・反応、戦略を説明できる
11回	歩行周期、従来の用語・新しい用語	歩行周期、従来の用語・新しい用語を説明できる
12回	歩行のメカニズム、身体の動き	歩行のメカニズム、身体の動きを説明できる
13回	歩行時の筋活動、ロッカーファンクション	歩行時の筋活動、ロッカーファンクションを説明できる
14回	異常歩行、歩行分析、歩行まとめ	異常歩行、歩行分析、歩行まとめを説明できる
15回	復習	（復習）講義全体の復習ができる

成績評価	定期試験100％
課題やレポートに関するフィードバック	適宜、個人及び全体に実施。
使用教材 教科書	PT・OTビジュアルテキスト 専門基礎 運動学 第2版 観察による歩行分析 担当教員が作成した配布プリントを使用 毎回、リフレクションシートを使用、随時、ワークシートなどを配布
オフィスアワー	研修日（木曜日） メールでの連絡は随時（h-usuki@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	人間発達学	単位	1	コマ数	15
担当講師	黒木光	学 年		1年生	
資格					

科目概要	ヒトの一生涯における発達を、身体的・精神的・社会的な視点からその特徴を説明し、自身や他人の思考や行動を通して理解を深める。幅広い世代で医療を実践するために、各年代での機能の特徴を理解し、行動を実践するためのプロフェッショナルな視点について教授する。				
学習の留意点	この講義を最大限に活かすために、皆さんには、以下の点を意識し工夫していただきたいと思います。まず、講義へ積極的に参加することで、学びを深める第一歩を踏み出しましょう。質問や意見交換を通して理解を深めると共に、講義内容を自分の経験や周囲の事例と関連付け、現実世界とのつながりを見出すことで、より深い理解が得られます。講義内容をノートにまとめたり、参考文献を読んだりするなど、能動的な学習も心がけましょう。また、様々な発達段階や背景を持つ人々への理解を深め、多様性を尊重する視点を持つことも重要です。そして、わからないことはそのままにせず、積極的に質問し、疑問点を解消するように努めましょう。これらの点を意識することで、講義内容の理解が深まり、人間発達学の知識をより効果的に活用できるようになるでしょう。				
到達目標	①乳幼児期から老年期までの各発達段階における身体的、心理的、社会的特徴を説明できる。 ②主要な発達理論（例：ピアジェ、エリクソン）を理解し、具体的な事例に適用して、説明できる。 ③遺伝、環境、文化など、発達に影響を与える様々な要因を分析し、説明できる。 ④乳児の運動発達を身体運動、描画を通じて、説明できる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	運動学	解剖学		生理学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	発達の概念	①発達期の区分を説明できる ②発育の個性を説明できる ③発達の原則を説明できる
2回	発達理論	①発達理論（エリクソン、ピアジェ、フロイト、その他）を説明できる。
3回	胎児・新生児期	①胎児・新生児の感覚や運動の発現時期を説明できる。 ②胎児の特徴を調べ、説明できる ③新生児の特徴を調べ、説明できる。
4回	乳児期	①原始反射の特徴・姿勢反応を調べ、説明できる。 ②歩くまでの運動発達を説明できる ③言語、社会性の発達を説明できる
5回	幼児期	①発達表を元に粗大運動、巧緻性運動を理解し、説明できる。 ②発達理論を元に行動特性を説明できる。
6回	原始反射／平衡反応、幼児期までのまとめ	①原始反射の特徴・姿勢反応を調べ、説明できる。 ②胎児期～幼児期までの内容を復習し、再学習する。
7回	運動発達	①3か月までの乳児の運動発達を描画し、運動の特徴を説明できる
8回	運動発達	①6か月までの乳児の運動発達を描画し、運動の特徴を説明できる
9回	運動発達	①12か月までの乳児の運動発達を描画し、運動の特徴を説明できる
10回	学童期の発達	①学童期の社会性の発達について説明できる。
11回	青年期の発達	①第二性徴について、説明できる。 ②脳の発達と行動について、説明できる。
12回	成人期の発達	①生活の変化、ストレス、疾患を理解し、説明できる。 ②社会における役割の変化について、説明できる。
13回	老年期の発達	①老化について、説明できる。 ②認知能力の特徴について、理解し、説明できる。
14回	学童期～老年期のまとめ	①学童期から老年期までの内容を復習し、説明できる。
15回	総復習	すべての発達期の内容を振り返り、説明できる。

成績評価	定期試験で6割以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	授業時に復習機会を設けてフィードバックする
使用教材 教科書	イラストでわかる人間発達学 リハのための人間発達学 第3版
オフィスアワー	毎週月曜日17時～18時

		理学療法学科 夜間部			
科目	リハビリテーション医学概論Ⅰ	単位	2	コマ数	15
担当講師	草野 修輔	学 年		1年生	
資格	リハビリテーション専門医				

科目概要	この授業では、リハビリテーション概論に関する基本的知識を習得する。 各種社会的福祉制度、各種障害、補装具、リハビリテーション関連用語などについて理解する	
学習の留意点	各講義に即したミニテストを理解度の確認とする	
到達目標	リハビリテーションに関連する基本的概念、制度、障害評価、治療法などについて理解する	
授業形態	講義	対面授業
関連科目		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	リハビリテーションの概念・理念・定義	リハビリテーションの概念、歴史的変遷、理念、定義を理解する
2回	障害分類とリハビリテーションの種類	障害分類とリハビリテーションの種類について理解する
3回	リハビリテーション関連職種	リハビリテーション関連職種について理解する
4回	リハビリテーション関連用語	リハビリテーション関連用語について理解する
5回	ADL・IADL・QOL	ADL・IADL・QOLの概念と評価法について理解する
6回	物理療法	各種物理療法について理解する
7回	補装具・義肢装具・自助具	補装具・義肢装具・自助具について理解する
8回	急性期リハ・回復期リハ・生活期リハ	急性期リハ・回復期リハ・生活期リハについて理解する
9回	障害者総合支援法・地域包括ケアシステム・在宅医療	障害者総合支援法・地域包括ケアシステム・在宅医療について理解する
10回	社会福祉制度・介護保険	各種社会福祉制度・介護保険制度について理解する
11回	緩和医療・終末期医療	緩和医療・終末期医療について理解する
12回	運動障害・感覚障害・高次脳機能障害	運動障害・感覚障害・高次脳機能障害について理解する
13回	代表的疾患のリハビリテーション	代表的疾患のリハビリテーションについて理解する
14回	健康寿命の延伸	健康寿命の延伸について理解する
15回	総まとめ	総まとめ

成績評価	定期試験：筆記試験50%＋レポート課題50%
課題やレポートに関するフィードバック	毎回講義内容に則したミニテストを行うことで理解度をチェックする。また復習の確認にも用いてもらう。
使用教材 教科書	なし 参考書：医学生・コメディあるのための手引き書 リハビリテーション概論 田島文博 編著
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法概論	単位	1	コマ数	15
担当講師	篠田良平	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	この授業では理学療法業務、理学療法士の役割を理解し、説明できるようになることを目的とします。医療・福祉分野における理学療法業務を実施するために、様々な業務の特徴を理解すること、プロフェッショナルの視点を持つための基礎を築くことが求められます。				
学習の留意点	理学療法を学ぶ上でオリエンテーション的な授業です。広い範囲から医療やリハビリテーションの世界について展開していきます。詳細部分も大事ですが全体のイメージを掴んで欲しいと思います。ルールや仕組みとは別に、医療者には倫理的な態度が求められます。見学実習前に利用者さんへの接し方についても皆で考えて行こうと思います。				
到達目標	①理学療法業務や役割について理解し、説明することができる。 ②理学療法士の倫理観、行動規範について理解し、説明することができる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	日常生活活動Ⅰ	日常生活活動Ⅱ		リハビリテーション医学概論	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	理学療法の概念と歴史	理学療法およびリハビリテーションの基本理念と歴史を学ぶ。
2回	理学療法士の法律	理学療法士の業務に関わる法律を学ぶ。
3回	理学療法の意義と役割と対象	理学療法士の位置付け、目的、対象について学ぶ。
4回	理学療法の方法	理学療法士が行う治療法や評価法について学ぶ。
5回	理学療法士の組織と理学療法士教育	理学療法士に関わる組織と学校教育や臨床教育について学ぶ
6回	医療・保健分野の理学療法	医療全般についてとその中の理学療法士の位置付けについて学ぶ。
7回	地域リハビリテーションと理学療法	地域福祉の現状と理学療法士の関わりについて学ぶ。
8回	医療事故とリスクマネジメント	医療事故の分類や対処法について学ぶ。
9回	個人情報管理と対象者の権利	個人情報保護法について学び守秘義務を理解する。
10回	理学療法士を目指す学生に求められるもの	理学療法の今後の展開とそこで求められるものについて学ぶ。
11回	理学療法士と研究	研究及びそのまとめや学術発表について学ぶ。
12回	実習における心構え	実習に向けて、何を見るべきか。実習においてどのような心構えで臨むべきかについて学ぶ。
13回	疾患別検討 情報検索	決められた疾患に対しグループ発表するための資料情報検索を行う。
14回	疾患別検討 発表資料作成	決められた疾患に対しグループ発表するための発表用資料作成を行う。
15回	疾患別検討 発表会	決められた疾患に対しグループ発表を行う。

成績評価	授業中の行動と課題レポートで成績をつけます。合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材教科書	理学療法学テキストⅠ 理学療法概論第4版 監修 千住秀明 医歯薬出版株式会社
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	病態運動学	単位	1	コマ数	8
担当講師	内山 結城	学 年		1年生	
資格					

科目概要	標準的な動作を学習したうえで障害特性を捉え、評価の選定・方法・結果の解釈ができるよう演習を交えながら講義を実施します。また、障害特性がもたらす動作の問題を考えられるよう、問題提起をしながら学生自身の思考力を促していきます。				
学習の留意点	これまで学んできた運動学を踏まえたうえで、様々な病態の基本動作の特徴を学んでいく				
到達目標	①標準的な基本動作を説明できる ②逸脱した基本動作を説明できる ③上記①②を実践できる				
授業形態	演習		対面		
関連科目	解剖学	生理学		運動学	
	0	0		0	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	基本動作の特徴（寝返り、起き上がり）	寝返り動作・起き上がり動作を3～4相に分類することができる
2回	逸脱動作の特徴（寝返り、起き上がり）	身体の各部位に障害が生じると寝返り・起き上がりの動作にどのような影響が出るかを説明できる
3回	基本動作の特徴（立ち上がり）	立ち上がり動作を4相に分類することができる
4回	逸脱動作の特徴（立ち上がり）	身体の各部位に障害が生じると立ち上がり動作にどのような影響が出るかを説明できる
5回	基本動作の特徴（歩行）	歩行周期において立脚期を5相に分類し説明することができる
6回	基本動作の特徴（歩行）②	歩行周期において遊脚相を3相に分類し説明することができる
7回	逸脱動作の特徴（歩行）	身体の各部位に障害が生じると歩行にどのような影響が出るかを説明できる
8回	特徴的な異常歩行についてのまとめ	異常歩行について、特徴を説明しかつ異常歩行の名称を答えることができる
9回	0	0
10回	0	0
11回	0	0
12回	0	0
13回	0	0
14回	0	0
15回	0	0

成績評価	小テストの合計、グループ（ペア）ワーク、まとめテスト、レポートの合計が60%以上
課題やレポートに関するフィードバック	授業開始時もしくは終了前に小テストを行う
使用教材 教科書	動作分析 臨床活用講座 バイオメカニクスに基づく臨床推論の実践 石井慎一郎 メディカルビュー 担当教員が作成した配布プリントを使用、随時、評価記録用紙などを配布
オフィスアワー	毎週火曜日15：30-17：00 木曜以外のスケジュールが開いている時間は対応可能

		理学療法学科 夜間部			
科目	総合演習（PBL）Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	高橋 豊	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	PBL授業では、学生同士でのグループワークを通して共同で問題に対し乗り越え、学生・教員が共通の目標・目的に向かって一緒に活動することを学習する。医療者としての心身を鍛え、グループに対する責任感と奉仕の精神を身に着ける。これにより将来、医療の専門職として社会に貢献するのに必要な専門職連携の基盤を育成する。				
学習の留意点	1. チーム内でコミュニケーションが取れて明確な目標を定めることができる。 2. チームの目標を達成するために、傾聴と主体的に行動できる。 3. 自ら疑問をもって解決に向けてチームとともに活動できる。				
到達目標	グループワークを通して思考・創造し、記述・口述できる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	解剖学	運動学		検査測定法	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	オリエンテーション	PBLに関する基礎知識の理解を深める
2回	オリエンテーション	PBLに関する基礎知識の理解を深める
3回	シナリオ検討	わからない言葉を調べてグループで共有できる
4回	シナリオ検討	わからない言葉を調べてグループで共有できる
5回	シナリオ検討	症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論できる
6回	シナリオ検討	症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論できる
7回	シナリオ検討	症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論できる
8回	シナリオ検討	症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論できる
9回	シナリオ検討	症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論できる
10回	シナリオ検討	症例の全体像をイメージしつつ掘り下げて考え、学習し、討論できる
11回	発表準備・まとめ	発表に向け、内容や構成を決めてまとめることができる
12回	発表準備・まとめ	発表に向け、内容や構成を決めてまとめることができる
13回	発表	まとめた内容を発表できる
14回	発表	まとめた内容を発表できる
15回	シナリオ解説、ふりかえり	症例について解説、演習についてよかった点や今後の課題を整理することができる

成績評価	1. 授業内発表 2. 授業内提出物
課題やレポートに関するフィードバック	グループワーク中は、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。
使用教材 教科書	解剖学・運動学・生理学・理学療法評価の教科書 担当教員が作成した配布プリントを使用
オフィスアワー	高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法 I	単位	1	コマ数	15
担当講師	高橋 豊 木下 修	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	検査測定・評価の意義と方法を理解することを目的とし、対象者に対して適切な評価を行えるよう学習する。 理学療法評価の中でも行う頻度の高い関節可動域測定について学ぶ。				
学習の留意点	①理学療法の臨床における評価について学ぶ。 ②検査に必要である、基礎的な解剖学・運動学用語を学ぶ。 ③教員の実演と教科書を確認することで、検査方法を理解する。 ④患者様をイメージしながら、学生同士で正しく検査・模倣を行う。 ⑤安全で効率的に検査を実施する。				
到達目標	①評価・血圧測定・バイタル測定・肢長周径・呼吸機能検査・循環機能検査ができる。 ②関節可動域測定の意義・目的・方法を理解し、実技・記録ができる。 ③患者様をイメージしながら、学生同士で正しく検査・模倣を行い、安全で効率的に検査を実施する。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	解剖学	運動学		生理学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	総論・一般的評価事項	評価の意義・目的、ICIDH、ICFが理解できる 理学療法における診療記録（医療情報のとり方、医療面接）が理解できる
2回	バイタルサイン	バイタルサインについて理解して測定ができる
3回	形態測定①	四肢長および肢節長の測定ができる
4回	形態測定②	周径の測定ができる
5回	知覚検査①	知覚、表在感覚が理解できる
6回	知覚検査②	深部感覚、複合感覚、立体認知覚が理解できる
7回	関節可動域測定概要・上肢関節可動域検査	関節可動域検査の定義・意義・目的が理解できる 肩甲帯・肩関節の関節可動域が測定できる
8回	上肢関節可動域検査	肘関節・手関節の関節可動域が測定できる
9回	下肢関節可動域検査	股関節の関節可動域が測定できる
10回	下肢関節可動域検査	膝関節の関節可動域が測定できる
11回	下肢関節可動域検査	足関節・足部の関節可動域が測定できる
12回	体幹関節可動域検査	頸部・胸腰部の関節可動域が測定できる
13回	その他の関節可動域検査	顎関節・指関節などの関節可動域が測定できる
14回	関節の変形	関節の変形について理解できる
15回	総復習	関節可動域測定が実施できる

成績評価	筆記75％ 実技15％ 小テスト10%
課題やレポートに関するフィードバック	実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。
使用教材 教科書	理学療法評価学 第6版補訂版 担当教員が作成した配布プリントを使用
オフィスアワー	高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp） 木下：授業前後及びメール（o-kinoshita@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	高橋 豊 吉葉則和	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	検査測定・評価の意義と方法を理解することを目的とし、対象者に対して適切な評価を行えるよう学習する。 理学療法評価の中でも行う頻度の高い徒手筋力検査法について学ぶ。				
学習の留意点	①理学療法の臨床における評価について学ぶ。 ②検査に必要である、基礎的な解剖学・運動学用語を学ぶ。 ③教員の実演と教科書を確認することで、検査方法を理解する。 ④患者様をイメージしながら、学生同士で正しく検査・模倣を行う。 ⑤安全で効率的に検査を実施する。				
到達目標	①徒手筋力検査法の意義・目的・方法を理解し、実技、記録ができる。 ②患者様をイメージしながら、学生同士で正しく検査・模倣を行い、安全で効率的に検査を実施する。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	解剖学	運動学		生理学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	徒手筋力検査概要	徒手筋力検査法の定義・意義・目的が理解できる
2回	上肢筋力検査	肩甲帯・肩関節の筋力が測定できる
3回	上肢筋力検査	肩甲帯・肩関節の筋力が測定できる
4回	上肢筋力検査	肩関節の筋力が測定できる
5回	上肢筋力検査	肩関節の筋力が測定できる
6回	上肢筋力検査	肘関節の筋力が測定できる
7回	上肢筋力検査	手関節・手指の筋力が測定できる
8回	下肢筋力検査	股関節の筋力が測定できる
9回	下肢筋力検査	股関節の筋力が測定できる
10回	下肢筋力検査	膝関節の筋力が測定できる
11回	下肢筋力検査	足関節・足趾の筋力が測定できる
12回	頭部・頸部の筋力検査	頭部・頸部の筋力が測定できる
13回	体幹の筋力検査	体幹の筋力が測定できる
14回	脳神経支配筋筋力検査	脳神経支配筋の筋力が理解できる
15回	総復習	徒手筋力検査が実施できる

成績評価	筆記75% 実技15% 小テスト10%
課題やレポートに関するフィードバック	実技演習に関しては、机間巡回中に行う。またリフレクションシートには、質問欄を設けているので、その記載に合わせてフィードバックを行う。疑問・質問に関しては、メールで随時対応、時間外にも対応する。
使用教材 教科書	新・徒手筋力検査法 原著第10版 担当教員が作成した配布プリントを使用
オフィスアワー	高橋：授業前後及びメール（y-takahashi@nichireha.ac.jp） 吉葉：授業前後及びメール（n-yoshiba@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	運動療法学Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	篠田良平	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	理学療法士の主たる治療法である物理療法と運動療法のうち運動療法の基礎を学ぶ授業です。基本的な概念に加え相手への接し方や基礎的な訓練などの実技も学びます。				
学習の留意点	運動療法学Ⅰは、今後学んでいく理学療法士の治療学のガイダンスとなる授業です。解剖学・生理学を基盤とした運動療法の基礎知識から、治療学の基礎となる相手への接し方・触れ方などを学習していきます。実技演習では座学と異なった難しさがあります。しかし、誰でも最初はうまく出来ない事が多いです。実技のモデル演習時によく観察してください。実技では行えることと使えることの間には大きな違いがあります。反復練習を繰り返して自分のものにして欲しいと思います。				
到達目標	①解剖学と生理学を裏付けとした運動の基礎概念を学べる。②関節可動域訓練やストレッチング・リラクゼーションを通じて治療学実技の基礎を学べる。③実技練習から相手に接する心構えを学べる。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	運動療法Ⅱ	理学療法技術論Ⅲ		理学療法技術論Ⅳ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	運動療法概論	リハビリテーションと運動療法の歴史、位置付け、対象、目的、効果を理解出来る。
2回	運動の分類とリスク管理	複数の観点から運動を分類し、特徴を理解する。運動時のリスク管理についてまとめる。
3回	組織の損傷と回復	生理学的理論を元に各組織損傷時の回復過程を理解する。
4回	疼痛の分類	疼痛の分類を理解して、原因と治療法について理解する。
5回	関節可動域訓練の方法と原理	関節可動域訓練の方法や目的・適応とリスクについて理論を理解する。
6回	関節可動域訓練 上肢	上肢の関節可動域訓練の実技演習を行い習得する。
7回	関節可動域訓練 上肢	上肢の関節可動域訓練の実技演習を行い習得する。
8回	関節可動域訓練 下肢	下肢の関節可動域訓練の実技演習を行い習得する。
9回	関節可動域訓練 下肢	下肢の関節可動域訓練の実技演習を行い習得する。
10回	ストレッチング	ストレッチングの方法や目的・適応とリスクについて理論を理解する。
11回	ストレッチング	ストレッチングの実技演習を行い習得する。
12回	筋力増強訓練	筋力増強訓練の方法や目的・適応とリスクについて理論を理解する。
13回	筋力増強訓練	筋力増強訓練の実技演習を行い習得する。
14回	筋力増強訓練	筋力増強訓練の実技演習を行い習得する。
15回	総括	運動療法Ⅰの授業内容を再確認し、復習整理する。

成績評価	筆記試験90％、インターネット授業の課題10％ 合計100％のうち6割の得点をもって合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材 教科書	運動療法学 障害別アプローチの理論と実際 第2版 市橋則明 文光堂
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	臨床見学実習Ⅰ	単位	1	コマ数	45
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		1年生	
資格	理学療法士				

科目概要	病院や診療所、介護施設で見学実習を実施する。医療機関・介護施設における理学療法士の役割や仕事の内容、関連職種との連携、チーム医療への理解を学習する。基礎知識の確認や実技演習などを中心に行う。 ・臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 ・医療・介護・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し説明できる。 ・見学実習をとして、今後の基礎学習に取り組むべきかを明確にし説明できる。				
学習の留意点	実習前に、学生紹介書の書き方や挨拶・提出物の起源を守ること、報告・連絡・相談などを徹底して指導しておりますので、それを踏まえてご指導下さい。 また実習後には感想文やお礼状を書き、郵送させてます。文章の不備等がないか指導していきます。 学内に戻り、発表形式で実習な難をまとめさせておりますので、多くのことを見学できるようご配慮下さい。				
到達目標	理学療法士の仕事内容について理解し、説明できる。 リハビリテーションの考え方がどのように医療現場や介護福祉施設で実践されているのか理解できる。i				
授業形態	実習			対面	
関連科目	人間関係学	解剖学・生理学 ・運動学		検査測定法	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	1）病院・施設の理学療法士から、各施設での理学療法士の役割を学ぶ。 2）医療者として理学療法士の持つ責任と心構えについて学ぶ。 3）理学療法士が患者・利用者に対し、どのような接し方をしているか学ぶ。 4）患者・利用者とのコミュニケーションを通して、理学療法士に求められるものを学ぶ。 5）多職種との連携について学ぶ。 6）医療における礼節・態度・接遇について学ぶ。	
2回		
3回		
4回		
5回		
6回		
7回		
8回		
9回		
10回		
11回		
12回		
13回		
14回		
15回		

成績評価	臨床実習指導者の評価および担当教員の評価、提出物、学内発表の内容を踏まえて総合的に判断する。
課題やレポートに関するフィードバック	実習後、学内にて発表・課題提出を行い、事後にフィードバックする。
使用教材教科書	学校指定ケーシー、白靴、実習にふさわしい身だしなみが必要。施設によるが、通院時はスーツ着用。学生評価表やデイリーノート、出欠表など実習書類を持参する。
オフィスアワー	担任や理学療法学科教員

		理学療法学科 夜間部			
科目	自然科学	単位	2	コマ数	15
担当講師	野村 崇	学 年		2年生	
資格	義肢装具士				

科目概要	理学療法に関連する諸学問分野、特に運動学を理解するために必要な、物理学の基礎知識を身に付ける。		
学習の留意点	物理学、その中でも特に力学は様々な学問分野のベースになる学問であり、理学療法士にとっては解剖学や運動学等を理解する上で欠かせない基礎知識となる。物理学の領域は力学に限定しても非常に広範囲にわたるが、その中から理学療法士に関わりの深い分野、過去の理学療法士国家試験に出題された分野に絞って講義を行う。なお、各回の講義は独立したものではなく、前回までの講義内容が理解されていることを前提に次回以降の講義が組み立てられているので、講義は極力欠席せず、1回1回きちんと復習し、不明な点は臆することなく質問するようお願いしたい。		
到達目標	1. 専門科目を理解するために必要な物理学の知識を習得する。 2. 現実の場面で科学的な物の見方ができるようになる。		
授業形態	講義	対面	
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅱ, 運動学Ⅰ・Ⅱ, 物理療法学		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	力の合成 1	複数の力のベクトルの合成ができる
2回	力の合成 2	平行な力のベクトルの合成ができる
3回	力の分解	力のベクトルの複数方向への分解ができる
4回	三角形の比率	三角比・三角関数の概念と基本的な用法を理解し、これらを用いた計算ができる
5回	力のモーメント 1	力のモーメントの概念を理解し、モーメントの大きさの計算ができる
6回	力のモーメント 2	三角比・三角関数を用いた力のモーメントの計算ができる
7回	てこ	テコの種類と特徴を理解する
8回	輪軸と滑車	輪軸・滑車を用いた機構に働く力を求められる
9回	速度と加速度	速度・加速度の概念を理解し、これらを計算できる
10回	力と質量と加速度	力・質量・加速度の関係を理解し、これらを計算できる
11回	位置・速度・加速度・力	位置のグラフから速度・加速度・力の大小や変化を読み取ることができる
12回	重心	重心の概念を理解し、物体の重心位置を求められる
13回	様々な物理量	理学療法士国家試験で出題された、各種の物理量の概念を理解する
14回	総復習 1	力のモーメントに関する理学療法士国家試験問題を解くことができる
15回	総復習 2	力のモーメント以外に関する理学療法士国家試験問題を解くことができる

成績評価	定期試験で60%以上の得点を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項無し
使用教材 教科書	配布する資料のみ
オフィスアワー	平日日中、および土曜日午前（不定）

		理学療法学科 夜間部			
科目	運動学実習	単位	1	コマ数	23
担当講師	篠田良平	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	ヒトの姿勢・動作を観察して、文章として表現する能力を身につける。特に立位姿勢と歩行動作を複数人観察することで、正常なヒトの基本とその範囲や幅について理解を深める。グループで対象者を観察することで、専門用語による知識の相互理解や表現方法を学ぶ。				
学習の留意点	前半の授業では、立位姿勢を観察して文章化することを繰り返します。更に、日常生活やスポーツ履歴から現象の理由を予測していきます。グループで観察して見えた情報を共有することで、同じ情報を素材として出来上がった文章も共有して他者の表現方法を学べるようにします。後半の授業では、歩行動作を観察して時系列に文章化することを繰り返します。観察も文章化も、反復学習が必要な学習課題と言われています。健康人を繰り返し観察する機会は臨床でも無いので貴重な時間を有効に活用して欲しいと思います。				
到達目標	①立位姿勢観察を行い原因予測を交えながら文章化出来る。 ②歩行動作観察を行い時系列で文章化出来る。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	運動学Ⅰ	運動学Ⅱ		病態運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	臨床動作分析総論	臨床における動作分析の目的・意義・方法を学ぶ。
2回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
3回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
4回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
5回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
6回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
7回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
8回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
9回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
10回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
11回	立位姿勢分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
12回	基本動作分析	寝返り・起き上がり動作のポイント観察を行う。
13回	基本動作分析	寝返り・起き上がり動作のポイント観察を行う。
14回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
15回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
16回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
17回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
18回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
19回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
20回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
21回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
22回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。
23回	歩行動作分析	健康人の立位姿勢の観察と予測、文章化を行う。

成績評価	毎授業ごとにレポートを作成して提出。 合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	次回授業で添削レポートをフィードバック。
使用教材 教科書	教科書：動作分析 臨床活用講座-バイオメカニクスに基づく臨床推論の実践 石井真一郎 メジカルビュー
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	病理学概論	単位	2	コマ数	15
担当講師	脇 雅子	学 年		2年生	
資格	医学博士				

科目概要	解剖学や生理学で学習した人体の構造と機能をもとに、どのような原因で疾病が成立するのか、またその時細胞や組織でどのような変化が起きているかを学習する学問が病理学である。講義では、病因をはじめとして退行性・進行性病変、代謝障害。循環障害、炎症、感染症、免疫、腫瘍、先天異常、老化、などについて学ぶ。	
学習の留意点		
到達目標	基礎医学としての病理学用語を学習、記憶し、臨床の場で遭遇した疾病の原因・病態を理解し説明できるようにする。解剖学、生理学、病理学との連携を図り、疾病に関する幅広い知識を習得、理解できるようにする。	
授業形態	対面授業	
関連科目	内科老年学Ⅰ・Ⅱ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 神経内科学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	病因論	内因、外因：感染症、環境因子、栄養障害
2回	退行性病変	変性、萎縮、壊死
3回	進行性病変	肥大、過形成、化生、異形成、、再生、創傷治癒、
4回	代謝異常	タンパク質・アミノ酸代謝異常、核酸代謝異常
5回	代謝異常	脂質代謝異常、糖質代謝異常
6回	代謝異常	無機物質代謝異常、色素代謝異常
7回	循環障害	局所の循環障害：充血、うっ血、浮腫、出血、血栓症、塞栓症
8回	循環障害	血栓症、塞栓症、虚血、梗塞。全身の循環障害：高血圧症、低血圧症
9回	免疫	免疫反応、免疫担当細胞、アレルギー
10回	免疫、炎症	自己免疫疾患、炎症に関わる細胞、急性・慢性炎症、
11回	感染症	感染の分類、感染経路、病原体の種類、日和見感染症
12回	腫瘍	腫瘍の命名と分類、悪性腫瘍の進展形式、
13回	老化	加齢による各臓器の変化、増加する疾患
14回	先天異常	遺伝性疾患
15回	先天異常	染色体異常

成績評価	定期試験１００％。５９％（59点）以下を不合格とする
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材教科書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学 第5版 医学書院
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	臨床心理学	単位	2	コマ数	15
担当講師	小野寺 哲夫	学 年		2年生	
資格	公認心理師・臨床心理士				

科目概要	臨床心理学は、医療専門職として臨床実践を行う際の基礎（コア）となる学問であるとの観点から、患者の心理、および心理学的ニーズを的確に把握し、患者と信頼関係を構築し、リハビリテーションを行っていく上で、臨床心理学の知識と対人援助スキルは必要不可欠である。この授業では、フロイト精神分析学における防衛機制や転移－逆転移の知識、ロジャーズのカウンセリング技法から認知行動療法や森田療法などの各種心理療法や各種心理検査法の知識について学んでいく。さらに、PT/OTの国家試験問題に対応できるように講義内容と要点に関しては、特に国家試験出題頻度の高い内容に絞り込んで行われるので、学生は試験に出る内容を効率よく修得することができる。		
学習の留意点	臨床心理学の授業では、臨床心理学全般について学んでいくが、PT/OTの国家試験に頻出する3領域（防衛機制、心理検査、心理療法）を中心にセレクトし、その分野にフォーカスして、対面型の講義形式で授業を行う。講義形式であるが、アクティブラーニングを意識し、心理テストの実施、ペアディスカッション、リアクションペーパーの毎回の実施などを取り入れて、学生の主体性や能動的参加を促進する。		
到達目標	①臨床心理学の4つのパラダイムの特徴について説明できる。 ②フロイト精神分析学理論、および防衛機制、転移-逆転移について説明できる。 ③心理検査の種類と代表的な心理検査の特徴について説明できる。 ④ロジャーズのカウンセリング技法について理解し、説明できる。 ⑤交流分析の概要と交流分析の5つの自我状態について説明できる。 ⑥認知行動療法の原理とその実践方法について説明できる。 ⑦森田療法・内観法の特徴、およびキーワードについて説明できる。 ⑧国家試験に出題される心理療法の種類と特徴について説明できる。		
授業形態	講義	対面	
関連科目	精神医学, 実習全般		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	臨床心理学の総論	臨床心理学の定義、科学者－実践家モデル、心理学と臨床心理学の違いについて説明できる。
2回	フロイト精神分析学の基礎	フロイトの学説や心の構造論における3つのパーツの特徴について説明できる。
3回	精神分析学における防衛機制	国家試験に頻出する防衛機制について説明できる。
4回	精神分析学における転移－逆転移	「転移」と「逆転移」の重要な要点について説明できる。
5回	心理検査の概論	心理検査の4つのカテゴリーの概要について説明できる。
6回	心理検査の応用	心理検査の性格検査の「投影法」と「神経心理学的検査」のカテゴリーについて説明できる。
7回	ロジャーズのカウンセリング理論	カール・ロジャーズの業績、自己理論、およびセラピストの3条件について説明できる。
8回	ロジャーズのカウンセリング技法	ロジャーズが提唱した「6つの傾聴技法」について説明・模倣できる。
9回	交流分析（Transactional Analysis：TA）	エゴグラムを体験し、5つの自我状態の特徴について説明できる。
10回	認知行動療法（CBT）の基礎	アーロン・ベックの業績と認知行動療法（CBT）の基本的な考え方について説明できる。
11回	認知行動療法（CBT）の実際	「自動思考」、「スキーマ」、「認知の歪み」について説明できる。
12回	森田療法の基礎	森田正馬の生涯と森田療法の成り立ちについて説明できる。
13回	森田療法の実際	森田療法に関するキーワード（絶対臥褥、あるがまま受容、日記指導）について説明できる。
14回	内観療法	吉本伊信が創始した内観法の成り立ちと基本概念、および内観三問について説明できる。
15回	実存的心理療法（ロゴセラピー）	フランクルの「生きる意味」の哲学とマズローの自己実現論との違い、およびロゴセラピーの基本概念について説明できる。

成績評価	期末レポート課題（90％）、毎回のミニレポート課題（10％）で評価する。
課題やレポートに関するフィードバック	毎回のミニレポート課題は、授業で学んだ内容について、感想や自分の意見、質問等を比較的自由に書いて提出する。毎回の授業において教科書は必ず使用する。
使用教材 教科書	PT・OTのための心理学・臨床心理学 JFAパブリッシング 小野寺哲夫
オフィスアワー	水曜日の夜間部授業前後（不在の場合はメールで相談してください）

		理学療法学科 夜間部			
科目	内科学・老年学Ⅰ	単位	2	コマ数	15
担当講師	草野 修輔	学 年		2年生	
資格	医師				

科目概要	リハビリテーションの対象となる患者は内部障害者の他に、多数の内科系疾患を合併している患者さんが多く、内科系疾患の理解がないと適切なリハビリテーションが実施できないことや、現在のチーム医療という観点からも内科系疾患の理解が必要である。内科学全般にわたり、病態、症候、検査、治療について主にスライドを利用した講義、国試過去問を利用して理解を深める。	
学習の留意点	各講義に即したミニテストを理解度の確認とする	
到達目標	主要な内科疾患の病態、症候、検査、治療について理解し、説明できる。	
授業形態	講義	対面授業
関連科目		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	内科学総論 1	内科学の歴史的背景、内科学の専門分化、最近の内科学の変遷、診断と治療 カルテの取扱いに関する事項
2回	内科学総論2	診察法・症状・治療・臨床検査
3回	内科学総論3	症候学（発熱、全身倦怠感、食欲不振、悪心・嘔吐、易感染性など）
4回	循環器 総論	循環器系の解剖と生理、循環器疾患の主要な症候、循環器疾患の診断法
5回	循環器 各論 1	高血圧症、低血圧症、虚血性心疾患
6回	循環器 各論 2	心筋疾患、弁膜症、先天性心疾患、心不全
7回	循環器 各論 3	不整脈、肺性心、大動脈疾患、末梢血管疾患
8回	呼吸器 総論	肺の解剖と生理、呼吸器疾患の症候とその病態生理、臨床検査所見
9回	呼吸器 各論 1	感染性肺疾患、肺結核、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、気管支喘息
10回	呼吸器 各論 2	拘束性肺疾患、肺腫瘍
11回	呼吸器 各論 3	サルコイドーシス、ウェゲナー肉芽腫、肺循環障害、胸膜疾患、横隔膜疾患、呼吸異常
12回	消化器 総論	消化器の解剖と生理、消化器疾患の症候と病態生理、消化器疾患の診断法
13回	消化器 各論 1	口腔疾患、食道疾患、胃疾患
14回	消化器 各論 2	小腸・大腸疾患、肛門疾患
15回	前期のまとめ	前期講義のまとめ

成績評価	定期試験：筆記試験50%＋レポート課題50%
課題やレポートに関するフィードバック	ミニテストがある講義では、まとめとしてミニテストを提示するが、理解度のチェックと復習にも活用する。
使用教材 教科書	なし
オフィスアワー	授業時間前後で質問に応じます。

		理学療法学科 夜間部			
科目	内科学・老年学Ⅱ	単位	2	コマ数	15
担当講師	草野 修輔	学 年		2年生	
資格	医師				

科目概要	リハビリテーションの対象となる患者は内部障害者の他に、多数の内科系疾患を合併している患者さんが多く、内科系疾患の理解がないと適切なリハビリテーションが実施できないことや、現在のチーム医療という観点からも内科系疾患の理解が必要である。内科学全般にわたり、病態、症候、検査、治療について主にスライド利用した講義、国試過去問を利用して理解を深める。	
学習の留意点	各講義に即したミニテストを理解度の確認とする	
到達目標	主要な内科疾患の病態、症候、検査、治療について理解し、説明できる。	
授業形態	講義	対面授業
関連科目		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	肝胆膵疾患	肝胆膵腹膜の解剖と生理、検査法、肝胆疾患、膵疾患、腹膜疾患
2回	血液・造血器疾患	血液の成分と生理、症候、検査法、赤血球系疾患、白血球系疾患、出血性疾患、血栓性疾患など
3回	代謝性疾患	代謝・栄養の異常総論、糖尿病、脂質異常症、メタボリックシンドローム、アミロイドーシス、高尿酸血症など
4回	内分泌疾患	内分泌総論、下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患など
5回	腎・泌尿器疾患	腎の解剖と生理、腎不全、糸球体疾患、尿細管疾患、尿路系疾患、前立腺疾患など
6回	膠原病 1	膠原病の診断と治療、SLE
7回	膠原病 2	関節リウマチ、多発性筋炎・皮膚筋炎、強直性脊椎炎、シェーグレン症候群、ベーチェット病など
8回	アレルギー・免疫疾患	アレルギー・免疫のメカニズム、アレルギー疾患、免疫不全症など
9回	骨・運動器疾患	骨粗鬆症、ロコモティブシンドローム、サルコペニア、フレイルなど
10回	神経疾患	神経系の構造と老化、脳血管障害、パーキンソン病、末梢神経障害、頭部外傷など
11回	認知症・精神疾患	認知症、うつ病など
12回	高齢者の介護と在宅医療	尿路系疾患、前立腺疾患、電解質代謝の異常
13回	緩和医療・終末期医療	緩和医療と終末期医療
14回	健康寿命の延伸	健康寿命の延伸
15回	後期授業のまとめ	後期授業のまとめ

成績評価	定期試験：筆記試験50%＋レポート課題50%
課題やレポートに関するフィードバック	講義内容に則したミニテストを行うことで理解度をチェックする。また復習の確認にも用いてもらう。
使用教材 教科書	なし
オフィスアワー	授業時間前後で質問に応じます。

				理学療法学科 夜間部			
科目		整形外科学Ⅰ		単位	2	コマ数	15
担当講師		星野 雄一		学 年		2年生	
資格		医師、日本医師会認定産業医、元整形外科専門医、元脊椎脊髄外科指導医 元日整会認定リハビリテーション認定医					
科目概要		整形外科は、骨・関節・筋肉・神経などにより構成される運動器の障害に対して、保存治療と手術を含む幅広い診療を担当している。 整形外科学Ⅰでは運動器に関する基礎的事項と身体部位別の外傷・疾患に関する講義を行う。					
学習の留意点		運動器の外傷や疾患の診療においては、病態の原因に関するしっかりとした理解が必要である。このような理解の基盤として運動器に関する基礎的知識を獲得し、次いで科学的根拠のある診療行為の実践法を学んでいただきたい。あわせて、運動器に関する保存的あるいは手術的治療のいずれにおいても、理学療法士の関与が不可欠であることに注目していただきたい。					
到達目標		整形外科は美容外科とは違うことを認識し、骨・関節・筋肉・神経など運動器の構成要素の解剖や生理の基礎知識が、診療においていかに重要であるかを理解する。日常診療で遭遇する頻度の高い運動器の外傷や疾患に対する整形外科的診断法や治療法、さらには理学療法の実践に際する注意事項なども会得する。					
授業形態		講義			対面		
関連科目		運動学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ, 運動療法学Ⅰ・Ⅱ, 疾患別理学療法Ⅰ					
授業計画							
回数	授業内容			行動目標			
1回	整形外科学とは？ 整形外科診断学			整形外科は運動器の外傷・疾患を担当する診療科であること、及び運動器障害の診断学の重要性を理解する。			
2回	整形外科的治療法			整形外科的治療には、保存治療、手術、予防の3者があり、そのいずれにおいても理学療法士の関与が必須であることを理解する。			
3回	軟部組織損傷			皮膚、皮下組織、筋、腱、靱帯など、骨以外の組織の役割を理解し、それらの障害からの回復における理学療法法の要点を会得する。			
4回	骨関節の損傷 総論			骨・軟骨損傷のメカニズムと修復過程を理解し、修復や予防における運動療法法の重要性を認識する。			
5回	肩関節・上腕の外傷・疾患			肩甲上腕リズムや肩回旋腱板など特殊な構造を理解し、外傷・疾患の標準的診療法を身につける。			
6回	肘関節・前腕の外傷・疾患			モンテジア、ガレアッツィなどの骨折を理解し、神経麻痺や血流障害などの合併症にも気づくことが出来る。			
7回	手関節・手指の外傷・疾患			橈骨遠位端骨折の種類、手指のバイオメカニクス、腱損傷と指の変形などを理解し、精緻なリハビリテーションを実施できる。			
8回	股関節・大腿の外傷・疾患			大腿骨近位部骨折、人工股関節手術、小児の股関節疾患などの理解を深め、早期からのリハビリテーションを注意深く実施出来る。			
9回	膝関節・下腿の外傷・疾患			変形性膝関節症、膝靱帯損傷などを理解し、保存療法や手術後などで必須であるリハビリテーションを実施できる。			
10回	足関節・足部の外傷・疾患			足関節の骨折や捻挫、足部障害などを理解し、適切なアドバイスやリハビリテーションを実施出来る。			
11回	脊椎脊髄の構造・外傷			脊柱・脊椎・脊髄の基礎的事項を理解し、外傷や加齢性疾患の診療におけるリハビリテーションの役割を説明できる。			
12回	脊髄損傷①			脊髄損傷の診断において不可欠である、高位診断、重症度判定、予後の推測などの知識を会得する。			
13回	脊髄損傷②			脊髄損傷の治療における、保存療法、手術、再生医療などへの理解を深め、後療法としてのリハビリテーションの重要性を認識する。			
14回	脊椎脊髄の疾患①			頸椎・腰椎に頻発する加齢性疾患などに対する治療法を理解し、保存治療におけるリハビリテーションの役割を認識する。			
15回	脊椎脊髄の疾患②、骨盤の外傷・疾患			椎間板ヘルニアや脊椎湾曲異常を理解し、治療におけるリハビリテーションの役割を認識する。			
成績評価	定期試験の60%以上の者を合格とします。						
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし						
使用教材教科書	整形外科学テキスト 改訂第5版 高橋邦康・芳賀信彦 編集 南江堂 2023 講師がまとめた前週講義のポイント集を、次週講義時に配布します。						
オフィスアワー				特記事項なし 1			

				理学療法学科 夜間部			
科目		整形外科学Ⅱ		単位	2	コマ数	15
担当講師		星野 雄一		学 年		2年生	
資格		医師、日本医師会認定産業医、元日本整形外科学会専門医、元日本脊椎脊髄外科学会指導医、元日本整形外科学会認定リハビリテーション認定医					
科目概要		整形外科は、骨・関節・筋肉・神経などにより構成される運動器の障害に対して、保存治療と手術を含む幅広い診療を担当している。整形外科学Ⅱではリウマチや骨粗鬆症などの全身性疾患、四肢の末梢神経障害、ロコモティブシンドロームなどの予防的概念、さらにはスポーツ整形外科などを学習する。					
学習の留意点		運動器の外傷や疾患の診療においては、病態の原因に関するしっかりとした理解が必要である。このような理解の基盤として運動器に関する基礎的知識を獲得し、次いで科学的根拠のある診療行為の実践法を学んでいただきたい。あわせて、運動器に関する保存的あるいは手術的治療のいずれにおいても、理学療法士の関与が不可欠であることに注目していただきたい。					
到達目標		外傷などの局所的障害以外の整形外科的疾患について学ぶ。先天異常、全身性疾患、加齢など退行変性による疾患、スポーツ障害などを理解する。また国民病であるロコモ やフレイルの概念を学ぶことにより、国民全体の健康増進を目指して、理学療法士として指導していくために必須な知識を会得する。					
授業形態		講義			対面		
関連科目		運動学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ, 運動療法学Ⅰ・Ⅱ, 疾患別理学療法Ⅰ					
授業計画							
回数	授業内容			行動目標			
1回	慢性関節疾患			変形性関節症、関節の炎症、結晶性関節炎などの病態を理解し、対処法を会得する。			
2回	関節リウマチの診断と評価			関節リウマチの評価法として、分類基準2010やスタインブロッカー分類などを理解する。			
3回	関節リウマチの治療			関節リウマチの治療における最近の動向を学習し、併せて手術適応、術後リハビリ、装具療法等に関してもその要点を理解する。			
4回	感染症			感染による骨髄や関節の炎症性疾患の概要を学び、感染症におけるリハビリテーションの留意点を会得する。			
5回	代謝・内分泌疾患			骨粗鬆症や骨軟化症などへの理解を深め、リハビリテーション実施上の注意点なども学習する。			
6回	ロコモティブシンドロームと運動器不安定			日本の整形外科が発信しているロコモに関して学習し、高齢社会における運動器障害予防における理学診療の重要性を認識する。			
7回	骨・軟部腫瘍			骨原発の良性・悪性腫瘍および骨転移癌等に関する理解を深め、その対処法およびリハビリテーションの注意点を説明出来る。			
8回	末梢神経①			末梢神経の機能評価、損傷分類、治療の原則を理解し、腕神経叢および上肢の末梢神経障害の診療を概説できる。			
9回	末梢神経②			下肢の末梢神経障害およびトンネル症候群についての理解を深め、麻痺の評価およびリハビリテーションの注意事項を説明出来る。			
10回	脳性麻痺			脳性麻痺の原因、評価法、治療体系、補装具療法などの学び、リハビリテーション実践者としての注意点を会得する。			
11回	筋ジストロフィー・骨系統疾患			筋ジスの病態をジストロフィンとの関連で説明出来る。障害されるコラーゲンのタイプにより、病態が変わることを理解する。			
12回	骨壊死・骨端症および四肢循環障害			人名で呼ばれる各種の骨壊死症をX線写真で指摘出来る。動脈および静脈の疾患の病態、診断法、対処法などを概説できる。			
13回	四肢の切断・欠損			四肢の切断の部位による名称を言える。断端のケアの要点を理解し、義肢装着に至る指導を行える。技師の基本構造を理解する。			
14回	慢性疼痛疾患			疼痛に関する考え方の発展について学び、とくに神経障害性疼痛、慢性疼痛、感覚変調性疼痛などについての理解を深める。			
15回	スポーツ整形外科・パラスポーツ			スポーツ障害やアスレティックリハビリテーションについて学び、年齢や競技の特性を考慮した上での運動指導を行えるようになる。			
成績評価	定期試験 6 0 %以上の者を合格とする。						
課題やレポートに関するフィードバック	特記徐行なし						
使用教材教科書	整形外科学テキスト 改訂第5版 南江堂 高橋邦康・芳賀信彦 編集 2023 講師がまとめた前講義のポイント集を、次回講義時に配布し解説します。						
オフィスアワー				1 特記徐行なし			

		理学療法学科 夜間部			
科目	神経内科学	単位	2	コマ数	15
担当講師	斎藤 史朗・真先 敏広	学 年		2年生	
資格	医師・神経内科専門医				

科目概要	超高齢社会をむかえた我が国においては脳血管障害や認知症などの神経疾患に遭遇する機会は大幅に増えています。本科目ではこれら神経疾患に対する理解を深めてもらうため、基礎から最先端の医療までを幅広く解説していきます。また知識の定着を図るため適宜小テストを実施します。		
学習の留意点	神経疾患の診断は新たな画像診断や遺伝子診断技術の開発により大きな進歩を遂げました。また治療に関しても抗体医薬の導入から再生医療や遺伝子治療の臨床応用までも見据え、大きな変貌を遂げる過渡期にさしかかっているといえます。しかしながらこれら神経疾患の診療において、今後もリハビリテーションが大きなウエイトを占めるであろう事は想像に難くありません。特にコモンディージーズである脳血管障害はリハビリテーションの代表的な対象疾患です。この授業では最新情報を含むプリント教材を中心に、スライド、ビデオなどを用いてこれらの問題点を解説していきます。将来君たちが理学療法士となった時に臨床現場にすぐにでもフィードバックできるよう、集中して受講して欲しいと思います。		
到達目標	1. 神経系の構造、機能を説明できる。 2. 神経徴候の出現機序を理解し説明できる。 3. 神経疾患の原因、症状を説明できる。 4. 神経疾患の対処法、治療法を説明できる。		
授業形態	講義	対面	
関連科目	〃解剖学Ⅲ・生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ, 検査測定法Ⅲ, 小児科学, 疾患別ⅡA・Ⅲ, PT技術論Ⅴ, 疾患別理学療法Ⅴ		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	総論 1 ・神経学的診察・検査法□	神経学的診察・検査法を説明できる□
2回	総論 2 ・運動麻痺と筋萎縮□	運動麻痺と筋萎縮の病態を説明できる□
3回	総論 3 ・錐体外路障害、運動失調□	錐体外路障害、運動失調の病態を説明できる□
4回	総論 4 ・感覚障害	感覚障害の病態を説明できる□
5回	総論 5 ・意識障害、高次脳機能障害	意識障害、高次脳機能障害の病態を説明できる□
6回	総論 6 ・脳神経障害、構音・嚥下障害、めまい	脳神経障害、構音・嚥下障害、めまいの病態を説明できる□
7回	各論 1 □脳血管障害 1 脳梗塞	脳血管障害 1 ・脳梗塞の原因や症状、治療法を説明できる□
8回	各論 2 □脳血管障害 2 脳出血□	脳血管障害 2 ・脳出血の原因や症状、治療法を説明できる□
9回	各論 3 □認知症□	認知症の種類や症状を説明できる□
10回	各論 4 ・パーキンソン病と他の不随意運動症□	パーキンソン病の症状と他の不随意運動症を説明できる□
11回	各論 5 □筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症	筋萎縮性側索硬化症や脊髄小脳変性症の症状を説明できる□
12回	各論 6 □ニューロパチーとミエロパチー	ニューロパチーやミエロパチーの原因と症状を説明できる□
13回	各論 7 □多発性硬化症、ギラン・バレー症候群	多発性硬化症やギラン・バレー症候群の症状や治療法を説明できる□
14回	各論 8 □筋ジストロフィーとその他の筋疾患□	筋ジストロフィーや他の筋疾患の症状を説明できる□
15回	各論 9 □その他の疾患	てんかんや頭痛など他の神経疾患の症状を説明できる□

成績評価	定期試験6割以上のものを合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは必要に応じてその都度実施します。
使用教材教科書	授業は配布するプリント教材を中心に進めます。 その他自主学習、参考教材として以下を推薦します。 1) 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 神経内科学 2) 病気がみえる vol.7 脳・神経
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	精神医学	単位	2	コマ数	15
担当講師	河邊 宗知	学 年		2年生	
資格	作業療法士/公認心理師				

科目概要	理学療法の臨床においても、精神障害を持つ患者や、高齢期の患者は多く、基本的な精神医学の知識は必要であると思われる。また、理学療法士国家試験においても、問題数も多く必要な知識であるといえる。 1. 精神障害に対して、症状の特徴、経過、基本的知識を習得する。 2. 精神障害者を同じ社会で生きる人として、全人的に理解し、将来的にリハビリテーションを提供する臨床家としてかかわるために基本的知識を習得する		
学習の留意点	精神障害は障害による困難性が可視化されづらく、理解することが難しい傾向がある。 また、疾患の診断基準、症状、障害、生活上の困難性が多様である。 そのため以下のことに留意しながら受講していただきたい。 ① 精神医学の歴史的経緯の概要を説明することが出来る ② 主要な精神疾患の症状の名称、症状ごとの相違について概要を説明することが出来る ③－1 精神疾患の経過の概要について説明できる。 ③－2 障害当事者の生活上の困難さについて具体事例を説明できる。 授業内では、配布資料のほか、映像教材なども用いて、理解しやすいように実施する予定である。		
到達目標	一般目標（GIO） 精神疾患について理解し、治療・援助を行うための基礎知識について理解する。 行動目標（SBO） ① 精神医学の歴史および現状について説明することが出来る ② 主要な精神疾患の症状について説明することが出来る ③ 精神疾患の経過や治療、生活上の困難さについて説明できる		
授業形態	講義	対面	
関連科目	臨床心理学, 実習全般		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	精神医学総論①	精神障害と診断基準（従来の診断法と操作的診断法：ICD、DSM）、精神医学の歴史、脆弱性ストレスモデル について説明できる
2回	精神医学総論②	精神機能の障害と精神症状（意識、注意、知能、パーソナリティ、記憶、感情、自我障害、知覚障害、思考障害、病識）について説明できる
3回	疾患論①	てんかん（分類法、症状について）について説明できる
4回	疾患論②	依存症（アルコール、その他の物質使用障害、嗜癖行動障害）について説明できる
5回	疾患論③	統合失調症①(主要な精神症状、精神症状の特徴) について説明できる
6回	疾患論④	統合失調症②（症状と生活障害、薬物療法・精神療法・リハビリテーション）について説明できる
7回	疾患論⑤	気分障害①（大うつ病）について説明できる
8回	疾患論⑥	気分障害②（双極性障害、その他の気分障害、薬物療法とリハビリテーション、リワークプログラムについて）説明できる
9回	疾患論⑦	神経症性障害①（不安、強迫、ストレス関連障害）について説明できる
10回	疾患論⑧	神経症性障害②（解離性障害、身体表現性障害、その他の神経症性障害、薬物療法と精神療法・リハビリテーション）について説明できる
11回	疾患論⑨	神経発達障害（自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、特異的学習症、発達協調運動症、発達過程における神経発達症の困難性について、治療・リハビリテーション）について説明できる
12回	疾患論⑩	パーソナリティ障害（パーソナリティ概説、ICD・DSMに基づく障害分類、治療・リハビリテーション）について説明できる
13回	疾患論⑪	生理的障害（摂食障害、睡眠障害ほか）、行動の障害、性の障害について説明できる
14回	疾患論⑫	器質性精神障害（認知症ほか身体疾患に伴う精神疾患・精神症状、薬物療法・リハビリテーション）について説明できる
15回	精神医学総論③	総括、精神科リハビリテーション、コンサルテーション・リエゾン精神医学、多職種連携、精神専門療法、作業療法・理学療法との関連について説明できる

成績評価	講義内で教える基本的知識の評価（定期試験）80% 講義内で行う基本的知識の確認（小テスト）10% 授業の振り返りレポート10% 6割以上のものを合格とする				
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし				
使用教材教科書	精神医学第4版増補版 標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野：医学書院 配布資料				
オフィスアワー	授業後の時間にて対応する				

		理学療法学科 夜間部			
科目	小児科学	単位	1	コマ数	8
担当講師	江添 隆範	学 年		2 年生	
資格	小児科学会専門医 小児神経学会専門医 臨床遺伝専門医				

科目概要	小児の発達、発育を理解する。小児の保健（予防接種、健診など）を知る。小児に特有の疾患の病態、症状、診断と治療を学ぶ				
学習の留意点	講義は教科書を基礎に、重要と考えられる項目を講義で簡潔に説明する。講義中によく理解して、配布資料を復習するようにして下さい。				
到達目標	生後から幼児期までの発達、反射の変化を理解する。小児特有の疾患を理解する。				
授業形態	パワーポイントで作成したスライドで講義します。資料は、当日配布します。				
関連科目	生理学Ⅰ	人間発達学		脳性麻痺や筋ジストロフィー症の講義	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	小児科学総論、小児保健	小児の発達、発育 反射の変化 予防接種等について理解する。
2回	新生児疾患、未熟児/先天異常・遺伝疾患	早産児、仮死、新生児期の疾患 染色体異常、遺伝子疾患の理解
3回	小児神経疾患	髄膜炎・脳炎脳症 脳形成異常 筋ジストロフィー症の理解
4回	小児神経疾患	てんかん、脳性麻痺、神経発達症（発達障害）
5回	循環器疾患/感染症	先天性心疾患 川崎病/先天感染性感染症 麻疹、水痘等の小児に多い感染症を学ぶ
6回	消化器疾患/内分泌・代謝疾患	小児に特有の消化器疾患/先天性の内分泌疾患、成長ホルモン分泌不全等の小児疾患を学ぶ
7回	血液・腫瘍疾患/腎疾患/アレルギー疾患	小児の血液疾患（白血病、血友病等）腎疾患（腎炎、ネフローゼ症候群）喘息やアトピー性皮膚炎などを学ぶ
8回	重症児者の病態/まとめ	重症心身障害の医療について知識を深める/講義のまとめ

成績評価	筆記試験
課題やレポートに関するフィードバック	講義の確認テストを単元のまとまりで数回実施し、復習する。試験の解説を講義中に実施
使用教材 教科書	標準理学療法・作業療法学 小児科学 第6版
オフィスアワー	講義の前、早めに来校しています。質問があれば、講師控え室に来てください。

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法研究法	単位	1	コマ数	8
担当講師	高林礼子	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	リハビリテーションや理学療法における研究の意義を考え，研究に必要な基本的な知識や方法論を習得する。				
学習の留意点	学生にとってはなじみの少ない領域であるが、今後研究論文を読む機会があった際、しっかり読み込めるようになるという意気込みで授業に臨んでほしい。また、研究を臨床に出た際、行う時の足掛かりになるよう、少しでも講義を理解するようにしてほしい。				
到達目標	研究の目的，研究様式，研究の流れ，方法について学ぶ．研究の倫理について学ぶ．文献の探し方，文献レビューの方法について学ぶ．				
授業形態	講義		対面		
関連科目	情報科学	0		0	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	研究とは	研究とは何か、その目的や種類などを学ぶ。
2回	研究デザインの基礎知識	研究デザインについて学ぶ。
3回	研究計画の立て方とバイアスの考慮	研究計画をどのように立てるか、バイアスについて学び、以下に対応するかを学ぶ。
4回	対象を決める・データを取る	どのようなものを調べたいのか、そのためにはどのような対象を選ぶべきかを学び、データのとり方を学ぶ。
5回	データの統計分析	データをどのように統計処理をするか、基本 t 黄な手法でそれを学ぶ。
6回	関連を見る	得られたデータを統計処理して、それらのデータ通しの関連を見る。
7回	2変量解析、分散分析	2変容解析、分散分析についてどのような時にどのようにして処理するか学ぶ。
8回	多変量解析	多変量解析について学ぶ。時間があれば、国家試験の過去問を解いてみる。
9回	0	0
10回	0	0
11回	0	0
12回	0	0
13回	0	0
14回	0	0
15回	0	0

成績評価	毎回、A4用紙1枚程度の用紙に気になる用語を調べ、書いてもらい。それが3割。試験が7割。合わせて6割以上の点数となったものを合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	提出されたレポートをチェックしたのち返却し、どこが理解できているのか、いないかを知ってもらう。
使用教材 教科書	参考書：最新理学療法学講座 理学療法研究法 対馬 栄輝（編集） 医歯薬出版 看護の現場ですぐに役立つ 看護研究のポイント 大口祐矢（著） 秀和システム
オフィスアワー	メールでの連絡は随時r-takabayashi@nichireha.ac.jp 担当授業の前後

		理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法Ⅲ(中枢神経テスト)	単位	2	コマ数	15
担当講師	内山 結城	学 年		2 年生	
資格	理学療法士				

科目概要	この授業は主に中枢神経疾患に用いられる理学療法検査を網羅したものである。実際に検査ができ、結果を解釈できることを目的とした理学療法評価学の科目の一つである。				
学習の留意点	本授業は検査内容が多いことから単元ごとに知識を整理するために国家試験に準じた問題等に取り組んでいただく。中枢神経系の障害がもたらす症状はイメージしづらいことが多い。そこで画像や模擬患者体験等を行い、障害像を理解しやすいように工夫する。臨床での経験を伝えることで中枢神経系疾患に関心をもっていただく。				
到達目標	①各検査の要項と実施方法を理解し、実際に検査ができる。 ②病態に応じて必要な検査項目を抽出できる。 ③検査結果を解釈できる。				
授業形態	実技			対面	
関連科目	解剖学	生理学		運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	脳神経検査①	脳神経の概要、Ⅰ．嗅神経、Ⅱ．視神経、Ⅲ．動眼・滑車・外転神経を説明、検査ができる。Ⅳ．三叉神経、Ⅴ．顔面神経を説明、Ⅵ．内耳神経、できる
2回	脳神経検査②	Ⅶ．舌咽・迷走神経を説明、検査ができる。Ⅷ．副神経、Ⅸ．舌下神経を説明、検査ができる。
3回	反射・痛みの検査①	反射とは、深部腱反射の説明、検査ができる。
4回	反射・痛みの検査②	深部腱反射、表在反射が説明・検査ができる。表在反射反射所見が記録できる。痛みの検査ができる。
5回	筋緊張検査①	筋緊張の神経学的基本事項・異常が説明できる。筋緊張検査ができる。
6回	筋緊張検査②	筋緊張検査ができる。
7回	バランス評価①	バランスの評価とその種類について説明できる
8回	バランス評価②	バランス検査ができる。
9回	協調性検査①	協調性障害、運動失調の分類が説明できる。
10回	協調性検査②	協調性検査ができる。
11回	片麻痺機能検査①	共同運動と連合反応、片麻痺運動障害の特徴を説明できる。
12回	片麻痺機能検査②	Brunnstrom testを説明、検査ができる。12段階式片麻痺機能テスト、脳卒中機能評価法（SIAS）を説明、検査できる。
13回	高次脳機能検査①	高次脳機能障害を説明できる。失認を説明、検査ができる。
14回	高次脳機能検査②	失認・失行を説明、検査できる。
15回	まとめ	講義、実技の復習と補足

成績評価	小テスト40％　グループ（ペア）ワーク10％　　　試験50%
課題やレポートに関するフィードバック	授業序盤あるいは終盤に小テストを行う。
使用教材 教科書	理学療法評価学　第6版補訂版 教員が作成したレジメ　プリント
オフィスアワー	基本火曜日15：30～17：00　※木曜日以外のスケジュールが空いている時間は対応いたします

		理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法Ⅳ(整形外科テスト)	単位	6	コマ数	15
担当講師	内山 結城	学 年		2 年生	
資格	理学療法士				

科目概要	国家試験でも頻出する整形外科疾患の症状を関節毎に捉え、理学療法評価の選定・方法・結果の解釈ができるよう実技演習を中心に講義しつつ、障害特性による日常生活活動や移動能力の問題を考えられるよう学生自身の思考力を促す。				
学習の留意点	整形外科テストの成り立ちを経験しながら、関連する各疾患の特徴を理解して欲しいので、よく考え、積極的に参加し、疑問は手を挙げて担当教員を呼んで下さい。 実施内容を十分に記述することで理学療法記録を作成するのと同様の経験もしていただきたいと思います。 クラスメイト同士で行うとはいえ、丁寧に触らないとお互い学び合うことはできないので、爪切りやアクセサリの管理を徹底してください。またお互い十分に学ぶために不快なく、動かしやすい格好をしてください。 小テストで理解を深めていただきますので復習しましょう。				
到達目標	①整形外科疾患に起こりやすい症状を説明できる。 ②整形外科疾患でよく使われる評価・治療を実践できる。 ③局所的な症状,全身からくる症状を説明できる。 ④PBLを通してADL等への悪影響を説明できる。				
授業形態	実技		対面		
関連科目	解剖学・運動学・生理学	検査測定法 Ⅰ・Ⅱ		整形外科学 Ⅰ・Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	講義オリエンテーション・姿勢分析頸部の整形外科テスト（1）	姿勢観察を体験し、局所の問題点の発見や左右差を観察・記録できる頸部の整形外科テストを実施できる
2回	頸部の整形外科テスト（2）	頸部の整形外科テストを実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
3回	肩関節の整形外科テスト（1）	肩関節の整形外科テストの前半部分を実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
4回	肩関節の整形外科テスト（2）	肩関節の整形外科テストの後半部分を実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
5回	肩関節の整形外科テスト（3）	肩関節の整形外科テストを全て復習・実施できる
6回	肘関節・手関節・手指の整形外科テスト	肘関節・手関節・手指の整形外科テストを実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
7回	腰椎の整形外科テスト	腰椎の整形外科テストを実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
8回	骨盤の整形外科テスト	骨盤の整形外科テストを実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
9回	治療演習	簡単なストレッチなどを通して腰椎・骨盤の整形外科テスト結果を変え、治療介入体験を実施する
10回	股関節の整形外科テスト	股関節の整形外科テストを実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
11回	膝関節の整形外科テスト（1）	膝関節の整形外科テストの前半部分を実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
12回	膝関節の整形外科テスト（2）	膝関節の整形外科テストの後半部分を実施できる/疾患ごとに整形外科テストを分類できる
13回	腰椎・骨盤・股関節の整形外科テストの復習	腰椎・骨盤・股関節の整形外科テストをスムーズに実施し、分類できる
14回	足関節の整形外科テスト肩関節の整形外科テストの復習	足関節の整形外科テストをスムーズに実施し、分類できる/肩関節テストの復習を実施できる
15回	総復習・まとめ	各関節・各疾患ごとにまとめ、分類・実施できる

成績評価	定期試験100点満点中60点以上で合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	授業序盤あるいは終盤に小テストを行う。
使用教材教科書	”病態動画から学ぶ臨床整形外科的テスト～的確な検査法に基づく実践と応用 編集：吉田一也 限元庸夫 HUMANPRESS 担当教員が作成した配布プリントを使用、随時、評価記録用紙などを配布 骨模型、ゴニオメータ等
オフィスアワー	基本火曜日15：30～17：00 ※木曜日以外のスケジュールが空いている時間は対応いたします

		理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法演習 I	単位	1	コマ数	15
担当講師	木下 高橋豊	学 年		2年生	
資格					

科目概要	検査測定演習では、様々な検査器具を利用して評価するための測定技術を習得します。角度計・メジャー測定器から、測定器方法、カメラなどの高度な測定器まで幅広く扱い、正しい測定方法、測定結果の解析、評価方法を実践的に学びます。				
学習の留意点	検査測定演習において、学生が意識・工夫すべき点は以下の通りです。目的意識：何を測定し、その結果から何を理解したいのかを明確にする。正確性：正しい手順、適切な器具の選択、丁寧な操作を心がけ、誤差を最小限に抑える。再現性：同じ条件で測定した場合、同じ結果が得られるように、測定方法を標準化する。考察：測定結果を多角的に分析し、理論値とのずれや誤差の原因を考察する。コミュニケーション：結果や考察を論理的に説明し、他者と意見交換することで理解を深める。これらの点を意識することで、検査測定のス킬向上だけでなく、科学的な思考力や問題解決能力も養われます。				
到達目標	測定器を正しく操作し、正確なデータ取得・分析を行う。得られた結果から考察・改善点を導き出し、安全な実験環境を維持する。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	検査測定学	疾患別理学療法		解剖・整理・運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	問診、血圧脈拍測定	丁寧な問診と正確な血圧脈拍測定を実施正確な測定実施問診で全体像把握、正確な測定
2回	問診、血圧脈拍測定	丁寧な問診と正確な血圧脈拍測定を実施正確な測定実施問診で全体像把握、正確な測定
3回	肢長・周径	肢長周径を定期的に計測し、変化を把握することで、健康状態の変化に早期に対応する。
4回	肢長・周径	肢長周径を定期的に計測し、変化を把握することで、健康状態の変化に早期に対応する。
5回	関節可動域測定上肢	関節可動域を維持・改善し、日常生活動作の質を高める。
6回	関節可動域測定上肢	関節可動域を維持・改善し、日常生活動作の質を高める。
7回	関節可動域測定下肢	関節可動域を維持・改善し、日常生活動作の質を高める。
8回	関節可動域測定下肢	関節可動域を維持・改善し、日常生活動作の質を高める。
9回	MMT上肢	安全に配慮し、患者に合わせた検査を実施する。
10回	MMT上肢	安全に配慮し、患者に合わせた検査を実施する。
11回	MMT下肢	安全に配慮し、患者に合わせた検査を実施する。
12回	MMT下肢	安全に配慮し、患者に合わせた検査を実施する。
13回	MMT体幹	安全に配慮し、患者に合わせた検査を実施する。
14回	MMT体幹	安全に配慮し、患者に合わせた検査を実施する。
15回	総復習	グループで演習ができる

成績評価	検査測定演習における学生の評価は、以下の要素を総合的に判断します。 演習への積極的な参加度：質問や議論への貢献、主体的な行動測定技術の習得度：正確な測定、適切な機器操作、データ分析・考察力：データの解釈、妥当な結論の導出 レポート作成能力：論理的な構成、明確な記述、適切な表現 これらの要素を通じて、検査測定に関する知識・技能の習得度を評価します。
課題やレポートに関するフィードバック	課題提出後にフィードバック
使用教材 教科書	資料・これまでの教科書を利用
オフィスアワー	木下：0-kinoshita@nichireha.ac.jp

		理学療法学科 夜間部			
科目	検査測定法演習Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	畠山 敦	学 年		2年生	
資格	理学療法士・鍼師・灸師				

科目概要	本授業は2年生で学ぶ理学療法評価・検査法について、検査の目的や意義を理解し、適切に実践し臨床の場で活用できるように主にグループで再学習する授業である。 今まで学習した各検査法について、目的、方法、結果の解釈を確認しておくこと。 授業方法は、グループを主体とした「実技」「演習」を行う。 各検査において、測定練習を行い、次の授業でOSCE（objective structured clinical examination:客観的臨床能力試験）を実施し臨床能力を養う。				
学習の留意点	服装：上下ジャージ（短パン、Tシャツも可）、もしくは上下白衣でマスク着用、アクセサリ等貴金属を外す、髭は剃り、長い髪は束ねる スマートフォン：授業中は禁止（鞆に入れておく） 授業前準備：PC、プロジェクターにPC画面が映し出され、マイクはスピーカーから音が出る状態にしておく（授業前に内山にプリント等確認にくること） 授業に向かう姿勢：授業開始の号令から出席確認の間は私語厳禁（終礼時も同様）授業を妨げるような不真面目反抗的な態度は慎むこと				
到達目標	1．各検査法について目的・意義が説明できる。 2．各検査法について模擬患者を対象に実践できる。 3．各検査法の結果を解釈、統合できる。				
授業形態					
関連科目	検査測定Ⅲ	検査測定Ⅳ		運動学実習（動作分析）	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	疼痛、整形外科検査①	脊柱、下肢、上肢 測定練習
2回	腰痛の検査	検査から治療の流れを理解する
3回	疼痛、整形外科検査②	整形外科検査 OSCE
4回	疼痛、整形外科検査③	整形外科検査 OSCE
5回	感覚検査①	表在・深部感覚 測定練習
6回	感覚検査②	表在感覚検査 OSCE・ 深部感覚検査 OSCE
7回	反射検査①	深部腱反射、病的反射 測定練習
8回	反射検査②	深部腱反射、病的反射 OSCE
9回	中枢神経系検査①	片麻痺機能検査、筋トーマス検査、SIAS 測定練習
10回	中枢神経系検査②	片麻痺機能検査 OSCE
11回	中枢神経系検査③	脳神経系検査 測定練習
12回	中枢神経系検査④	脳神経系検査 測定練習
13回	中枢神経系検査⑤	協調性検査 OSCE
14回	中枢神経系検査⑥	バランス検査 測定練習
15回	中枢神経系検査⑦	バランス検査 OSCE

成績評価	レポート課題100％
課題やレポートに関するフィードバック	実技に関するフィードバックは実技練習中、練習の後、グループまたは全体に対して適宜実施する。
使用教材 教科書	
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	総合演習Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	黒木光／全教員	学 年		2年生	
資格	理学療法士、薬剤師				

科目概要	総合演習Ⅱは、患者モデル情報をもとに、2年次までに学習した臨床医学、理学療法評価を用いて、患者理解を深める授業になります。臨床現場での見学やモデル情報から、臨床実践のイメージを高め、理学療法アプローチの基礎を学びます。				
学習の留意点	この講義を最大限に活かすために、皆さんには、以下の点を意識し工夫していただきたいと思います。まず、講義へ積極的に参加することで、学びを深める第一歩を踏み出しましょう。質問や意見交換を通して理解を深めると共に、講義内容を自分の経験や周囲の事例と関連付け、症例情報とのつながりを見出すことで、より深い理解が得られます。講義内容をノートにまとめたり、参考文献を読んだりするなど、能動的な学習も心がけましょう。また、様々な病的な段階や個々の背景を持つ人々への理解を深め、多様性を尊重する視点を持つことも重要です。そして、わからないことはそのままにせず、積極的に質問し、疑問点を解消するように努めましょう。これらの点を意識することで、講義内容の理解が深まり、リハビリテーションの知識をより効果的に活用できるようになるでしょう。				
到達目標	①専門基礎の復習：基礎医学・臨床医学を使用して、課題の理解に努めるようにします ②評価方法：主要な理学療法評価を適切に選択できるようにします。 ③統合と解釈：対象者の情報を整理し、その意味を十分理解できるようにします。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	検査測定法Ⅰ～Ⅳ	臨床医学系科目		検査測定法演習Ⅰ・Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	患者情報の理解	患者情報の読み合わせ
2回	患者情報の理解	患者情報の調べ作業
3回	患者情報の理解	患者病態の理解のすり合わせ
4回	患者情報の理解	患者病態の理解のすり合わせ
5回	検査項目抽出	病態に合わせた検査の選択
6回	検査項目抽出	病態に合わせた検査の選択
7回	問題点抽出	検査情報から問題点を抽出できる
8回	問題点抽出	検査情報から問題点を抽出できる
9回	ゴール設定	患者が社会復帰するための目標を設定できる
10回	プログラム立案	目標に向かうためのアプローチ方法を設定できる
11回	発表準備	発表原稿の作成をする
12回	発表準備	発表原稿の作成をする
13回	発表	発表をおこなう。
14回	発表	発表をおこなう。
15回	振り返り	これまでの課題を通して学んだことを振り返る

成績評価	授業課題、発表の評価で、6割以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	授業時に復習機会を設けてフィードバックする
使用教材 教科書	配布資料あり
オフィスアワー	毎週月曜日17時～18時

		理学療法学科 夜間部			
科目	運動療法学Ⅱ	単位	6	コマ数	15
担当講師	内山 結城	学 年		2年生	
資格	内山：実務経験18年。IPNFA(国際PNF協会)認定セラピスト。 病院施設スポーツ整形クリニック等での経験後、現在はスポーツトレーナーとしても選手のケアや技術向上に携わっている。				

科目概要	運動療法は理学療法の主たる武器である。その武器を用いるためには解剖・生理・運動学などを統合し、リスク禁忌を学んでいく必要がある。実技を実際行うことで、相手に対する行動として、理学療法士のたしなみや配慮の必要性を学習する。この授業を通して患者に対してアプローチするための理学療法技術を身につける。 本授業は「講義」、「実技」、「グループ（ペア）ワーク」で構成される。				
学習の留意点	PTは自らの手の感覚をも用い武器である運動療法を使用し、、クライアントと対峙していきます。その武器の使用上の注意や、正しい使い方、武器の特性、禁忌などを知らないと適切に安全にその武器を使用することはできません。 この授業では上記の事項を講義で学びながら、その武器である運動療法の種類や方法を実技で学んでいきます。				
到達目標	各病態を理解し基本的な運動療法を学習する。 ①運動療法の意義・目的を説明できる。 ②必要に応じた運動療法を選択することができる ③各病態を理解し基本的な運動療法を実施することができる。=授業設計シート!D33				
授業形態	講義		対面		
関連科目	解剖学	生理学		運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	運動療法の総論	運動療法の種類と効果を説明できる
2回	コンディショニング講義	コンディショニングとデコンディショニングについて説明できる
3回	コンディショニング実技	呼吸誘導、ストレッチの種類を説明し、実施できる
4回	関節可動域訓練 講義	副運動と関節遊びおよび法則を説明できる
5回	関節可動域訓練 実技	副運動および関節遊びの促通を実施できる
6回	筋力増強・持久力訓練 講義	筋収縮の種類、1RM、10RM、運動強度の説明ができる好気呼吸、嫌気呼吸、AT、運動強度の説明ができる
7回	筋力増強訓練 実技	RMの測定、筋力増強と強化を実施できる
8回	感覚訓練 講義	感覚の区分と運動との関係について説明できる
9回	フループワーク	講義、実技の復習と補足
10回	グループワーク②	積極的なグループディスカッションを行える
11回	感覚訓練 実技	表在感覚と固有受容器の促通を実施できる
12回	協調性障害 講義	協調性障害疾患の代表例とその特徴を説明できる
13回	協調性障害 実技	協調性障害の特徴をふまえモビリティーとスタビリティーの促通が実施できる
14回	バランス 講義	随意運動と姿勢制御の関係性について説明ができる
15回	バランス 講義②	安定性限界の改善を実施できる

成績評価	筆記試験50％ 小テスト30％ グループ（ペア）ワーク10％ 欠席要件：学則および実技授業の規定に反しているものは党授業には参加できない 欠格要件：授業時間1/3以上の結石者には単位を与えない
課題やレポートに関するフィードバック	授業序盤あるいは終盤に小テストを行う。
使用教材教科書	担当教員が作成した配布プリントを使用、随時、評価記録用紙などを配布
オフィスアワー	基本火曜日15：30～17：00 ※木曜日以外のスケジュールが空いている時間は対応いたします

		理学療法学科 夜間部			
科目	物理療法学	単位	1	コマ数	8
担当講師	篠田良平	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	PT（Physical Therapist）の語源となった学問です。物理エネルギーを人体に作用させた生理的反応を治療に用います。代表的な治療として温熱、寒冷、電気、光線、牽引等があり、それぞれの属性により使い方が異なります。				
学習の留意点	物理療法の科目では、非常に多い種類の治療法を扱います。物理エネルギーの特性と仕組み、生理、治療法、使用法、禁忌の観点に沿って授業を進めて行きます。物理療法の一歩の効果は疼痛軽減です。徒手療法と違い、ルールさえ守れば初心者でも同一の効果を期待できます、臨床場面でも有効に活用して欲しいと思います。				
到達目標	①物理的エネルギーと人体に及ぼす効果を理解する。 ②各治療法の生理と仕組みと禁忌を理解し覚える。 ③各治療法を自分で体験する。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	生理学	自然科学物理		運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	物理療法概念と温熱の生理	物理療法の基本的概念と、温熱による人体の生理的变化について学ぶ。
2回	温熱療法による治療法	温熱療法の様々な治療法の仕組みと効果と禁忌について学ぶ。
3回	寒冷療法	寒冷療法の生理と仕組みと効果と禁忌について学ぶ。
4回	光線療法	光線療法の生理と仕組みと効果と禁忌について学ぶ。
5回	電気療法	電気療法の生理と仕組みについて学ぶ。
6回	電気療法	電気療法の効果と禁忌について学ぶ。
7回	バイオフィードバック・牽引・CPM	バイオフィードバック・牽引・CPMの生理と仕組みと効果と禁忌について学ぶ。
8回	物理療法機器体験演習	ホットバック、パラフィン、マイクロ、レーザー4，低周波、牽引の治療機器について被験者として体験する。
9回		
10回		
11回		
12回		
13回		
14回		
15回		

成績評価	授業中の行動と期末試験で成績をつけます。合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材教科書	物理療法学 吉田英樹 メジカルビュー
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	日常生活活動学Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	篠田良平	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	この授業では、日常生活動作（以下ADL）の知識と技術の基礎を学習します。この教科の基本概念となる生活の質について理解し、関連した知識を学び、寝返りや歩行・炊事や買い物のような日常生活を医療的視点から見つめ直します。日常生活を論理的・現実的に分類するために国際生活機能分類（ICF）を学びます。日常生活の変化を評価し理学療法に反映させるためのツールとしてパーセルインデックス（BI）・機能的自立度評価表（FIM）を学ぶ。見学実習や臨床実習で患者様と接する際の基本的技術として介護法を学びます。				
学習の留意点	この教科の基本概念となる生活の質から、寝返りや歩行・炊事や買い物のような日常生活につなげます。リハビリテーションの目標やGOALは日常生活に関連して設定されることが多くあります。実技面でも介助・介護法を学ぶため、リハビリテーションにおける基礎的な科目です。授業方法はプリント・パワーポイントを主とした講義形式で行います。車椅子駆動と杖歩行に関して患者様の状態を体験するための演習を行います。患者様と接する際の基本的技術として介護法を学習します。				
到達目標	①リハビリテーションにおけるADLの関わりを理解している。 ②ICF分類とBI・FIMの採点を行える。 ③車椅子駆動、杖歩行や介助に関して相手に説明しながら行える。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	理学療法概論	日常生活活動学Ⅱ		見学実習	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	ADLと概念	ADLの概念、範囲、分類を学ぶ。
2回	ADLと障がい	障がいの定義、ICIDHとICFの特徴と分類方法を学ぶ。
3回	ADL評価	ADLの評価法とその内容やルールについて学ぶ。
4回	FIMによるADL評価	FIMの評価法と基本ルールについて学ぶ。
5回	FIMによるADL評価	FIMの評価法と基本ルールについて学ぶ。
6回	FIMを用いたADL評価の演習	モデルケースを演じてもらいFIMによるADL評価を穴部。
7回	歩行補助具	杖の使い方と種類を学ぶ。
8回	杖歩行	杖の長さ合わせと杖を用いた歩行の方法を学ぶ。
9回	杖歩行演習	杖歩行の説明と介助を演習として行う。
10回	杖歩行演習	杖歩行の説明と介助を演習として行う。
11回	基本動作介助演習	全介助による基本動作の指導と介助を学ぶ。
12回	基本動作介助演習	全介助による基本動作の指導と介助を学ぶ。
13回	車椅子走行演習	様々な条件下での車椅子走行体験を行う。
14回	車椅子走行演習	様々な条件下での車椅子走行体験を行う。
15回	ADLⅠ総括とまとめ	授業内容の確認と復習。

成績評価	授業中の行動と期末試験で成績をつけます。合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材 教科書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 第6版 鶴見隆正、隆島研吾編集 医学書院
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅰ-A	単位	1	コマ数	15
担当講師	米村 豊	学 年		2年生	
資格	理学療法士、教職（社会）				

科目概要	整形外科疾患（とくに体幹や上肢）の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。 これまで学習してきた知識や技術をふり返りつつ、それらを線で繋げる科目といえる。 そのうえで、整形外科理学療法の臨床において、より実践的な知識や技術へとブラッシュアップさせる。	
学習の留意点	これまで学習してきたことを踏まえながら進めていくため、知識や技術をより盤石なものにできる。 そのためには、知識面では解剖学、運動学など基礎的な科目の復習や、疑問点を掘り下げて考える姿勢が重要となる。 また技術面では、理学療法評価における問題発見意識、積極的な行動により一人でも多くの身体に触れていく意識が求められる。	
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。	
授業形態	講義	対面
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅱ, 運動学Ⅰ・Ⅱ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	肩関節疾患	肩関節周囲炎、腱板断裂などの病態と障害像について理解する。 肩関節疾患の理学療法評価・治療法を理解し実践できる。
2回		
3回		
4回		
5回	肘・手関節疾患	肘・手関節疾患の病態と障害像および理学療法評価・治療法を理解し実践できる。
6回	頸部疾患	頚椎症、後縦靱帯骨化症などの病態と障害像について理解する。 頸部疾患の理学療法評価・治療法を理解し実践できる。
7回		
8回		
9回	胸部・胸郭疾患	胸椎側弯症、後弯症などの病態と障害像を理解する。 胸椎・胸郭疾患の理学療法評価・治療法を理解し実践できる。
10回		
11回	腰部疾患	腰椎椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症などの病態と障害像を理解する。 腰部疾患の理学療法評価・治療法を理解し実践できる。
12回		
13回		
14回		
15回	脊髄損傷	脊髄損傷の病態と障害像、および理学療法評価・治療法を理解する。

成績評価	定期試験6割以上で合格
課題やレポートに関するフィードバック	適宜
使用教材 教科書	・運動器の運動療法 小柳磨毅ほか 羊土社 ・各授業ごとにレジュメを配布
オフィスアワー	授業前後

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法ⅢB	単位	1	コマ数	15
担当講師	篠田良平	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	「難病」と呼ばれる神経・筋疾患の症例は、臨床の現場でも担当する機会が多くあります。原因は様々で、まだ解明されていない疾患も大変多く存在します。数ある神経・筋疾患の中でも、臨床の現場で比較的多く見られる疾患について、病態理解、リハビリテーション評価と治療プログラムについて検討します				
学習の留意点	突如身近に「死」が迫ったり、今後元の生活に戻れなかったり、対象となる方の精神的な落ち込みは想像を絶する場面が多くあります。骨折などのリハビリテーションとは違い、明るい未来が約束できない、思い描けない難病を患った方に対して、どのようなアプローチをしたら良いのか。、「疾患」への科学的な側面でのアプローチと、「人間」への精神心理的なアプローチ方法を学び、臨床の現場に役立てていけるような学習を目指してください。				
到達目標	①疾患の特徴と治療法や禁忌を理解出来る。 特性に合わせたプログラム立案が行える。 ②疾患の ③新たな疾患 に対して特性を考慮してプログラム立案が行える。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	神経内科学	病理学概論		疾患別理学療法ⅢA	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	多発性硬化症	疾患の特性・禁忌・治療法を学ぶ。
2回	多発性硬化症	リハビリテーションの方法を学ぶ。
3回	多発性硬化症	症例検討について学ぶ。
4回	ギランバレー症候群	疾患の特性・禁忌・治療法を学ぶ。
5回	ギランバレー症候群	リハビリテーションの方法を学ぶ。
6回	ギランバレー症候群	症例検討について学ぶ。
7回	重症筋無力症	疾患の特性・禁忌・治療法を学ぶ。
8回	重症筋無力症	リハビリテーションの方法を学ぶ。
9回	重症筋無力症	症例検討について学ぶ。
10回	多発性筋炎・皮膚炎	疾患の特性・禁忌・治療法を学ぶ。リハビリテーションを学ぶ。
11回	多発性筋炎・皮膚炎	グループワーク：症例検討
12回	多発性筋炎・皮膚炎	グループワーク：発表用資料作成
13回	多発性筋炎・皮膚炎	グループワーク：発表会
14回	筋ジストロフィー	疾患の特性・禁忌・治療法を学ぶ
15回	筋ジストロフィー	リハビリテーションの方法を学ぶ。

成績評価	授業中の行動と期末試験で成績をつけます。合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材教科書	神経障害理学療法学Ⅱ 神経筋障害 中山 恭秀・鈴木 俊明 編 メジカルビュー社
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法技術論Ⅲ	単位	1	コマ数	15
担当講師	畠山・村井・石垣＋TA	学 年		2年生	
資格	畠山：理学療法士、鍼師・灸師 村井：理学療法士、鍼師・灸師・按摩マッサージ師				

科目概要	痛みのコントロールを通じて軟部組織系の浮腫、緊張の制御を行う。 姿勢分析、運動分析を含めた動作分析の中で、仮説立証作業の一環として軟部組織への治療手技を学ぶ。 分節間の立ち直り反応を含めた張力としての筋緊張及び筋膜の関係を考察する。				
学習の留意点	①他者に対する礼儀と配慮、特に副交感神経優位が治療に使用することから、騒がしいことや雑に扱うなどふざけた態度は厳禁とする。 ②実技中心の為、現症の変化に注目、具体的変化を可動域や疼痛整形疾患のテストなどで把握する。 ③必要であれば補講又は実技練習を設ける。				
到達目標	①原因筋（トリガーポイント）の理解と探索 ②抑制筋のの探索 ③的刺激の強さ、方向、深さの探索と抑制される組織の触察 ④評価との関連性				
授業形態	対面と実技				
関連科目					

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	MTAの理論	MTA総論・コースオリエンテーション
2回	MTAの基本手技	実技
3回	運動時収縮時痛のMTA	実技
4回	運動時伸張痛のMTA	実技
5回	安静時痛のMTA	実技
6回	無症状のMTA	実技
7回	MTAの応用とまとめ	実技
8回	触圧覚刺激法総論 上肢	自律神経系の反応と表在感覚入力を理解する
9回	触圧覚刺激法 下肢法と体幹	実技 動的2点識別と刺激入力を理解し確認する
10回	筋膜リリース 総論	運動感覚の入力と全身のネットワークを理解する
11回	クロスハンドテクニック	リンパドレナージ 琳派のネットワークの理解と表在と深部を併用することができる。
12回	筋膜リリース 四肢から体幹	脊柱に対するプルテクニックにより、整形外科テストの理解とSCCばモバイルポイントを理解する。
13回	横断面リリース 刺激の加・減	腰仙減圧Ⅰ・Ⅱ 骨盤の安定(Force&Form Closure)を構成するForce、Form Closureを理解する。
14回	横断面リリース	分節間の立ち直り反応と重心の関係を理解し運用する。
15回	横断面リリース	後頭課リリース、頸部の牽引 頸部の受動性と末梢への影響を確認できる。

成績評価	課題レポート
課題やレポートに関するフィードバック	メールでの添付にて提出、添削によるフィードバック
使用教材 教科書	マイオチューニングアプローチ入門 高田治実著
オフィスアワー	担当授業の前後

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法技術論Ⅳ	単位	1	コマ数	15
担当講師	水口 健一	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	理学療法における手技の一つである、PNF（固有受容性神経筋促通）を実技を中心に進めていきます。	
学習の留意点	患者、セラピストのポジショニング、口頭指示、接触、適度抵抗を演習し、寝返りから立ち上がりといった基本動作入、バランスの安定、歩行練習への基本的な介入が学習できるとよいです。	
到達目標	PNFの基本的な手技と基本動作訓練、歩行訓練での運動療法を理解する	
授業形態	講義および実技	対面
関連科目	内科老年学Ⅰ・Ⅱ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 神経内科学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	総論 PNFについて	PNFの哲学 概念 基本原理が説明できる
2回	肩甲骨の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
3回	骨盤の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
4回	上肢の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
5回	上肢の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
6回	下肢の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
7回	下肢の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
8回	頸部体幹の基本パターン	用手接種 運動誘導 抵抗の実施ができる
9回	特殊テクニック	動筋、拮抗筋、リラクゼーションテクニックの説明と実施ができる
10回	特殊テクニック	動筋、拮抗筋、リラクゼーションテクニックの説明と実施ができる
11回	基本動作訓練 マット動作	基本動作への誘導が実施できる
12回	基本動作訓練 マット動作	基本動作への誘導が実施できる
13回	歩行練習でのガイド	歩行練習への誘導が実施できる
14回	歩行練習でのガイド	歩行練習への誘導が実施できる
15回	呼吸訓練	呼吸介助と訓練の実勢ができる

成績評価	筆記試験または筆記と実技試験
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	作成した配布プリントを使用。 参考書：PNFハンドブック 柳澤件 他訳 丸善出版 PNFコンセプト 監訳 市川繁之 ガイヤブックス
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	臨床見学実習Ⅱ	単位	1	時間数	45
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床見学実習Ⅱでは、1年次・前期科目で学習したリハビリテーションの役割、理学療法士の仕事内容、について実際に理学療法士の下で考え方や治療法などを実習する。 基礎医学・検査法を学んで理学療法士の施設での役割や仕事内容を見学することにより、自身の将来像を思い描き、どのような理学療法士を目指すのか目標を立てる3年次につなげる。 臨床見学実習Ⅱでは主に医療機関、介護福祉施設や通所介護・訪問リハなどの見学実習となる。				
学習の留意点	医療人としてふさわしい態度がとれているかどうかを最重要としてご指導ください。その上で、1年次から2年次の学びを踏まえて、より知識・技術が定着するようご指導ください。 現場の状況や学生の学びに資すると考えられる状況であれば、一部検査測定等の理学療法評価も実施機会が得られるようご配慮下さい。 3年次から長期の実習になり、各種理学療法評価・理学療法治療学、臨床医学等の知識・技術を総合的に学び、主体的に学ぶ姿勢等も問われてきます。事後の学内発表等で、より理解が深まるよう、臨床推論等も学生の能力に合わせ、ご指導下さい。				
到達目標	臨床現場では、実習生であっても礼節や態度、挨拶や身だしなみ等に気を付け、社会人として常識のある行動・態度で臨むことが求められる。そのため、普段から医療人として相応しい接遇・態度・行動に気を付け普段の生活から実践することが求められる。前期の授業から臨床見学実習に出るための学習を行い、理学療法士の業務内容、医療者としての考え方などを復習したうえで実習に臨むこと。 1．臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 2．病院・介護・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し、説明できる。 3．この見学から何を不得、今後何に取り組むべきかを明確にし、説明できる。 4．患者・利用者とのコミュニケーションを通じて、理学療法士に求められるものを学ぶ。				
授業形態	実習		対面		
関連科目	解剖学・生理学・運動学	検査測定法 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		臨床医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	1）病院・施設の理学療法士から、各施設での理学療法士の役割を学ぶ。 2）医療者として理学療法士の持つ責任と心構えについて学ぶ。 3）理学療法士が患者・利用者に対し、どのような接し方をしているか学ぶ。 4）患者・利用者とのコミュニケーションを通して、理学療法士に求められるものを学ぶ。 5）多職種との連携について学ぶ。 6）医療における礼節・態度・接遇について学ぶ。	
2回		
3回		
4回		
5回		
6回		
7回		
8回		
9回		
10回		
11回		
12回		
13回		
14回		
15回		

成績評価	臨床実習指導者の評価および担当教員の評価、提出物、学内発表の内容を踏まえて総合的に判断する。
課題やレポートに関するフィードバック	実習後、学内にて発表・課題提出を行い、事後にフィードバックする。
使用教材 教科書	学校指定ケーシー、白靴、実習にふさわしい身だしなみが必要。施設によるが、通院時はスーツ着用。学生評価表やデイリーノート、出欠表など実習書類を持参する。
オフィスアワー	担任や理学療法学科教員

		理学療法学科 夜間部			
科目	臨床見学実習Ⅱ	単位	1	時間数	45
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		2年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床見学実習Ⅱでは、1年次・前期科目で学習したリハビリテーションの役割、理学療法士の仕事内容、について実際に理学療法士の下で考え方や治療法などを実習する。 基礎医学・検査法を学んで理学療法士の施設での役割や仕事内容を見学することにより、自身の将来像を思い描き、どのような理学療法士を目指すのか目標を立てる3年次につなげる。 臨床見学実習Ⅱでは主に医療機関、介護福祉施設や通所介護・訪問リハなどの見学実習となる。				
学習の留意点	医療人としてふさわしい態度がとれているかどうかを最重要としてご指導ください。その上で、1年次から2年次の学びを踏まえて、より知識・技術が定着するようご指導ください。 現場の状況や学生の学びに資すると考えられる状況であれば、リスク管理の上で検査測定等の理学療法評価も実施機会が得られるようご配慮下さい。 3年次から長期の実習になり、各種理学療法評価・理学療法治療学、臨床医学等の知識・技術を総合的に学び、主体的に学ぶ姿勢等も問われてきます。事後の学内発表等で、より理解が深まるよう、臨床推論等も学生の能力に合わせ、ご指導下さい。				
到達目標	臨床現場では、実習生であっても礼節や態度、挨拶や身だしなみ等に気を付け、社会人として常識のある行動・態度で臨むことが求められる。そのため、普段から医療人として相応しい接遇・態度・行動に気を付け普段の生活から実践することが求められる。前期の授業から臨床見学実習に出るための学習を行い、理学療法士の業務内容、医療者としての考え方などを復習したうえで実習に臨むこと。 1．臨床現場の理学療法士の役割、具体的な仕事内容を説明できる。 2．病院・介護・福祉現場で働く専門職としての心構えを理解し、説明できる。 3．この見学から何を不得、今後何に取り組むべきかを明確にし、説明できる。 4．患者・利用者とのコミュニケーションを通じて、理学療法士に求められるものを学ぶ。				
授業形態	実習		対面		
関連科目	解剖学・生理学・運動学	検査測定法 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		臨床医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	①実習では、患者や利用者を尊重しコミュニケーションと共感的態度をもって関係性を構築する。 ②理学療法士の役割と責任について理解し、医療チームの一員として自覚のある言動をとる。 ③情報収集（診療記録、画像所見、部門内・外情報を含む）を実施する。 ④臨床実習指導者の監督・指導の下で基本的な検査・測定項目の実施後に問題点を抽出し、国際生活機能分類（ICF：International Classification of Functioning, Disability and Health）の概念図の作成を通して、障害を持つ人の障害像（障害構造）を明らかにする。 1, 指導者の下で、対象者に説明を行い、検査・測定時に同意を得ることができる。 2, 利用者に無理のない姿勢や一定の時間内に検査・測定を実施できる。 3, 検査測定の目的を理解して、実施した検査・測定内容から問題点を抽出できる。 4, 機器の管理と検査時の安全・リスクに配慮できる。 5, 施設の規則や指導者からの指示を遵守することができる。 6, 感染対策の概念を持ち、責任ある行動がとれる。 7, 医療人として対象者に触れる時は十分に配慮することができる。 8, 多職種との人間関係を良好に保つことができる。 9, 自ら使用機器・備品、その他の書類等の整理整頓ができる。 10, 積極的に指導者や他のスタッフに向上心と探求心を持って行動することができる。 12, 指導者とコミュニケーションを取って積極的に行動する。	
2回		
3回		
4回		
5回		
6回		
7回		
8回		
9回		
10回		
11回		
12回		
13回		
14回		
15回		

成績評価	臨床実習指導者の評価および担当教員の評価、提出物、学内発表の内容を踏まえて総合的に判断する。
課題やレポートに関するフィードバック	実習後、学内にて発表・課題提出を行い、事後にフィードバックする。
使用教材教科書	学校指定ケーシー、白靴、実習にふさわしい身だしなみが必要。施設によるが、通院時はスーツ着用。学生評価表やデイリーノート、出欠表など実習書類を持参する。
オフィスアワー	担任や理学療法学科教員

		理学療法学科 夜間部			
科目	医学倫理	単位	1	コマ数	8
担当講師	千田 佳遠里	学 年		3年生	
資格	高等学校教員社会一種免許				

科目概要	医療従事者に求められる社会性、倫理観、行動規範について考察する。 そのために、様々な経験、他者との関係を通して社会性を身につけ人間が社会的存在となる過程とその重要性について学習する。社会事象を正確に捉え、自分と社会の関係をも把握していく。さらに、人種、性、障害のあるなし等違いをもった多様な人間どうしが共生できる社会について学びを深めていく。また、リハビリテーションにおける社会学の必要性も把握する。	
学習の留意点	社会や人間に関心を持ち、日常の出来事や医療に関わるニュース等にも耳を傾ける姿勢をもつこと。また、授業においても円滑なコミュニケーションがとれるように心がける。 予習として、指示された資料等は一読しておくこと。授業時間の3分の1以上欠席した者には単位を与えない。	
到達目標	人間は社会の中でしか生きていくことができない。社会的人間となる意義を理解する。そして、他者と上手に関係できる能力やコミュニケーション力を培う。共生社会の重要性を知り、人間の尊厳について感性でも捉えられるようにする。	
授業形態	講義	対面
関連科目	人間関係学, 臨床実習Ⅰ・Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	リハビリテーションは人間の尊厳と社会性を取り戻す働きかけ	社会学を学び人間を知り、社会を知る。リハビリテーションに社会的視点をもてるようにする
2回	関係の科学社会学とは	社会の概念、集団の概念・類型、社会学の対象領域、医療における人間関係を把握する
3回	コミュニケーション論1 コミュニケーションの取り方	自己と出会い自己を表現できるか、他者と出会い、話を傾聴し他者を受容できるか、グループワークで意見交換し確認する
4回	コミュニケーション論2 効果的コミュニケーションとは	感情の取り扱い・意識化、明確な表現、自己開示、相互理解ができるか、グループワークで意見交換し確認する
5回	社会的人間の形成1	社会化の概念、文化の概念、言語的社会化を理解する
6回	社会的人間の形成2	文化の構造・機能、パーソナリティーの形成、社会化のメカニズムを理解する
7回	人権とは何か、概念の共有	感性で捉える人権、心のバリアフリーを育む 人権の三本柱 普遍性・不可侵性・永久性を理解する
8回	人権意識・人勸感覚、人間の尊厳について	差別の本質・構造、差別行為を知り、多様性・異質性を受け入れる 共生社会の意識を身につける。（グループワークで意見交換）

成績評価	レポートで評価、原則として60点以上で合格とする
課題やレポートに関するフィードバック	必要に応じて対応する
使用教材 教科書	パワーポイント資料、概要を冊子にしたもの（担当千田作成）を配布使用 その他参考資料として、新聞記事、統計・調査資料等を配布 【参考文献】 放送大学-社会学入門 森岡清志編、他（NHK出版） 人権読本-じんけんの詩- 今野俊彦編著（明石書店） よくわかる社会学 宇都宮京子編（ミネルヴァ書房）
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	解剖学Ⅳ	単位	1	コマ数	45
担当講師	外部講師／PT教員	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	本授業は大学医学部、歯学部のご協力のもと、「骨格系・筋肉系・神経系」を中心とした人体の基本構造を学び、三次元的に理解し、医の倫理、生命の尊厳を自ら学びとることを目標としている。 今まで学習した解剖学、生理学について、復習しておくこと。大学施設にて「講義」「実習」を行う。				
学習の留意点	実習に臨むにあたり、礼節を保ち、医療従事者を目指す者として態度に十分気をつけること。				
到達目標	1．人体の構造と機能について、基本構造を説明することができる。 2．医療従事者を目指す者として、医の倫理を理解し、生命を尊厳を尊厳することができる。				
授業形態	講義・演習・実習			対面授業	
関連科目					

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	解剖見学実習①	「骨格系・筋肉系」の構造について
2回	解剖見学実習②	「神経系」の構造について
3回	事前学習	骨格、関節と靱帯
4回	事前学習	骨格、関節と靱帯
5回	事前学習	筋系
6回	事前学習	筋系
7回	事前学習	神経系
8回	事前学習	神経系
9回	事前学習	内臓系
10回	医の倫理①	医の倫理について
11回	医の倫理②	生命の尊厳について
12回	解剖見学実習③	骨格、関節と靱帯
13回	解剖見学実習④	筋系
14回	解剖見学実習⑤	神経系
15回	解剖見学実習⑥	内臓系

成績評価	レポート課題100%
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材 教科書	授業で使用した解剖学、生理学等の教科書
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	専門基礎医学演習Ⅰ	単位	2	コマ数	15
担当講師	黒木	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	解剖学・運動学・生理学は理学療法の勉強の最も基礎となる科目の一つである。国家試験に対応できるレベルまで深く細かい理解を進めるための科目となる。				
学習の留意点	今までに学んだ解剖学・運動学・生理学の復習を通して理解を深めてその後の検査測定等でどのようにその知識を活かすのか自身でイメージする。事前学習として教科書を用いて詳細を調べてその概要を他者に説明できるように準備する。他者に説明できないものは十分理解できていないものと同意なため、理解を深めることを徹底期に意識してください。 また、自身の努力が他者のために直結することを意識して自身のため、そして他者のために努力を惜しまないようにしてください。				
到達目標	1. 歩行周期や関節運動、ベクトル等を説明できる。 2. 骨や筋の構造・各臓器について説明できる 3. 各臓器の機能と仕組みについて説明できる				
授業形態	講義			対面	
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ	解剖学Ⅰ～Ⅲ		生理学Ⅰ・Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	中枢神経について①	脳について説明できる
2回	中枢神経について②	脊髄について説明できる
3回	末梢神経について①	自律神経を理解できる
4回	身体とてこ・モーメント・筋力と重力	関節における1～3のてこ、ベクトル・筋力等を説明できる
5回	関節の形状	各形状を区別して説明できる
6回	四肢と体幹の運動	肩甲帯、肩関節、肘・手関節について説明できる
7回	四肢と体幹の運動	股関節・膝関節・足関節について説明できる
8回	循環器について①	循環器の構造を言える
9回	循環器について②	循環器の機能を言える
10回	呼吸器について①	呼吸器の構造を言える
11回	呼吸器について②	呼吸器の機能を言える
12回	泌尿器について①	泌尿器の構造を言える
13回	泌尿器について②	泌尿器の機能を言える
14回	内分泌系について①	内分泌系の構造が言える
15回	内分泌系について②	内分泌系の機能が言える

成績評価	提出物を中心に総合点で6割以上のものを合格とする
課題やレポートに関するフィードバック	FBは全体に実施する
使用教材 教科書	プリントにて資料配布
オフィスアワー	毎週月曜日17時～18時

		理学療法学科 昼間部			
科目	理学療法管理学	単位	1	コマ数	15
担当講師	臼杵・下村	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	理学療法管理学では、医療におけるリスクマネジメントや組織・経営マネジメントなどの基礎知識を学びます。さらに、チーム医療、医療安全、医療倫理、地域リハビリテーション、介護保険、福祉制度などについて理解を深め、幅広い視点から理学療法を実践できる能力を養うことを目的としています。				
学習の留意点	授業で学ぶ内容は、将来理学療法士として働く上で土台となる重要な知識です。単に暗記するのではなく、なぜその知識が必要なのか、実際の現場でどのように活用できるのかを考えながら学ぶことが大切です。グループワークでは、自分の意見を積極的に発言し、他の学生の意見にも耳を傾け、多角的な視点を養いましょう。授業で疑問に思ったことは、積極的に質問したり、自分で調べたりして、理解を深めるよう努めます。				
到達目標	1. 医療安全やリスクマネジメントの基本を説明できる。 2. チーム医療における理学療法士の役割を説明できる。 3. 医療倫理に基づいた行動指針を具体的に述べるができる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	地域理学療法				

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	地域理学療法とは	地域理学療法の概説
2回	地域理学療法と関連する制度の変遷	関連する制度変遷の理解
3回	地域包括ケアについて	地域包括ケアの理解
4回	障害者総合支援法	障害者総合支援法の理解
5回	介護保険制度①仕組み	介護保険制度①仕組み理解
6回	介護保険制度②給付	介護保険制度②給付理解
7回	通所リハの機能と理学療法士の役割	通所リハの機能と役割理解
8回	通所介護、短期入所等	通所介護、短期入所等理解
9回	訪問リハの機能と理学療法士の役割	訪問リハの機能と役割理解
10回	訪問、介護予防事業、総合事業	訪問、介護予防事業の理解
11回	介護老人保健施設、介護老人福祉施設の機能と理学療法士の役割	介護老人保健, 福祉施設理解
12回	疾患別にみる地域理学療法の特徴	疾患別にみる地域理学療法
13回	災害支援における理学療法士の関わり	災害支援の理学療法士理解
14回	多職種連携・対人支援技術	多職種連携・対人支援技術
15回	終末期の関わり方	終末期への関わり方の理解

成績評価	レポート１００％
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材 教科書	配布資料
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	義肢装具学	単位	1	コマ数	15
担当講師	木下修石垣栄司	学 年		3年生	
資格					

科目概要	切断・義肢は、脳卒中や骨折、呼吸循環疾患などと比べ学生時。また臨床場面でも遭遇する機会が少ない疾患であるが、国家試験では毎年3問以上出題されている。講義では、実際の義肢や動画を見ながら学習しイメージしやすいように説明する。				
学習の留意点	アライメント、膝継ぎ手などのイメージが難しいとのことですので、可能な限り実物を動かして見せ、手に取って実際に触れていただきます。また、動画が多数収録されている教科書ですので、動画を多用しイメージしやすいように努めます。 授業ではテーマごとに小テストを実施し復讐していただく事で知識の定着を図ります。				
到達目標	切断の原因とその治療について説明できるようになる。 義足の種類・適合・アライメントについて理解する。 切断の評価を理解し、臨床場面で行えるようになる。 切断の理学療法を理解する。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	整形外科学Ⅰ・Ⅱ	解剖学Ⅰ		日常生活活動学Ⅰ・Ⅱ	

授業計画		
回数	授業内容	行動目標
1回	装具学総論；概念・歴史	疾患と装具の歴史について学習をする
2回	股装具・長下肢装具	急性期治療における長下肢装具の役割
3回	短下肢装具	最も多く処方される短下肢装具について学習をする
4回	プラスチック装具	在宅復帰や社会復帰を目指す患者にとって最も多く使用する装具
5回	体幹装具	姿勢を安定させ、体幹を支え、活動的な生活を送る。
6回	側弯装具	側弯の進行を抑制し、バランスの取れた姿勢を維持する。
7回	靴型装具	足部の機能を補正し、歩行時の安定性と快適性を高める。
8回	上肢装具	上肢の機能をサポートし、日常生活動作の自立を促す。
9回	義肢学総論(義手・義足)	我が国における切断の疫学・原因を理解する。 切断の部位と手技を理解する。
10回	切断の評価	下肢切断における理学療法評価の目的・方法を理解する。
11回	義足継手の種類	各継手の分類と構造、機能特徴について理解する。
12回	大腿義足ソケット	大腿切断の特徴、ソケットの種類と特徴、懸垂方法と評価について理解する。
13回	大腿義足アライメント	大腿義足アライメントの設定と異常歩行について理解する。
14回	下腿義足ソケット	下腿切断の特徴、ソケットの種類と特徴、評価について理解する。
15回	下腿義足アライメント	下腿義足アライメントの設定と異常歩行について理解する。
16回	その他の義足および理学療法	股義足・膝義足・サイム義足・足部義足・切断の理学療法について理解する。

成績評価	義肢分野：筆記試験80％、小テスト提出状況20％、授業数の2/3以上出席していない者には試験を受験させず単位を与えない。 装具分野：筆記試験、授業数の2/3以上出席していない者には試験を受験させず
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材教科書	PT・OTビジュアルテキスト 義肢・装具学 第2版/監修:高田治実/編集:豊田輝, 石垣栄司/羊土社
オフィスアワー	石垣：e-ishigaki@nichireha.ac.jp 木下：o-kinoshita@nichireha.ac.jp

		理学療法学科 夜間部			
科目	日常生活活動学Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	篠田良平	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	人と向かい合うことを基本としている理学療法において、日常生活活動（ADL）は、運動療法とともに大きな領域を占めている。理学療法士にはクライアントの障害とADLとの関連を正しくとらえ、1人1人の生活スタイルにマッチした具体的なADLの指導の実施とQOLを高める視点が求めている。 本授業では日常生活活動学Ⅰを土台とし、疾患毎の病態を確認した上で、疾患毎のADLの実践方法を解説する。基本動作とそれに関連する評価の関係性を理解する。				
学習の留意点	日常生活活動学Ⅰで学んだ基礎的な概念や評価方法をベースにして臨床的なADLを意識してください。疾患ごとの特徴を捉え、それが日常生活活動に及ぼす影響と対策を考えてください。基本動作の評価と各検査法のつながりや影響を明確にして臨床的な評価や動作分析につなげて行きましょう。				
到達目標	①各評価を実施出来て、観察した基本動作につなげられる。 ②各疾患の特徴を捉えてADLにおける対応を検討できる。 ③白杖歩行の誘導介助を相手に説明しながら行える。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	理学療法概論	日常生活活動学Ⅰ		運動学実習	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	ADLと評価法（MMT）	基本動作とMMTの検査結果の影響について学ぶ。
2回	ADLと評価法（ROM-T）	基本動作とROM-Tの検査結果の影響について学ぶ。
3回	ADLと評価法（バランステスト）	基本動作とバランステストの検査結果の影響について学ぶ。
4回	中枢性疾患のADL	中枢性疾患断の注意点・指導を学ぶ。
5回	中枢性疾患のADL演習	中枢性疾患の起居動作指導を学ぶ。
6回	整形外科疾患のADL	人工股関節全置換術後、下肢切断の注意点・指導を学ぶ。
7回	整形外科疾患のADL演習	人工股関節全置換術後の起居動作指導を学ぶ。
8回	慢性関節リウマチのADL	ADL注意点・指導やリウマチ体操を学ぶ。
9回	脊髄損傷のADL	起居動作の介助と指導を学ぶ。
10回	脊髄損傷のADL	セルフケアの指導を学ぶ。
11回	脳性麻痺のADL	起居動作、生活動作の注意点を学ぶ。
12回	視覚障害のADL	歩行指導 疾患と介助の基本ルールを学ぶ。
13回	白杖体験演習	様々な条件下での白杖歩行と歩行介助を行う。
14回	白杖体験演習	様々な条件下での白杖歩行と歩行介助を行う。
15回	ADLⅡ総括とまとめ	授業内容の確認と復習。

成績評価	課題レポートの内容で成績をつけます。合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材 教科書	標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学 第6版 鶴見隆正、隆島研吾編集 医学書院
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅰ-B	単位	1	コマ数	15
担当講師	米村 豊	学 年		3年生	
資格	理学療法士、教職（社会）				

科目概要	整形外科疾患（とくに下肢）の理学療法評価・運動療法の知識・技術の習得。 これまで学習してきた知識や技術をふり返りつつ、それらを線で繋げる科目といえる。 そのうえで、整形外科理学療法の臨床において、より実践的な知識や技術へとブラッシュアップさせる。	
学習の留意点	これまで学習してきたことを踏まえながら進めていくため、知識や技術をより盤石なものにできる。 そのためには、知識面では解剖学、運動学など基礎的な科目の復習や、疑問点を掘り下げて考える姿勢が重要となる。 また技術面では、理学療法評価における問題発見意識、積極的な行動により一人でも多くの身体に触れていく意識が求められる。	
到達目標	整形外科疾患における理学療法評価・運動療法を考察、説明、実践できる。	
授業形態	講義	対面
関連科目	解剖学Ⅰ・Ⅱ, 運動学Ⅰ・Ⅱ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	上肢骨折	上肢骨折の病態と障害像を理解する。骨折に対する理学療法評価・治療法を理解する。
2回	下肢・脊椎骨折	下肢骨折の病態と障害像を理解する。骨折に対する理学療法評価・治療法を理解する。
3回	股関節疾患	変形性股関節症など股関節疾患の病態と障害像、外科的治療の種類や方法についてを理解する。 股関節疾患および術前・術後の理学療法評価・治療法を実践できる。
4回		
5回		
6回		
7回	膝関節疾患	変形性膝関節症など膝関節疾患の病態と障害像、外科的治療の種類や方法についてを理解する。 膝関節疾患および術前・術後の理学療法評価・治療法を実践できる。
8回		
9回		
10回		
11回	足関節疾患	足関節捻挫など足関節疾患の病態と障害像を理解する。 足関節疾患の理学療法評価・治療法を実践できる。
12回		
13回		
14回	関節リウマチ	関節リウマチの病態、時期に応じた理学療法評価・治療法を理解する。
15回	運動連鎖	運動連鎖の基本を理解し、動作分析や治療へと応用できる。

成績評価	定期試験6割以上で合格
課題やレポートに関するフィードバック	適宜
使用教材 教科書	- 運動器の運動療法 小柳磨毅ほか 羊土社 - 各授業ごとにレジュメを配布
オフィスアワー	授業前後

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅱ-A	単位	1	コマ数	15
担当講師	廣瀬幸子	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	中枢神経疾患における脳卒中片麻痺患者への基本的な理学療法アプローチ方法について演習を交えながら講義を行い、全体像を捉えることを目的とする。 以下の内容を理解する。 1. 脳卒中片麻痺患者の基本的な障害像 2. 急性期、回復期、維持期の理学療法 3. 脳卒中片麻痺患者に対するリスクマネージメント		
学習の留意点	脳卒中片麻痺患者の病態を把握し、評価を基に適切な介入方法を立案・実施できるようにすることが重要です。また、基本的な理学療法技術を実技を通じて学び、患者に適応できるよう努めます。さらに、脳卒中ガイドラインに基づいたリスク管理を行い安全かつ効果的な理学療法を実施することが求められます。最新の研究結果や臨床データに基づいた治療方法の選択の重要性を認識することも必要です。脳卒中片麻痺患者へのリハビリテーションアプローチは、病期に応じた多職種連携がとて重要となります。チームの一員として患者支援に貢献できるよう意識することも必要です。講義と実技の双方を通じて、臨床で応用できる知識と技術を習得し、適切な理学療法を実践できるよう努めてください。		
到達目標	1. 脳卒中片麻痺患者の病態を説明できる 2. 麻痺の回復と神経系・脳の可塑性について説明できる 3. 急性期、回復期、維持期の各期の理学療法の目的と方法について説明できる 4. リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドラインに基づきリスク管理ができる 5. 瘻性に対する理学療法を説明できる 6. 脳卒中片麻痺患者の合併症について説明できる 7. 脳卒中中のCT, MRI画像を判読できる		
授業形態	講義	実技	
関連科目	解剖学Ⅲ, 生理学Ⅰ・Ⅱ・実習, 検査測定法Ⅲ, 神経内科学, 病理学概論		

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	脳卒中片麻痺患者の病態	中枢神経疾患の病態、運動麻痺と伝導路、神経系の回復過程などにて学ぶ
2回	チームアプローチ、片麻痺体験、ポジショニング等	講義、演習を通してチームアプローチ、片麻痺体験、理学療法評価、ポジショニング等を学ぶ
3回	理学療法の目的、リスク管理、ガイドライン	病期に応じた理学療法の目的とリスク管理を学ぶ、ガイドラインで推奨される理学療法を学ぶ
4回	体幹、姿勢コントロール	講義、演習を通して体幹と四肢の関係、促通技術等を学ぶ
5回	急性期の理学療法介入、関節可動域練習など	高度急性期、急性期の理学療法評価・介入を学ぶ 演習を通して関節可動域練習等を学ぶ
6回	立位、バランス	演習を通して立位の特徴、姿勢評価、理学療法介入を学ぶ
7回	座位	演習を通して座位の特徴、姿勢評価、理学療法介入を学ぶ
8回	背臥位、寝返り、起き上がり	演習を通して背臥位の特徴、姿勢評価、寝返り・起き上がり等の理学療法介入を学ぶ
9回	歩行	演習を通して歩行の特徴・評価・理学療法介入を学ぶ
10回	歩行（装具療法）	講義、演習を通して歩行の理学療法介入（装具療法）を学ぶ
11回	ADL、応用動作	演習を通して車椅子駆動、トイレ動作、床からの立ち上がりなどの特徴・評価・理学療法介入を学ぶ
12回	上肢・手	肩関節亜脱臼、CCRPSを理解し、演習を通して、上肢・手の評価・理学療法介入を学ぶ
13回	自主トレーニング、合併症 1	自主トレーニング指導や合併症（廃用、拘縮、Pusherなど）につて学ぶ
14回	合併症 2、その他	合併症（高次脳機能障害、認知症、言語障害、嚥下障害など）について学ぶ、ロボット・電気治療などの紹介
15回	画像判読、発症部位別の症状	CT、MRIの判読、発症部位別の症状を学ぶ

成績評価	筆記試験と演習も含め総合的に判断する
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	担当教員が作成した配布プリントを使用 すでに購入している、解剖学、生理学、神経内科学、理学療法評価学等の書籍
オフィスアワー	担当授業開始前およびメールで対応いたします

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅱ-B（高齢者理学療法）	単位	1	コマ数	8
担当講師	木下 修	学 年		3年生	
資格					

科目概要	本講義では、高齢化者社会に向けて理学療法の役割を理解として、加齢に伴う心身機能の変化（生理的・病的変化）や、高齢者に特有な疾患（脳血管障害、骨折、廃用症候群、認知症、心疾患等）について理解を深めます。				
学習の留意点	高齢者の問題を家族や自分事として捉え、多角的な視点を養うためには、座学に加えて実践的な学びが不可欠です。 多様な背景を持つ高齢者のケースを用い、当事者や家族の視点を疑似体験させます。また地域の高齢者と直接交流する機会を提供し、リアルな声や生活実態に触れさせます。身近な高齢者に話を聞く等、自分との繋がりの中で考える課題を設定します。個別性と社会背景を踏まえた深い理解と共感を促します				
到達目標	高齢者にかかわる身体的・精神的局在を説明する。また、その原因を分析し治療に結び付けることができる。高齢者の病態の評価概要を理解し必要となる評価を選定、実施ができる。生活上で及ぼす影響、問題を理解し、介入方法を説明できる。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	機能解剖学	ADL学		検査測定学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	高齢化社会と理学療法	世界と日本における高齢化社会の特徴の現状・特徴的な問題点を理解する
2回	高齢者の身体的特性	高齢化社会の進展の中での医療的ニーズ・老化現象が身体的・精神的に何が起きるか理解
3回	高齢者の心理特性	若い治療者が、どのようにして高齢者の心理を理解するか
4回	高齢者の精神特性	高齢者が抱える若いときとの身体的ギャップと記憶力の低下を理解
5回	高齢者の骨関節	加齢に伴う機能低下と姿勢運動機能の低下と疾病・障がいの理解
6回	高齢者の呼吸循環・内部障害	呼吸循環の特徴を理解し日常生活を送っている中での理学療法を考察する
7回	高齢者の施設内理学療法	入院から退院までの理学療法と在宅支援体制を理解する
8回	高齢者にかかわる医療介護制度	高齢者にかかわる医療制度と今後の将来展望を理解する

成績評価	レポート・定期試験で評価します。
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材 教科書	授業計画資料を授業ごとに配布
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅲ-A	単位	1	コマ数	15
担当講師	齋藤 弘	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	この授業では、神経筋疾患の特徴について学び、各疾患の病態を理解したうえで、必要な評価項目の選択や運動プログラムの立案を学習する。 学習する疾患は以下の通りである。 1. パーキンソン病 2. 脊髄疾患 3. 小脳疾患 4. 筋萎縮性側索硬化症 5. 末梢神経疾患 6. 脱髄疾患	
学習の留意点	・動画を活用して、臨床所見が理解しやすいような資料提供を心がけますので、注意深く学習してください。	
到達目標	1. 各疾患の病態や特徴を述べることができる。 2. 各疾患の障害構造を評価するための評価項目が選択できる。 3. 各疾患の理学療法プログラムを立案できる。	
授業形態	座学	実習
関連科目	解剖学Ⅲ, 生理学Ⅰ・Ⅱ・実習, 検査測定法Ⅲ, 神経内科学, 病理学概論	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	総論	神経筋疾患の全体像を把握できる。授業で扱う疾患群を理解できる。
2回	末梢神経疾患の理学療法	末梢神経疾患の病態と理学療法が理解できる
3回	脱髄疾患の理学療法	脱髄疾患の病態と理学療法が理解できる
4回	神経筋接合部疾患の理学療法	神経筋接合部疾患の病態と理学療法が理解できる
5回	脊髄疾患の理学療法①	脊髄疾患の病態と理学療法が理解できる
6回	脊髄疾患の理学療法②	実習を含めた授業に取り組み、技術を体験することができる
7回	小脳疾患の理学療法	小脳疾患の病態と理学療法が理解できる
8回	パーキンソン病の理学療法	パーキンソン病の病態と理学療法が理解できる
9回	パーキンソン病の理学療法②	実習を含めた授業に取り組み、技術を体験することができる
10回	筋萎縮性側索硬化症の理学療法①	筋萎縮性側索硬化症の病態と理学療法が理解できる
11回	筋萎縮性側索硬化症の理学療法②	実習を含めた授業に取り組み、技術を体験することができる
12回	筋萎縮性側索硬化症の理学療法③	実習を含めた授業に取り組み、技術を体験することができる
13回	脳性麻痺者の理学療法①	脳性麻痺の病態と理学療法が理解できる
14回	脳性麻痺者の理学療法②	実習を含めた授業に取り組み、技術を体験することができる
15回	テスト	

成績評価	授業態度・出席状況・テスト結果（60点以上）
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅳ-A（呼吸）	単位	1	コマ数	30
担当講師	塩澤 和人	学 年		3年生	
資格	理学療法士。実務経験19年				

科目概要	高齢化に伴い呼吸器疾患患者は増加している。本授業では呼吸器疾患の理学療法ができるようになるために、呼吸器疾患の病態、評価、理学療法について学ぶ。				
学習の留意点	呼吸理学療法では多くのエビデンスが集積され、特に運動療法の継続が重要視されている。本中では呼吸器疾患の理学療法ができるようになるために、呼吸器疾患の病態、評価、理学療法について実技を交えて解説する。授業方法は「講義」、「実技」、「ケーススタディーを通してディスカッション、グループ発表」を予定している。呼吸器に関する解剖学、生理学を理解しておくことが望ましい。				
到達目標	1．呼吸器疾患の病態を説明できる。 2．呼吸器疾患に必要な評価項目を列挙できる。 3．呼吸器疾患の理学療法ができる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	解剖学	生理学		疾患別理学療法Ⅳ-B（循環代謝）	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	総論、運動生理学	なぜ呼吸理学療法が必要か/呼吸を運動生理学の観点から説明できる。
2回	慢性呼吸不全総論	呼吸器の解剖、生理学的背景/呼吸不全の診断基準を説明できる。
3回	フィジカルアセスメント	視診、問診、聴診、触診、打診ができる。
4回	呼吸機能の評価	スパイログラム、フローボリューム曲線、胸部X線写真を説明できる。
5回	呼吸理学療法評価	呼吸困難感、運動耐容能を説明できる。
6回	運動療法①	コンディショニング（口すぼめ呼吸、横隔膜呼吸、胸郭可動域の拡張）が説明できる
7回	運動療法②	全身持久・筋トレ、運動強度、中止基準、ADL訓練を説明できる。
8回	排痰法	体位排痰法、排痰手技（スクイーピング他）、ハフフィング・咳嗽を説明できる。
9回	外科手術前後、酸素療法	胸・腹部手術前後の理学療法、酸素療法の目的、HOTを説明できる。
10回	人工呼吸器	種類、構造、換気モード、病態を説明できる。
11回	演習①	呼吸器疾患のケーススタディー（ディスカッション）
12回	演習②	呼吸器疾患のケーススタディー（発表）
13回	吸引①	講義（意義、感染対策）を聞き、吸引法を説明できる。
14回	吸引②	実技を行い、痰の吸引ができる。
15回	総まとめ	復習を行い、呼吸理学療法について説明できる。

成績評価	筆記試験100%
課題やレポートに関するフィードバック	実技に関するフィードバックは実技練習中に、練習の後、個別または全体に対して適宜実施する。
使用教材教科書	標準理学療法学 内部障害理学療法学 第2版
オフィスアワー	担当授業の前後およびメール k-shiozawa@nichireha.ac.jp

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法IVB	単位	1	コマ数	15
担当講師	高瀬 慎輔	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	内部障害は外部からは障害があることが分かりにくい疾患である。身体の中で何が起きているかを理解し、理学療法士にとって重要なリスク管理に活かす知識を得るとともに、循環・代謝疾患別のそれぞれの治療について学ぶ				
学習の留意点	理学療法では、いかにしたらできるようになるかという障害学的分析に加えて、なぜそのような状態なのか、その症状や症候はどこから来ているのか、医学的情報を収集し、病態生理を理解する症候学的分析も重要である。「症状の正しい観察」こそが臨床理学療法の第一歩であり、観察を通じた患者の理解こそが内部障害理学療法の最大の醍醐味でもある。 本授業では、循環代謝障害に対する理学療法について、病態の理解、評価、理学療法等を解説する。授業方法は、「講義」「ケーススタディ」「ディスカッション」「グループ発表」で構成される。他者の意見や考えも取り入れながら理解を深める努力が必要である。				
到達目標	1. 各疾患の病態を説明し、評価、理学療法、リスク管理ができる。 2. 心電図から不整脈の種類とリスク管理を説明できる。 3. 適切な運動強度を接客できる。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	疾患別理学療法IVA	生理学Ⅰ		生理学Ⅱ	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	心リハの概要	目的や効果を理解できる
2回	起立性低血圧	正常な反応と原因について理解し説明できる
3回	虚血性心疾患①	心不全のメカニズムを理解できる
4回	虚血性心疾患②	心疾患の理学療法を提案できる
5回	不整脈と心電図①	刺激伝導系を理解できる
6回	不整脈と心電図②	正常洞調律を理解できる
7回	不整脈と心電図③	心房細動、心房粗動、期外収縮を理解できる
8回	不整脈と心電図④	ブロック波形を説明できる
9回	不整脈と心電図⑤	虚血と梗塞の心電図を理解できる
10回	代謝疾患①	評価、低血糖の危険を説明できる
11回	代謝疾患②	糖尿病の病態と合併症を説明できる
12回	代謝疾患③	運動療法を説明できる
13回	代謝疾患④	食事療法を説明できる
14回	代謝疾患⑤	薬物療法を説明できる
15回	代謝疾患⑥	糖尿病療養指導能力が身に着く

成績評価	定期試験を含む総合点で6割以上のものを合格とする
課題やレポートに関するフィードバック	FBは全体に実施する
使用教材 教科書	プリントにて資料配布
オフィスアワー	毎週月曜日12時～13時

		理学療法学科 夜間部			
科目	疾患別理学療法Ⅴ	単位	1	コマ数	15
担当講師	山本 紘靖	学 年		3年生	
資格	理学療法士 認定理学療法士（発達障害）				

科目概要	○本講義を通じて、小児期に原因を持つ疾患および障がいに対する理学療法の特性について教示する ○発達の段階において障害を有する全ての世代の人々の生活機能を改善することの重要性を説明する ○講義にて小児疾患の特性の確認をした上で、患者動画を使用しグループディスカッションを行う ○グループディスカッションでは理学療法評価として、評価項目を検討し、短期及び長期目標を設定する ○患児とその家族との関わり方についてディスカッションを通して理解する	
学習の留意点	『小児理学療法』の学習では乳幼児の発達の理論や特徴、障害を有する子どもの特徴や理学療法を具体的にイメージでき、理解につながることが大切です。さらに国家試験に向け、小児領域の問題の正確な理解につながる情報を十分に学ぶことが必要です。小児理学療法は障害特性を捉えにくくイメージしづらい部分もありますが、小児理学療法への興味や関心が湧くように、講義内なるべく多くのビデオや私の臨床経験を交えて、皆さんがイメージしやすいよう解説します。 皆さんの学びを促進できるよう、ディスカッションを通して主体的に受講して欲しいです。	
到達目標	①脳性麻痺や小児整形疾患、遺伝疾患、染色体異常、低出生体重児や発達障害などの疾患特性の理解する ②小児理学療法について、評価項目の選定と目標立案ができる ③家族へのかかわりを療育の観点でとらえ、小児に対する理学療法を理解する	
授業形態	講義およびグループディスカッション	対面と遠隔の併用授業
関連科目	人間発達学, 小児科学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	小児理学療法概論	小児に対する理学療法の概論について療育の観点も含め、理解する
2回	小児理学療法の特殊性と評価	成人に対する理学療法との共通点や差異について学び、小児理学療法の基本的概念と小児特有の評価について理解する
3回	人間発達学(運動発達)	正常な運動発達について学ぶ
4回	人間発達学(上肢・摂食・姿勢反応の発達)	上肢の発達について姿勢の安定と感覚の発達のかかわりと摂食機能の発達を理解する
5回	脳性麻痺概論	脳性麻痺の定義などの概論について学ぶ
6回	痙直型脳性麻痺(両麻痺)	痙直型脳性麻痺(両麻痺)の症状や評価について学ぶ
7回	痙直型脳性麻痺(四肢麻痺)	痙直型脳性麻痺(四肢麻痺)の症状や評価について学ぶ
8回	痙直型脳性麻痺(片麻痺)	痙直型脳性麻痺(片麻痺)の症状や評価について学ぶ
9回	アテトーゼ型脳性麻痺	アテトーゼ型脳性麻痺の症状や評価について学ぶ
10回	重度心身障害(重度脳性麻痺)	重度心身障害の各ライフステージに合わせた理学療法について学ぶ
11回	小児整形疾患（二分脊椎等）と筋ジストロフィー症	主な小児整形疾患（二分脊椎等）の各種症状と筋ジストロフィー症について学び、それぞれの疾患に合わせた評価や介入について学ぶ
12回	染色体異常（ダウン症候群）	ダウン症候群などの染色体異常の特徴的な症状について学ぶ
13回	早産児（低出生体重児・ハイリスク児）	早産児（低出生体重児・ハイリスク児）の評価や発達を促すための介入について学ぶ
14回	発達障害（発達性協調運動障害）と運動発達遅滞	発達障害（発達性協調運動障害など）や運動発達遅滞について学び成長発達を促すための配慮点や介入について理解する
15回	まとめ(国家試験の過去問題と質疑応答)	国家試験の過去問題を通して小児理学療法について知識の整理をする

成績評価	学期末に定期試験実施（マークシート形式） 成績は定期試験6割以上のものを合格とする
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項なし
使用教材 教科書	担当教員が作成した配布プリントを使用
オフィスアワー	質問は1 限目と 2 限目の間の休憩時間か、授業後に受け付けます

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法技術論Ⅰ	単位	1	コマ数	15
担当講師	鈴木 章規	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	本講義では、理学療法における臨床推論の知識と技術を学びます。運動科学の概念を基礎に、運動を重視した評価技術および治療技術を学びます。講義、ディスカッション、実技を組み合わせ、実践的なアプローチを重視します。評価関連の講義で得た知識を踏まえ、臨床推論力を高めます。		
学習の留意点	1. 臨床推論の意識 評価技術や治療技術を学ぶ際、単純手順の習得ではなく、「なぜこの評価が必要か」「どのような治療選択が正しいか」といった臨床推論を常に意識する。 2. 運動連鎖の理解 運動科学の概念を基礎に、局所的な問題だけでなく、全身の運動連鎖を考慮した評価・介入を行う視点を持つ。 3. 証拠に基づいた実践 最新の研究や証拠を取り入れ、従来の方法と比較しながら臨床的な有効性を検討する姿勢を養う。 4. 実技と理論の統合 実技で学んだ技術を、理論と照らし合わせて考え、無意識に模倣することで応用力を身につける。		
到達目標	・姿勢と動作の評価を行い、それを説明できるようになる。 ・治療技術について関心を持ち、患者の問題にあった治療手技を選択することができる。		
授業形態	講義	対面	
関連科目	運動学Ⅰ・Ⅱ, 検査測定法Ⅰ・Ⅱ, 運動療法学Ⅰ・Ⅱ, 疾患別理学療法Ⅰ・Ⅱ, 整形外科学Ⅰ・Ⅱ		

授業計画		
回数	授業内容	行動目標
1回	オリエンテーション	講義でやる事の説明
2回	姿勢・動作の 講義・演習	姿勢・動作の観察と検査
3回		
4回	下肢帯の検査 講義・演習	下肢帯の観察と検査、臨床推論、治療
5回		
6回		
7回		
8回	上肢帯の検査 講義・演習	上肢帯の観察と検査、臨床推論、治療
9回		
10回		
11回		
12回	体幹の検査 講義・演習	体幹のの観察と検査、臨床推論、治療
13回		
14回	まとめ	講義のまとめと接し方等
15回	実技演習	講義で学習した事の実践

成績評価	実技レポートと筆記試験の合計得点が6割以上
課題やレポートに関するフィードバック	特記事項梨
使用教材 教科書	配布資料
オフィスアワー	講義前後の休憩時間

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法技術論Ⅱ	単位	1	コマ数	15
担当講師	黒木光	学 年		3年生	
資格	理学療法士、薬剤師				

科目概要	理学療法技術論Ⅱは、臨床セラピストを招いて、専門的な領域を様々な角度から学ぶ授業になります。急性期の理学療法、足部からの評価と治療、リハビリテーションと栄養、筋骨格系の運動療法などの臨床で有用な実践的な内容を学びます。				
学習の留意点	この講義を最大限に活かすために、皆さんには、以下の点を意識し工夫していただきたいと思います。まず、講義へ積極的に参加することで、学びを深める第一歩を踏み出しましょう。質問や意見交換を通して理解を深めると共に、講義内容を自分の経験や周囲の事例と関連付け、症例情報とのつながりを見出すことで、より深い理解が得られます。講義内容をノートにまとめたり、参考文献を読んだりするなど、能動的な学習も心がけましょう。また、様々な病的な段階や個々の背景を持つ人々への理解を深め、多様性を尊重する視点を持つことも重要です。そして、わからないことはそのままにせず、積極的に質問し、疑問点を解消するように努めましょう。これらの点を意識することで、講義内容の理解が深まり、リハビリテーションの知識をより効果的に活用できるようになるでしょう。				
到達目標	①基礎知識の復習：運動学・解剖学に基づいた、理学療法技術の理論的根拠を理解できる。 ②基本技術の習得：主要な理学療法技術（運動療法、物理療法）を安全かつ正確に実施できる。 ③臨床応用力の基盤：対象者の状態を評価し、適切な理学療法技術を選択・応用するための思考力をつける。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	検査測定法Ⅰ～Ⅳ	運動療法		運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	足部の評価とインソール療法	足部の評価と歩容を関連付けることができる。
2回	足部の評価とインソール療法	足部の評価を実践できる。
3回	足部の評価とインソール療法	足部の評価からインソールを調整できる。
4回	足部の評価とインソール療法	足部の評価とインソールの効果を整理し、説明できる。
5回	リハビリテーションと栄養学	講義を聞き、栄養バランスについて理解できる。
6回	リハビリテーションと栄養学	栄養評価の項目を挙げ、患者評価ができる
7回	リハビリテーションと薬学	薬学の基本を理解できる
8回	リハビリテーションと薬学	薬学の基本を理解できる
9回	リハビリテーションと薬学	疾患ごとの薬物療法を理解できる
10回	リハビリテーションと薬学	疾患ごとの薬物療法を理解できる
11回	急性期の理学療法	急性期の全身状態の理解、評価項目を理解できる。
12回	急性期の理学療法	急性期の全身状態の理解、評価項目を理解できる。
13回	筋骨格系の評価と治療	モデルを対象に評価治療の流れを実践できる
14回	筋骨格系の評価と治療	モデルを対象に評価治療の流れを実践できる
15回	筋骨格系の評価と治療	実技の発表ができる

成績評価	授業課題、実技発表の評価で、6割以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	授業時に復習機会を設けてフィードバックする
使用教材 教科書	各内容で配布資料あり
オフィスアワー	毎週月曜日17時～18時

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法技術論Ⅴ	単位	1	コマ数	15
担当講師	内山 結城	学 年		3年生	
資格	内山：実務経験18年。IPNFA(国際PNF協会)認定セラピスト。 病院施設スポーツ整形クリニック等での経験後、現在はスポーツトレーナーとしても選手のケアや技術向上に携わっている。				

科目概要	この授業は中枢神経疾患、特に片麻痺患者に対する治療手技を学習するのが目的である。但し完全に確立された治療法はないため、様々な治療コンセプトに共通する中枢神経疾患に関する治療の考え方やタッチ・操作誘導を中心に授業を展開する。学生が臨床実習においてクライアントにハンズオンすることの意味を考えられるよう促していく				
学習の留意点	完全に確立された治療法はない。これは中枢神経系の傷害部位や程度によっても障害状況が異なること、中枢神経系の機能について不明なことが多いのも関係している。その状況で現在解明され発展してきている神経生理学による姿勢・運動制御をもとに、健康な人の姿勢や運動を理解することが、今後中枢神経疾患患者の姿勢・動作を見ていく上での基礎となると考える。したがってこの授業では、健康人の姿勢・運動を神経生理学的にとらえ、評価し基本動作を誘導していく技術を身につける事を目指す。				
到達目標	各病態を理解し基本的な運動療法を学習する。 ①運動療法の意義・目的を説明できる。 ②必要に応じた運動療法を選択することができる ③各病態を理解し基本的な運動療法を実施することができる。=授業設計シート!D33				
授業形態	講義		対面		
関連科目	解剖学	生理学		運動学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	神経生理学的基礎	神経系の発達と中枢神経系の役割について説明できる
2回	神経生理学的基礎	陽性兆候と陰性兆候について説明できる
3回	神経生理学的基礎	錐体路と錐体外路について説明石る
4回	神経生理学的基礎	F B、F Fについて説明できる
5回	バランスについて	筋緊張と姿勢の関係性について説明できる
6回	バランスについて	立位のポイント（アライメント、姿勢筋緊張、姿勢反応）が説明できる
7回	評価（立位）	立位のポイント（立位アライメント、姿勢筋緊張、姿勢反応）が説明できる
8回	治療、誘導（立位）	立位アライメントを改善することができる
9回	評価（坐位）	坐位のポイント（端座位アライメント、姿勢筋緊張、姿勢反応）が説明できる
10回	治療、誘導（坐位）	坐位アライメントを改善することができる
11回	評価（背臥位）	背臥位のポイント（背臥位アライメント、姿勢筋緊張、姿勢反応）が説明できる
12回	治療、誘導（背臥位）	背臥位アライメントを改善することができる
13回	動作評価（立ち上がり～歩行）	立ち上がり・歩行の相を分け動作を分析することができる
14回	治療、誘導（立ち上がり～歩行）	立ち上がり・歩行動作を改善することができる
15回	まとめ	各ハンドリングの復習

成績評価	小テストの合計、グループ（ペア）ワーク、まとめテスト、レポートの合計が60%以上
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材教科書	脳卒中後遺症者へのボバースアプローチ基礎編 古澤正道 運動と医学の出版社
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	総合演習Ⅲ	単位	1	コマ数	15
担当講師	篠田良平 黒木光	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床実習に向け、症例検討を通じて情報収集から治療プログラム立案までの流れを学び、実践する科目である。評価・治療の実技やコミュニケーション能力を養う課題にも取り組み、実践力の向上を図る。				
学習の留意点	臨床実習では、理学療法の流れを理解した上で、収集した情報を整理し、論理的に思考を展開する力が求められます。また、得た知識や判断を他者に分かりやすく伝えるコミュニケーション能力も重要です。はじめは難しく感じるかもしれませんが、繰り返し実践することで着実に身につきます。本科目では、アウトプットの機会を積極的に設け、知識を定着させるだけでなく、実践的な応用力を養います。課題に対しては、限られた時間内で適切にまとめ、提出できるよう意識して取り組みましょう。実習を意識しながら主体的に学ぶことで、臨床現場で求められる判断力や対応力の向上につながります。				
到達目標	①医療者としての自覚を持った行動が出来る。 ②各検査法のルールを理解し適切な評価が行える。 ③症例の特性を捉えて適切なプログラム立案が出来る。 ④わかりやすく論理的に動作姿勢の観察・分析が出来る。				
授業形態	講義		対面		
関連科目	疾患別離学療法	検査測定学		運動学実習	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	実習オリエンテーション	基本ルール、手順、書類の記入方法、医療者としての意識を学ぶ。
2回	理学療法の進め方	症例検討に関する考え方を学ぶ。
3回	FIM、ADL評価	臨床的な使用法を再考する。
4回	症例検討-頸部骨折-	課題に対し、自己学習、グループディスカッションできる
5回	症例検討-頸部骨折-	課題に対し、自己学習、グループディスカッションできる
6回	症例検討-膝OA術後-	課題に対し、自己学習、グループディスカッションできる
7回	症例検討-膝OA術後-	課題に対し、自己学習、グループディスカッションできる
8回	症例検討-脳血管疾患-	課題に対し、自己学習、グループディスカッションできる
9回	症例検討-脳血管疾患-	課題に対し、自己学習、グループディスカッションできる
10回	触察	狙った部位を正確に触診できるようになる
11回	疾患別移乗動作	疾患や自分の体格にあった移乗介助ができるようになる
12回	動作分析：起居～立ち上がり	動作観察・分析に関して別の視点から再考する。
13回	動作分析：歩行	動作観察・分析に関して別の視点から再考する。
14回	合同授業：症例報告会	相手の話を傾聴し、かつ自分の意見をわかりやすく伝えることができる。
15回	合同授業：実習引き継ぎ会	相手の話を傾聴し、かつ自分の意見をわかりやすく伝えることができる。

成績評価	課題や授業への参加・行動で成績をつけます。合計100点満点で、60点以上を合格とします。
課題やレポートに関するフィードバック	フィードバックは講義内で全体に実施する。
使用教材 教科書	配布資料、評価・疾患の授業で使用した教科書や資料
オフィスアワー	授業前90分、授業後30分

		理学療法学科 夜間部			
科目	地域理学療法学	単位	1	コマ数	15
担当講師	下村	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	高齢化が進む地域社会で、人々が住み慣れた場所で自分らしく生活できるよう支援する地域理学療法。本科目では、生活期リハビリテーションを軸に、予防や健康増進の視点も持ち、地域ニーズに応じた実践ができる人材を育成します。多職種連携や地域包括ケアシステムへの貢献も視野に入れます。				
学習の留意点	地域理学療法学習では、受け身にならず能動的な参加が不可欠です。先入観を排除し、地域や対象者を客観的に理解する姿勢を持ちましょう。疑問点は放置せず即座に質問し、多職種連携を意識して他職種の視点も学びます。常に倫理的配慮を心がけ、地域ニーズを深く捉え、教室での学習と地域での体験を繋げてください。自律的な学びを追求し、地域で貢献できる理学療法士を目指しましょう。				
到達目標	地域の健康課題を分析し、理学療法ニーズを説明できる。 生活期リハビリテーションを展開するための基本を実践できる。 多職種と連携し、地域包括ケアにおける理学療法士の役割を説明できる。 地域特性を考慮した理学療法プログラムの原案を立案できる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	理学療法管理学	生活環境学			

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	地域理学療法とは	地域理学療法の定義と意義を説明できる。
2回	地域理学療法と関連する制度の変遷	地域理学療法関連制度の変遷と現状を説明できる。
3回	地域包括ケアについて	地域包括ケアシステムの概要と目的を説明できる。
4回	障害者総合支援法	障害者総合支援法の対象とサービスを説明できる。
5回	介護保険制度①仕組み	介護保険制度の仕組みと保険者の役割を説明できる。
6回	介護保険制度②給付	介護保険制度の給付の種類と内容を説明できる。
7回	通所リハの機能と理学療法士の役割	通所リハの機能と理学療法士の役割を説明できる。
8回	通所介護、短期入所等	通所介護、短期入所等のサービスを列挙できる。
9回	訪問リハの機能と理学療法士の役割	訪問リハの機能と理学療法士の役割を説明できる。
10回	訪問、介護予防事業、総合事業	訪問、介護予防、総合事業等のサービスを列挙できる。
11回	介護老人保健施設、介護老人福祉施設の機能と理学療法士の役割	各種施設の機能と理学療法士の役割を説明できる。
12回	疾患別にみる地域理学療法の特徴	疾患別にみた地域理学療法の特徴を説明できる。
13回	災害支援における理学療法士の関わり	災害支援における理学療法士の関わりを説明できる。
14回	多職種連携・対人支援技術	多職種連携の意義と対人支援技術を説明できる。
15回	終末期の関わり方	終末期における理学療法士の関わり方を説明できる。

成績評価	1 0 0 % レポートで採点
課題やレポートに関するフィードバック	適宜、個人及び全体に実施。□
使用教材 教科書	配布資料
オフィスアワー	下村：授業前後及びメール（s-shimomura@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 夜間部			
科目	生活環境学	単位	1	コマ数	15
担当講師	下村	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	理学療法士が対象者の生活環境を包括的に理解し、その人に適した支援を実践するための基礎を築く科目です。住環境、地域環境、社会環境など、多様な環境要因が健康や生活に与える影響を学び、具体的な事例を通して、環境調整や社会資源活用に関する知識・スキルを習得します。				
学習の留意点	生活環境論では、講義内容を理解するだけでなく、常に当事者意識を持って学ぶことが重要です。多様な価値観を尊重し、将来の理学療法士としての役割を具体的にイメージしましょう。 学習効果を高めるため、日常生活での実践、関連知識の習得、グループワークでの積極的な意見交換を推奨します。疑問点は必ず解消し、学外活動への参加も視野に入れ、多角的な視点と実践力を養ってください。				
到達目標	対象者の生活環境を多角的に評価し、課題を発見できる。個別性に配慮した環境調整プランを立案し、多職種と連携して実践できる。				
授業形態	講義			対面	
関連科目	地域理学療法学	ADL			

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	生活環境のとらえ方 と日本における生活環境の特徴と課題	生活環境の概念、特徴を説明
2回	生活環境整備に関する法制度	関連法制度を説明
3回	介護保険における福祉用具と住宅改修	介護保険サービスを説明
4回	生活環境整備の進め方	環境整備プロセスを説明
5回	生活環境整備の基本〔段差・スペース・床材・手すり・建具〕	各要素の基本原則を説明、提案
6回	玄関・アプローチ・廊下・階段の環境整備	各場所の整備を説明、提案
7回	トイレの環境整備	トイレ整備を説明、提案
8回	浴室・脱衣室の環境整備	浴室・脱衣室整備を説明、提案
9回	台所・食堂・居間・寝室の環境整備	各居室整備を説明、提案
10回	疾患別環境整備①〔中枢神経障害〕	中枢神経障害に応じた整備提案
11回	疾患別環境整備②〔運動器障害〕	運動器障害に応じた整備提案
12回	地域における住環境整備と交通	地域住環境・交通課題を説明
13回	レポート発表	調査分析結果を発表
14回	福祉機器見学	福祉機器の特徴説明
15回	福祉機器見学	福祉機器の特徴説明

成績評価	レポート評価１００％
課題やレポートに関するフィードバック	
使用教材 教科書	配布資料
オフィスアワー	下村：授業前後及びメール（s-shimomura@nichireha.ac.jp）

		理学療法学科 昼間部			
科目	臨床実習 I	単位	8	時間数	360
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		3年生	
資格	理学療法士				

科目概要	学内で学んできたことを医療・介護・福祉の実習施設において、症例を担当し、理学療法で取り扱う主な疾患と障害の評価を通して、対象者の抱えている問題点の抽出を実施し、対象者にとって適切となる治療プログラムの作成ができる。 その際、評価項目の抽出法や問題点に対する解釈・統合について、根拠を持って指導者に説明ができる。				
学習の留意点	医療人としてふさわしい態度がとれているかどうかを最重要としてご指導ください。その上で、1年次から2年次の学びを踏まえて、より知識・技術が定着するようご指導ください。 現場の状況や学生の学びに資すると考えられる状況であれば、一部検査測定等の理学療法評価も実施機会が得られるようご配慮下さい。 4年次には、今実習を踏まえて治療し、その成果を評価し、治療プログラムの修正も行いますので、可能な範囲でその一連の流れも学べるようご配慮下さい。				
到達目標	医療機関や介護施設内で実習生としての立場を自覚しながら学ぶことができる。 対象者の抱える問題に対し評価項目の抽出ができる。 評価の結果から解釈統合し、問題点に対するゴール、治療プログラムの作成ができる。 1. 実習指導者へ適切な報告・連絡・相談を行い、患者・利用者に対して適切な態度で接することができる。 2. 選択した評価項目を適切な方法で、患者・利用者の状態を管理しながら評価を実施できる。 3. 検査測定の結果と対象者の動作を関連付けて統合解釈し、ゴール設定ができる。 4. 対象者に必要となる治療プログラムの作成ができる 5. 評価結果をわかりやすく指導者や患者・利用者に説明ができる。その際疑問・質問に対し対応できる。 6. 指導者からの指導に対し謙虚に受け取り、修正と改善ができる。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	基礎科目全般	専門基礎科目全般		専門科目全般	

授業計画		
回数	授業内容	行動目標
1回	理学療法の評価実習では、評価に関する検査測定の知識、技術を実習指導者の下で、担当症例に対し、一連の評価項目の抽出（カルテからの情報収集、問題点の考察、検査測定からの統合と解釈に基づく問題点の抽出）を通して、臨床問題解決能力と実践能力を実施する。 1. 実習前学習：評価実習で必要な知識・技術の定着を図る。 ① PBL学習において症例に対する問題解決能力を学習する。 ② OSCEによって技術の能力を評価する。 2. 評価実習（全国の医療施設・介護施設で実施する） 1) 患者・利用者に適切な検査測定の選択し評価を実施する。 2) 他部部門から患者・利用者に必要な情報収集を実施する。 3) 評価および情報収集から得られたデータをもとに統合と解釈ができる。 4) 得られたデータを整理・記録し、ゴール設定を実施する。 5) 対象者に必要となる治療プログラムの作成ができる。 （その際、実習指導者へ説明し、アドバイスをもらうことができる） 3. 実習地での報告会や学内発表で自身が経験・体験した内容について報告を行う。 4. 臨床実習Ⅱ（総合臨床実習）に向けて担当教員からフィードバックを受け、次の実習につなげる。	
2回		
3回		
4回		
5回		
6回		
7回		
8回		
9回		
10回		
11回		
12回		
13回		
14回		
15回		

成績評価	臨床実習指導者の評価および担当教員の評価、提出物、学内発表の内容を踏まえて総合的に判断する。
課題やレポートに関するフィードバック	実習後、学内にて発表・課題提出を行い、事後にフィードバックする。
使用教材教科書	学校指定ケーシー、白靴、実習にふさわしい身だしなみが必要。施設によるが、通院時はスーツ着用。評価器具や学生評価表やデイリーノート、出欠表など実習書類を持参する。
オフィスアワー	担任や理学療法学科教員

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法特論Ⅰ	単位	2	コマ数	30
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		4年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床現場では、医師の指示のもと、理学療法を実践し、日々理学療法評価および治療、そのための臨床推論を実施する。臨床実習Ⅰ・Ⅱを終了しているが、臨床現場に十分な準備をして臨むため、不足している解剖学的知識を深く習得するためのカリキュラムとなる。				
学習の留意点	学生が主体的に取り組めるように、グループの営みを日々確認し、適切にワークが進むように経過を観察し、状況に応じて介入する。				
到達目標	神経系・脈管系・内臓系・発生の構造と機能を理解する				
授業形態	0			対面	
関連科目	解剖学・生理学・運動学	理学療法評価学 理学療法治療学		臨床医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	中枢神経（脳）①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
2回	中枢神経（脳）②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
3回	中枢神経（脊髄）①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
4回	中枢神経（脊髄）②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
5回	末梢神経（脳神経）①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
6回	末梢神経（脳神経）②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
7回	末梢神経	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
8回	脳血管	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
9回	循環器①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
10回	循環器②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
11回	内臓諸器官①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
12回	内臓諸器官②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
13回	神経筋支配	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
14回	筋・靱帯	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
15回	発生と組織	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる

成績評価	筆記試験で60点以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	採点結果から苦手分野を把握し、重点的に取り組んでもらう部分を個別にフィードバックする。
使用教材 教科書	配布資料を活用
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法特論Ⅱ	単位	2	コマ数	30
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		4年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床現場では、医師の指示のもと、理学療法を実践し、日々理学療法評価および治療、そのための臨床推論を実施する。臨床実習Ⅰ・Ⅱを終了しているが、臨床現場に十分な準備をして臨むため、不足している生理学的知識を深く習得するためのカリキュラムとなる。				
学習の留意点	学生が主体的に取り組めるように、グループの営みを日々確認し、適切にワークが進むように経過を観察し、状況に応じて介入する。				
到達目標	神経系・脈管系・内臓系・発生の構造と機能を理解する				
授業形態	0		対面		
関連科目	解剖学・生理学・運動学	理学療法評価学 理学療法治療学		臨床医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	体温	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
2回	基礎代謝	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
3回	エネルギー代謝	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
4回	免疫①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
5回	免疫②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
6回	呼吸①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
7回	呼吸②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
8回	呼吸③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
9回	循環①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
10回	循環②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
11回	循環③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
12回	消化器①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
13回	消化器②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
14回	排尿	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
15回	排便	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる

成績評価	筆記試験で60点以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	採点結果から苦手分野を把握し、重点的に取り組んでもらう部分を個別にフィードバックする。
使用教材 教科書	配布資料を活用
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法特論Ⅲ	単位	2	コマ数	30
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		4年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床現場では、医師の指示のもと、理学療法を実践し、日々理学療法評価および治療、そのための臨床推論を実施する。臨床実習Ⅰ・Ⅱを終了しているが、臨床現場に十分な準備をして臨むため、不足している運動学的知識を深く習得するためのカリキュラムとなる。				
学習の留意点	学生が主体的に取り組めるように、グループの営みを日々確認し、適切にワークが進むように経過を観察し、状況に応じて介入する。				
到達目標	神経系・脈管系・内臓系・発生の構造と機能を理解する				
授業形態	0			対面	
関連科目	解剖学・生理学・運動学	理学療法評価学 理学療法治療学		臨床医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	機能解剖学①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
2回	機能解剖学②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
3回	機能解剖学③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
4回	機能解剖学④	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
5回	動作解析①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
6回	動作解析②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
7回	姿勢①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
8回	姿勢②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
9回	歩行①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
10回	歩行②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
11回	歩行③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
12回	運動制御①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
13回	運動制御②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
14回	運動学習①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
15回	運動学習②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる

成績評価	筆記試験で60点以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	採点結果から苦手分野を把握し、重点的に取り組んでもらう部分を個別にフィードバックする。
使用教材 教科書	配布資料を活用
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	理学療法特論Ⅳ	単位	2	コマ数	30
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		4年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床現場では、医師の指示のもと、理学療法を実践し、日々理学療法評価および治療、そのための臨床推論を実施する。臨床実習Ⅰ・Ⅱを終了しているが、臨床現場に十分な準備をして臨むため、不足している臨床医学の各々の領域の知識を深く習得するためのカリキュラムとなる。				
学習の留意点	学生が主体的に取り組めるように、グループの営みを日々確認し、適切にワークが進むように経過を観察し、状況に応じて介入する。				
到達目標	神経系・脈管系・内臓系・発生の構造と機能を理解する				
授業形態	0		対面		
関連科目	解剖学・生理学・運動学	理学療法評価学 理学療法治療学		臨床医学	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	骨関節障害①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
2回	骨関節障害②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
3回	骨関節障害③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
4回	神経・筋障害①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
5回	神経・筋障害②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
6回	神経・筋障害③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
7回	神経・筋障害④	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
8回	神経・筋障害⑤	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
9回	内部障害①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
10回	内部障害②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
11回	内部障害③	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
12回	内部障害④	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
13回	精神障害①	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
14回	精神障害②	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる
15回	小児疾患	グループワーク実施後、小テストにて授業内容を理解できる

成績評価	筆記試験で60点以上を合格とする。
課題やレポートに関するフィードバック	採点結果から苦手分野を把握し、重点的に取り組んでもらう部分を個別にフィードバックする。
使用教材 教科書	配布資料を活用
オフィスアワー	

		理学療法学科 夜間部			
科目	臨床実習Ⅱ	単位	16	時間数	720
担当講師	理学療法学科全教員	学 年		4年生	
資格	理学療法士				

科目概要	臨床実習Ⅱは、医療・福祉の施設での検査測定実習と治療実習を通して診療チームの一員として診療に参加し、基本的なリハビリテーション実施能力、理学療法実施能力を修得する。 1．急性期リハビリテーション、回復期リハビリテーション、地域（老人保健施設、通所施設）リハビリテーション、在宅（訪問）リハビリテーションの実際を経験し、その意義、必要性と役割について修得する。 2．全人的リハビリテーションを実施する際に必要な知識と技術を修得する。 3．最後の臨床実習として積極的行動し、専門職として相応しい態度・コミュニケーションで臨むこと。				
学習の留意点	医療人としてふさわしい態度がとれていることを前提にご指導ください。その上で、リスク管理や専門知識が深まること、理学療法評価を患者・利用者を通してスキルアップできること、臨床推論の機会を得られるようご配慮下さい。立案して理学療法プログラムの実施、改善による修正なども経験できるようにお願い致します。 学生が、診療参加型実習を通して、理学療法士の仕事の仕方や、他職種との連携等も学ぶ機会を作っていただきけうようご配慮下さい。 実習後、学内にてパワーポイント12枚のスライドにて発表を行います。可能であれば、伝達方法のご指導もお願い致します。				
到達目標	これでの臨床実習（早期見学実習：1年次、見学実習：1・2年次、検査測定実習：2年次、臨床実習Ⅰ：3年次）で積み上げてきたコミュニケーション能力、理学療法検査能力をもとに、指導者の指示のもと基本的理学療法が実施できることを目標とする。 まとめの臨床実習として、評価の検査・測定および患者像に対する評価を適切に実践し、問題点や患者情報から統合・解釈することによって問題点を抽出し、理学療法プログラムの立案および実施を学習する。				
授業形態	実習			対面	
関連科目	基礎科目全般	専門基礎科目全般		専門科目全般	

授業計画

回数	授業内容	行動目標
1回	これでの臨床実習（早期見学実習：1年次、見学実習：1・2年次、検査測定実習：2年次、臨床実習Ⅰ：3年次）で積み上げてきたコミュニケーション能力、理学療法検査能力をもとに、指導者の指示のもと基本的理学療法が実施できることを目標とする。 まとめの臨床実習として、評価の検査・測定および患者像に対する評価を適切に実践し、問題点や患者情報から統合・解釈することによって問題点を抽出し、理学療法プログラムの立案および実施を学習する。 ①理学療法士としての礼儀・礼節・接遇が体現でき、基本的なルールを遵守することができる。 ②医療安全についての基本事項を理解し、実践することができる。 ③状況に応じて、必要なタイミングで指導者やスタッフに連絡・報告・相談ができる。 ④基本的な理学療法実践能力： （患者・スタッフ等とのコミュニケーション、医療面接、理学療法、多職種連携）を修得する。 ⑤理学療法で必要なカルテ記載、情報提供書や申し送り書に触れ、実際に体験する。 ⑥診療の現場におけるカンファレンスに参加し、報告できる。 ⑦情報の入手法（論文検索）、適否の判断、診療への応用について、指導者と検証する。 ⑧機会があれば、学会や講習会、講演会等に参加する。	
2回		
3回		
4回		
5回		
6回		
7回		
8回		
9回		
10回		
11回		
12回		
13回		
14回		
15回		

成績評価	臨床実習指導者の評価および担当教員の評価、提出物、学内発表の内容を踏まえて総合的に判断する。
課題やレポートに関するフィードバック	実習後、学内にて発表・課題提出を行い、事後にフィードバックする。
使用教材教科書	学校指定ケーシー、白靴、実習にふさわしい身だしなみが必要。施設によるが、通院時はスーツ着用。評価器具や学生評価表やデイリーノート、出欠表など実習書類を持参する。
オフィスアワー	担任や理学療法学科教員